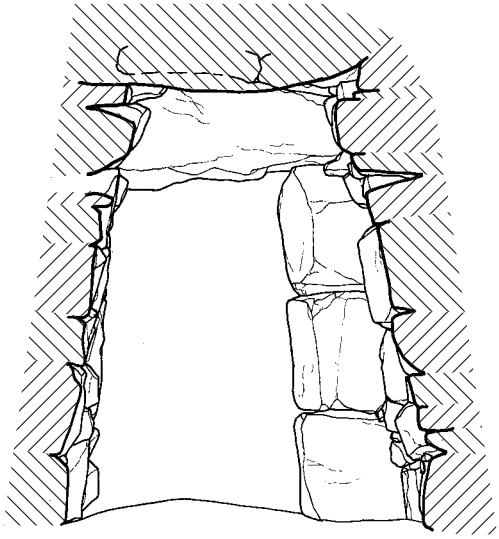
桜井市立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書　29集

桜　井　市

国 史 跡　珠 城 山 古 墳

―第4・5次調査及び史跡整備報告書―



2007．3．30

桜 井 市 教 育 委 員 会

序

珠城山古墳群は、桜井市北部の穴師に位置します。この地は垂仁天皇の宮である纒向珠城宮の伝承地でもあり、周囲にはヤマト政権発祥の地として名高い纒向遺跡が広がっています。そのような地にある珠城山古墳群は６世紀代に築造された前方後円墳３基から構成されている古墳群です。巨大な墳丘や巨石を用いた横穴式石室を造るために今日の私たちでは想像できないほどの多大な労力を費やしたことでしょう。昭和30年代の調査時に出土した金銅装馬具や環頭大刀をはじめとする豪華な副葬品をみても、当時の最新技術を駆使したものと思われ、被葬者の権力の大きさがうかがわれます。

しかしながら、珠城山古墳群は1950年頃から行われた度重なる土砂採集により、３号墳の大部分を失ってしまいました。その後、地元の皆様の協力もあって残された部分は保存され、この遺跡の重要性を鑑みて1978年２月に国史跡に指定されました。桜井市では、このような珠城山古墳群を地元の方々をはじめとした様々な方に、広く知っていただくために史跡整備を行いました。本書は、それにともなう発掘調査と整備工事の報告書であります。これを機会に多くの人々が古墳を訪れ、貴重な歴史遺産である珠城山古墳群への理解と愛着を深めていただければ誠に幸いです。

最後になりましたが現地調査および整備工事にあたりまして協力していただいた地元協力者の方々、指導・助言を頂いた関係諸機関の方々、また、実際に調査及び整理作業にあたっていただいた作業員、整理員の方々や学生諸君に深く御礼申し上げ、序の言葉にかえさせていただきます。

平成19年３月30日

桜井市教育委員会

教育長　石　井　和　典

例　　言

1．本書は奈良県桜井市穴師に所在する国指定史跡珠城山古墳群の整備事業に伴う範囲確認調査及び整備工事の報告書である。本事業は平成16年度から18年度の３ヶ年にかけて実施した。
2．桜井市教育委員会事務局が事業主体となり、文化庁、奈良県教育委員会文化財保存課及び山の辺古墳群整備検討会の指導・助言のもと、国庫及び県費による補助金の交付を受け事業を実施した。
3．整備工事および発掘調査担当者：清水眞一（～平成16年度）、丹羽恵二
4．整備工事に関する測量及び工事委託などに関する業務では桜井市土木課主任松浦剛史の協力を得た。工事の実施設計は㈱太平洋エンジニアリング、工事の施工は、㈱堤野組・㈱岡本組が行った。また、工事の実施にあたっては、宮尾茂氏及び穴師・巻野内区の地元の皆様のご協力を賜った。ここに深く感謝いたします。
5．執筆・編集者：本書のうち、第８章第１節は橋爪、それ以外の執筆・編集は丹羽が行った。
6．本書の遺構平面図等で使用している座標値は、平成16・17年度に実施した調査では平成14年４月より採用された世界測地系とそれ以前の旧日本測地系の双方を併用しており、世界測地形をＸ＝－○○○、旧日本測地系を（旧Ｘ＝－○○○）と表記している。それ以前のものについて座標測量を行ったものについては旧日本測地系のみを記している。なおレベル高はすべて海抜高（T.P）を表す。方位は図５、６は磁北、それ以外は座標北を表している。
7．本書記載の土器実測図の断面は、土師器・黒色土器・土師質系のもの－白、須恵器・陶器・須恵質－黒としている。
8．図版の遺物番号は、該当する各章の遺物番号に対応する。
9．出土遺物および調査記録については、桜井市教育委員会が保管している。活用されたい。

目　　次

第１章　整備事業の経緯と体制 ……1
　第１節　整備事業に至る経緯 ……1
　第２節　整備事業の体制 ……1
　第３節　整備事業の日程 ……2
　第４節　発掘調査の概要 ……3
第２章　位置と環境 ……5
　第１節　地理的環境 ……5
　第２節　歴史的環境 ……5
第３章　既往の調査 ……9
　第１節　はじめに ……9
　第２節　第１次発掘調査の概略 ……9
　第３節　第２次発掘調査の概略 ……10
　第４節　第３次発掘調査の概略 ……12
第４章　第４次調査報告 ……16
　第１節　墳丘の調査 ……16
　第２節　出土遺物 ……25
第５章　第５次調査報告 ……31
　第１節　墳丘の調査 ……31
　第２節　出土遺物 ……38
第６章　珠城山１号墳横穴式石室測量報告 ……42
　第１節　はじめに ……42
　第２節　横穴式石室と墳丘の関係 ……42
　第３節　横穴式石室 ……46
第７章　整備工事 ……47
　第１節　はじめに ……47
　第２節　基本方針および全体計画 ……47
　第３節　整備工事 ……47
　第４節　まとめ ……49
第８章　過去の調査の出土遺物について ……54
　第１節　第２次調査出土遺物－奈良国立博物館所蔵の珠城山３号墳出土埴輪－ ……54
　第２節　第３次調査出土遺物 ……59
第９章　総括 ……67
　第１節　珠城山古墳群の調査結果 ……67
　第２節　古墳時代後期以外の珠城山丘陵の利用について ……69
編集後記 ……73

表　目　次

表１　木棺墓出土鉄釘一覧表……28
表２　第４次調査出土遺物一覧……71
表３　第５次調査出土遺物一覧……72
表４　第３次調査出土遺物一覧……72

挿　図　目　次

図１　調査区配置図（S=1/1200）……3
図２　周辺位置図（S=1/15000）……6
図３　珠城山古墳群見取図……9
図４　珠城山１号墳土器出土状況……10
図５　珠城山古墳群平面図（S=約1/2000）……11
図６　珠城山３号墳横穴式石室（S=1/100）……12
図７　珠城山古墳群測量図（S=1/600）……13・14
図８　第３次調査出土埴輪列（S=1/60）……15
図９　第１トレンチと第３次調査トレンチ（S=1/200）……16
図10　第２トレンチ平面・断面図（S=1/80）……17
図11　第４トレンチ平面・断面図（S=1/80）……18
図12　第５トレンチ平面・断面図（S=1/80）……19
図13　第６トレンチ平面・断面図（S=1/100）……21
図14　SX1605平面・断面図（S=1/40）……22
図15　木棺墓遺物出土状況（S=1/20）……23
図16　第８トレンチ平面・断面図（S=1/80・1/40）……24
図17　第４次調査出土円筒埴輪（S=1/3・1/4）……25
図18　第４次調査出土土器（１）（S=1/3）……26
図19　第４次調査出土遺物（２）（S=1/3）……26
図20　木棺墓出土鉄釘（１）（S=1/2）……27
図21　木棺墓出土鉄釘（２）・刀子（S=1/2）……28
図22　鉄釘模式図……28
図23　第４次調査出土遺物（S=1/2・S=1/3）……29
図24　第２トレンチ出土鉄製品（S=1/2）……30
図25　第３トレンチ平面・断面図（S=1/80）……31
図26　第７トレンチ平面・断面図（S=1/80）……32
図27　第９トレンチ平面・断面図（S=1/80）……33

図28　第10トレンチ平面・断面図（S=1/80）……34
図29　第11トレンチ平面・断面図（S=1/80）……36
図30　土壙墓遺物出土状況（S=1/40）……36
図31　第12トレンチ平面・断面図（S=1/80）……37
図32　第５次調査出土土器・土馬（S=1/3）……38
図33　第５次調査出土円筒埴輪（１）（S=1/4）……39
図34　第５次調査出土円筒埴輪（２）（S=1/3）……40
図35　第５次調査出土円筒埴輪（３）（S=1/3）……41
図36　第１次調査１号墳後円部横穴式石室（S=約1/100）……42
図37　１号墳石室座標位置（S=1/100）……42
図38　１号墳の墳丘と石室（S=1/400）……43
図39　１号墳横穴式石室（現況）（S=1/50）……44
図40　１号墳横穴式石室（復元）（S=1/50）……45
図41　保存整備工事計画平面図……50
図42　標準断面・側面図１……51
図43　標準断面・側面図２……52
図44　標準断面・側面図３……53
図45　巫女形埴輪出土状況……54
図46　３号墳出土巫女形埴輪（S=1/4）……55
図47　第３次調査出土土器（S=1/3）……59
図48　第３次調査出土円筒埴輪（１）（S=1/4）……60
図49　第３次調査出土円筒埴輪（２）（S=1/4）……61
図50　第３次調査出土円筒埴輪（３）（S=1/4）……62
図51　第３次調査出土円筒埴輪（４）（S=1/4）……63
図52　盾持人物埴輪復元図（１）（S=1/6）……64
図53　盾持人物埴輪復元図（２）（S=1/6）……65
図54　珠城山古墳群墳丘復元図（S=1/1000）……68

図　版　目　次

図版１　珠城山古墳群全景
珠城山古墳群遠景（南より　奥に渋谷向山古墳を望む）
上空からみた珠城山古墳群（上が北）
図版２　第４次調査（1）
第１トレンチ南（東より）
第１トレンチ北（西より）
第２トレンチ全景（北より）

図版３　第４次調査（2）
第２トレンチ東壁断面（北西より）
第４トレンチ全景（北より）
第４トレンチ西壁断面（北東より）
図版４　第４次調査（3）
第５トレンチ全景（北より）
第５トレンチ東壁断面１（北西より）
第５トレンチ東壁断面２（北西より）
図版５　第４次調査（4）
第５トレンチ土器出土状況
第６トレンチ全景（北より）
第６トレンチ西壁断面１（北西より）
図版６　第４次調査（5）
第６トレンチ西壁断面２（北東より）
第６トレンチ　SX1605上層（南東より）
第６トレンチ　SX1605下層（南西より）
図版７　第４次調査（6）
第６トレンチ　木棺墓検出状況（北東より）
第６トレンチ　木棺墓横断面（東より）
第６トレンチ　木棺墓土遺物検出土状況（北東より）
図版８　第４次調査（7）
第６トレンチ　木棺墓西側遺物出土状況１（東より）
第６トレンチ　木棺墓西側遺物出土状況２
第６トレンチ　木棺墓西側刀子出土状況
図版９　第４次調査（8）
第６トレンチ　木棺墓東側遺物出土状況１（西より）
第６トレンチ　木棺墓東側遺物出土状況２（西より）
第６トレンチ　木棺墓完掘状況（北より）
図版10　第４次調査（9）
第８トレンチ全景（東より）
第８トレンチ　１号墳墳丘断面（西より）
第８トレンチ　２号墳墳丘断面（北東より）
図版11　第４次調査（10）
第８トレンチ　ピット群（北東より）
第８トレンチ　SP1801断面（北より）
第８トレンチ　SP1802断面（北より）

図版12　第４次調査出土遺物（1）
図版13　第４次調査出土遺物（2）
図版14　第４次調査出土遺物（3）
図版15　第４次調査出土遺物（4）
図版16　第５次調査（1）
第３トレンチ全景（東より）
第３トレンチ断面（東より）
第７トレンチ全景（東より）
図版17　第５次調査（2）
第７トレンチ北壁断面（南東より）
第７トレンチ　SK1701断面（北より）
第９トレンチ全景（北より）
図版18　第５次調査（3）
第９トレンチ　1号墳墳丘と東壁断面（北西より）
第10トレンチ全景（北より）
第10トレンチ東壁断面（北より）
図版19　第５次調査（4）
第10トレンチ　1号墳くびれ部（北東より）
第11トレンチ全景（北より）
第11トレンチ　東壁断面（北西より）
図版20　第５次調査（5）
第11トレンチ　土壙墓検出状況（南東より）
第11トレンチ　土壙墓全景（北西より）
第11トレンチ　土壙墓須恵器出土状況
図版20　第５次調査（5）
第11トレンチ　土壙墓検出状況（南東より）
第11トレンチ　土壙墓全景（北西より）
第11トレンチ　土壙墓須恵器出土状況
図版21　第５次調査（6）
第12トレンチ全景（西より）
第12トレンチ北壁断面１（西より）
第12トレンチ北壁断面２（西より）
図版22　第５次調査出土遺物
図版23　珠城山１号墳横穴式石室
石室開口部
石室奥壁
石室玄門部

図版24　整備工事（1）
南側階段
南側階段設置状況
南側防護柵
図版25　整備工事（2）
園路設置前
土系舗装施工状況
園路設置完了状況
図版26　整備工事（3）
用水枡取壊し前
用水枡埋戻し状況
用水枡埋戻し完了状況
図版27　整備工事（4）
２号墳くびれ部施工前
２号墳くびれ部盛土完了状況１
２号墳くびれ部盛土完了状況２
図版28　整備工事（5）
北側階段設置前
北側階段設置状況
北側階段設置完了状況
図版29　整備工事（6）
北側広場整備前
北側広場整備作業状況
北側整備完了後
図版30　整備工事（7）
北側広場看板移動後
仮設道路施工前
仮設道路撤去後
図版31　整備工事（8）
案内板１・２設置状況
説明板１・２設置状況
図版32　第２次調査遺物
珠城山３号墳出土巫女形埴輪
図版33　第３次調査出土遺物（1）
図版34　第３次調査出土遺物（2）
図版35　第３次調査出土遺物（3）
図版36　盾持人物埴輪

第１章　整備事業の経緯と体制

第１節　整備事業にいたる経緯

桜井市穴師に所在する珠城山古墳群は古墳時代後期の前方後円墳３基からなる古墳群で、昭和30年代の調査により１号墳や３号墳の横穴式石室の内部から多数の副葬品が出土した。しかし、度重なる開発により３号墳の大部分が削平され、前方部の一部を除いて消滅した。その後、昭和53年２月８日に文部省告示第22号で国史跡に指定され、１・２号墳及び３号墳前方部が保存された。それを受けて、昭和53～55年度にかけて３年間で土地買収事業に入り、全域を公有化した。続いて、史跡環境整備にむけて、昭和59年に度墳丘測量及び実施設計を行い、見学者用の看板を設置した。昭和60年には２号墳及び３号墳の墳丘範囲確認のための発掘調査を花園大学考古学研究室に依頼して行い、３号墳西側の崖面保護のために一部擁壁工事を行った。その後中断期間をはさんで、史跡環境整備を目指し平成16年度に「山の辺古墳群整備検討委員会」を発足させ、珠城山古墳群の整備計画を再開することになり、平成18年度までの３ヶ年計画によって整備事業を行うことにした。

第２節　整備事業の体制

本整備事業は桜井市教育委員会が主体となって、国庫および県費による補助金の交付を受けて実施した。事業を進めるにあたって、文化庁、奈良県教育委員会文化財保存課及び山の辺古墳群整備検討委員会の指導・助言のもと珠城山古墳群の墳丘範囲確認調査及び整備工事計画を策定した。山の辺古墳群整備検討委員会及び桜井市教育委員会の事業体制は以下のとおりである。

山の辺古墳群整備検討委員会

委員長	桜井市助役	吉川益弘
委　員	徳島文理大学大学院教授	石野博信
	奈良県教育委員会文化財保存課長	宮谷　太
	奈良県教育委員会文化財保存課主幹	寺沢　薫（～平成17年度）
	主幹	西藤清秀（平成17年度）
	係長	池田昌義
	奈良県立橿原考古学研究所研究部長	松田真一（～平成17年度）
		寺沢　薫（平成17年度～）
	大和文化財保存会専務理事	武部宏明
	桜井市教育委員会教育長	石井和典

桜井市教育委員会事務局

事務局長　森北好則

事務局次長　中川行央（～平成17年度)、瀬川憲嗣（平成18年度～）

文化財課長　清水真一（～平成16年度)、森　幹雄（平成17年度～）

文化財係長　杉本好成、　文化財係主査　堀尾えい（～平成16年度）

主任　橋本輝彦、松宮昌樹、技師　福辻淳、丹羽恵二

臨時職員　木場佳子、清水哲（～平成17年度)、橋爪朝子（平成17年９月～）

辰巳智圭子（平成17年度～平成18年９月)、堤野真衣（平成18年10月～）

第３節　整備事業の日程

珠城山古墳群の史跡整備計画事業を進めていくにあたって、平成16年８月２日に第１回整備検討委員会が開催された。その後の随時の整備検討委員会を開催し、平成16・17年度に発掘調査、基本計画の決定、平成17年度に実施設計、平成18年度に整備工事の実施という事業計画を進めていった。検討委員会の名簿、整備事業の日程は以下のとおりである。

整備事業の日程（抄）

平成16年度

平成16年８月２日　　第１回整備検討委員会

・山の辺古墳群整備検討委員会が行われ、珠城山古墳群の基本整備計画、範囲確認調査などについて審議する。

平成16年９月16日　　第２回整備検討委員会

・整備検討委員参加のもと現地において､発掘調査区の位置や整備の方向性について検討を行う。

平成17年２～３月　　第４次発掘調査

・古墳墳丘確認の為の発掘調査（６ヶ所）を行う。

平成17年３月17日　　第３回整備検討委員会

・現地において、整備検討委員と桜井市担当者により発掘調査の成果について検討を行い、今後の整備及び平成17年度の発掘調査の発掘調査について審議する。

平成17年度

平成17年８～10月　　第５次発掘調査

・平成17年３月の発掘調査の整備委員との検討をもとにして、平成16年度の発掘調査の補足を行う。

平成17年10月７日　　第１回整備検討委員会

・発掘調査結果のもと整備検討委員会を開催し、基本計画を決定する。

平成17年９～３月　　実施設計書の作成

・整備検討委員会の結果をもとにして実施設計書を作成する

平成18年度

平成18年６月～３月　　平成16～17年度の遺物整理及び報告書の作成。

平成18年１月～２月　　整備工事実施。

第４節　発掘調査の概要

（１）発掘調査区の設定（図１）

珠城山古墳群の過去の調査は、１号墳及び３号墳の主体部の調査が主であり、墳丘範囲確認が行われたのは昭和60年度の第３次調査の２・３号墳間のみである。それ以外の箇所で墳丘の規模や形状を推定できる資料は現況測量図以外なかった。よって、今回の調査は各古墳の墳丘範囲確認を主な目的とし、整備検討委員会のもと調査計画をたてた。

珠城山古墳群は、先述したように３号墳の大部分は既に消滅している。その他でも、これまでの経緯や現況測量図をみると、少なからず改変を受けている。１号墳の南斜面及び前方部前面、２号墳の後円部北東・南側及び前方部北西・北東隅、くびれ部などは、後世の耕作や土取り、道路などによって大きく削平を受けたと思われる。とくに古墳群南斜面は改変が大きく、市道に接し急斜面であったため調査区を設定するのは安全面からみても困難であった。よって比較的旧状をとどめている古墳群北側を中心に調査区を設定した。３号墳は過去に調査されているため、１・２号墳の北側の墳丘裾部及び１・２号墳間に調査区を設定した。第１～２・４～11トレンチについては第１回整備検討委員会で決定されたものである。第３トレンチは、当初、第４トレンチに対応するように、くびれ部付近の前方部北端に調査区を設定していたが、第４次－４トレンチの成果が後世の削平により芳しくなかったことや、整備工事で２号墳くびれ部に盛土を施す案が出たため、図１のような位置に変更した。また、第12トレンチは平成16年度第３回整備検討委員会において、２号墳の前方部前面ラインの傾きを検討するべきという意見が出されたため、第５次発掘調査において新たに設定した調査区である。最終的な調査箇所は図１のとおりである。

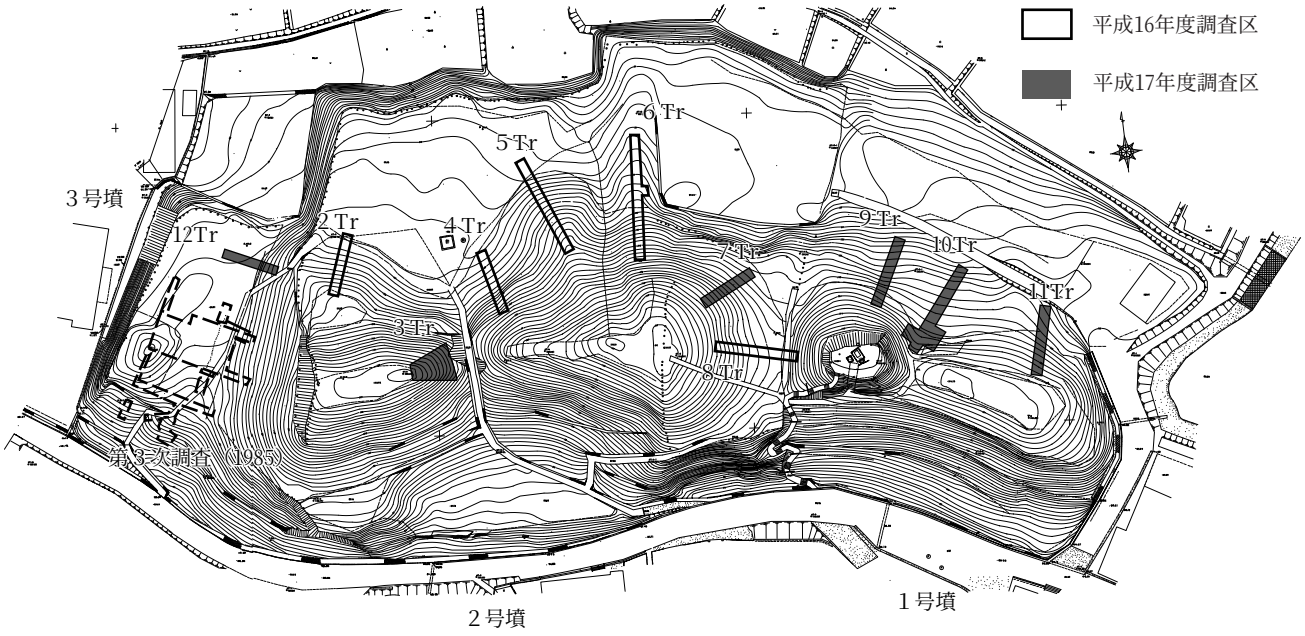


図１　調査区配置図（S＝1／1200）

（２）発掘調査および報告書作成体制

平成16・17年度に行った第４・５次発掘調査および平成18年度の遺物整理、報告書作成は、整備検討委員会の指導・助言のもと桜井市教育委員会文化財課がおこなった。発掘調査および遺物整理の参加者は以下のとおりである。

調査担当者：丹羽恵二

調査補助員：安井隆浩、堂浦千景、萩原良子、
福西貴彦（奈良大学大学院）、辻利耶子（神戸女子大学大学院）、
西本和哉（奈良大学）

調査作業員：井上久幹、上田猛、川島利市郎、佐野圭造、嶋岡達雄、辻カズ子、宮前秀年

整理作業及び報告書作成：上記調査補助員ならびに嶋岡由美、大島郁美、更谷綾、
西谷麻衣子（奈良女子大学大学院）、岩城圭吾（天理大学）

現地調査及び報告書作成協力者

第４・５次調査をはじめとし、第１～３次調査出土遺物などに関しての方々から様々なご指導、ご教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表します（整備検討委員は除く、敬称略、順不同）。

萩原儀征（考古学協会会員）、苅谷俊介（同）、河上邦彦（神戸山手大学）、
千賀久（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、青柳泰介（奈良県立橿原考古学研究所）、
吉澤悟（奈良国立博物館）・岩戸晶子（同）、濱口和弘（橿原市教育委員会）、
奥田尚（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

珠城山古墳群の所在する桜井市は、奈良盆地の南東部に位置する人口６万余人、面積98.93㎢の都市である。北は天理市、東は都祁村、宇陀市、西は田原本町・橿原市、南は明日香村・吉野町などの各市町村と境を接している。JR線や近鉄線などの鉄道や国道により、大阪などの大都市と結ばれるなど近郊都市としての様相をみせている一方で、ハイキングコースである山の辺の道や纒向遺跡などに代表される古代遺跡、長谷寺、談山神社などの文化財が豊富な観光都市しての側面をもっている。

桜井市域の約80％は山地が占め、東に三輪山、巻向山、穴師山、龍王山といった山々が南北に連なっている。それらの山地形は北方の奈良市にかけて続いており、現代でも自然が多く残されており「大和青垣国定公園」にも指定されている地域でもある。これらの山地から幾多の西へのびる丘陵が派生し、その谷筋から纒向川をはじめとする小河川が西に幾本も流れ、山麓部では扇状地を形成している。

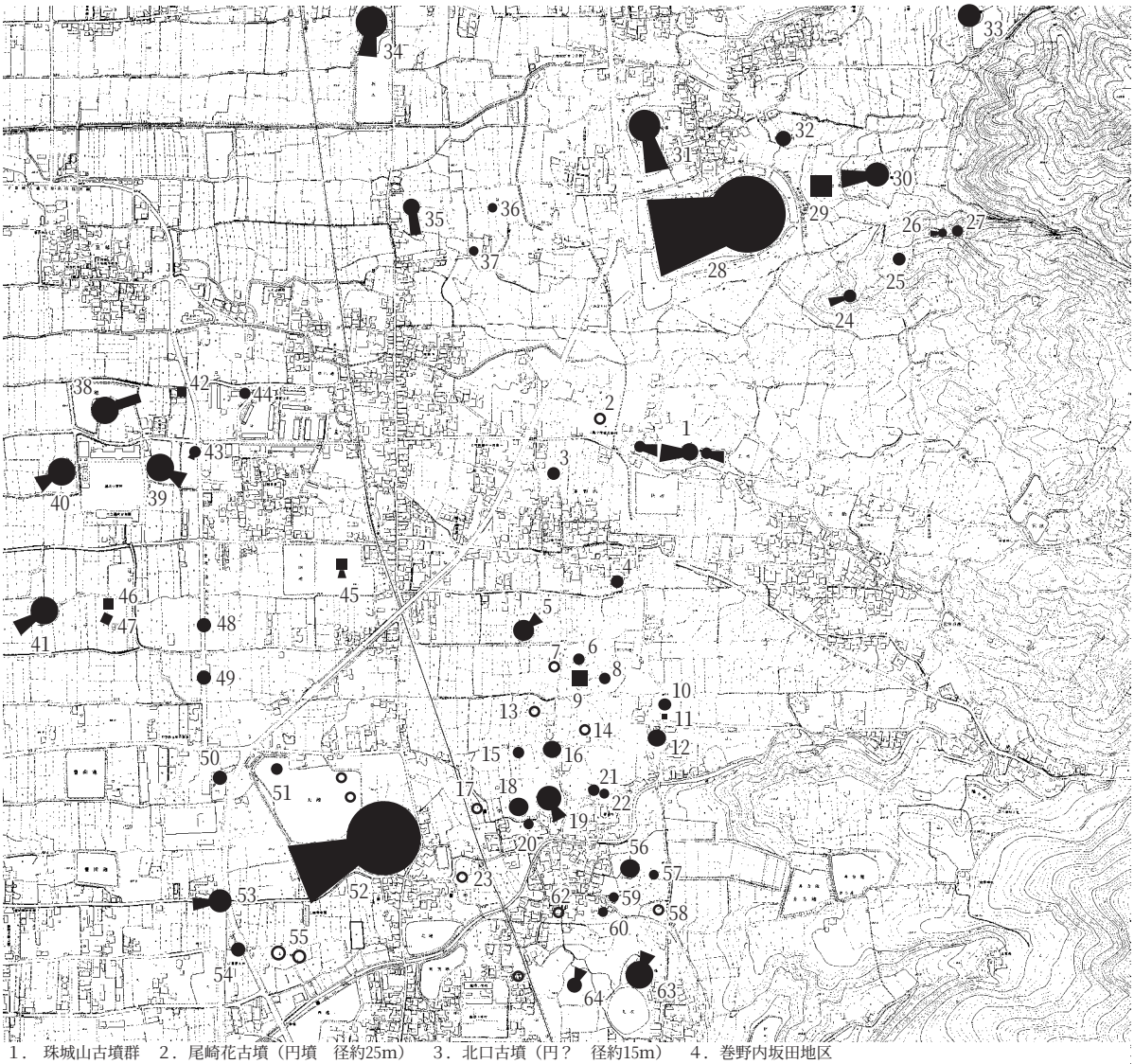
その中でも珠城山古墳群は、穴師山から西へ派生する珠城山丘陵上に位置する。珠城山の東側が玉池や市道により寸断され、一度低くなっているため独立丘陵状を呈しているが、西に派生する尾根の先端部である。古墳群周辺は、三輪山麓を起点とした龍王山系の西山麓にそって北上するハイキングコースである山の辺の道がとおり、田畑や果樹園が多く残り市街化開発がさほど進んでいない場所である。

第２節　歴史的環境

珠城山古墳群はヤマト政権発祥の地として全国的に有名な纒向遺跡内に位置している。纒向遺跡は庄内式期～布留式期にかけての遺構が豊富に検出されているが、古墳をはじめとし、古墳時代中期末～後期の遺構も一定程度みられ、遺物量も比較的多い[1)]。ここでは珠城山古墳群を中心とした地域の中で、古墳時代前期から後期にかけての古墳の動向をみていきたい。

珠城山古墳群の西方では纒向石塚古墳[2)]・勝山古墳[3)]・東田大塚古墳[4)]・矢塚古墳[5)]などの庄内～布留式期にかけて展開する一群が、南方には箸墓古墳[6)]、ホケノ山古墳[7)]などで構成される古墳群が存在する。また、北方には渋谷向山古墳や行燈山古墳・天神山古墳[8)]、櫛山古墳、柳本大塚古墳などの柳本古墳群が展開し、発生期の前方後円墳をはじめとして、３世紀から４世紀にかけての巨大墳墓が集中する地域である。また、後世に削平されていたため、現状では認識できないが、３世紀代に築造されたものとしてメクリ１号墳[9)]（前方後方墳）、南飛塚古墳[10)]、４世紀代に築造されたものとして箸中ビハクビ古墳[11)]、箸中イヅカ古墳[12)]などが発掘調査により発見されている。また、巻野内坂田地区[13)]では、布留１式期と思われる鶏形や冠形の形象埴輪が出土しており古墳の可能性が考えられている。

古墳時代中期になると目立った古墳が築かれなくなる。纒向川より南側で、全長約45mの茅原大墓古墳[14)]がわずかに築かれるのみである。この傾向は桜井市域全体でも同様で、30m以下の中小古墳が



1．珠城山古墳群　2．尾崎花古墳（円墳　径約25m）　3．北口古墳（円？　径約15m）　4．巻野内坂田地区
5．巻野内石塚古墳（前方後円墳　全長約60m）　6．サシコマ古墳（円　径13m）　7．石田古墳（円？　径約15m）　8．小川塚東古墳（円　径34m）
9．小川塚西古墳（方　1辺41m）　10．池田1号墳（円　径約18m）　11．池田2号墳（方）　12．平塚古墳（円　約35m）　13．石塚古墳（古墳？）
14．小川塚古墳（古墳？）　15．茶ノ木塚古墳（円　約28m）　16．北口塚古墳（円　約25m）　17．神上塚（古墳？　径役3m）
18．堂ノ後古墳（前方後円墳　全長60以上）　19．ホケノ山古墳（前方後円墳　全長約80m）　20．宮ノ前古墳（円　約径15m）
21．慶運寺円墳（円　約12m）　22．慶運寺古墳（円？　約13m）　23．八王子古墳（古墳？）　24．立石古墳（前方後円墳　全長約30m）
25．立子塚古墳（円　径約25m）　26．立子古墳（前方後円墳　全長約35m）　27．クノボ古墳（古墳？）　28．渋谷向山古墳（前方後円墳　全長約300m）
29．赤坂古墳（方　一辺約25m）　30．シウロウ塚古墳（前方後円墳　全長約120m）　31．上ノ山古墳（前方後円墳　全長約140m）
32．丸山古墳（円　径約20m）33．カタ塚古墳（前方後円墳　全長約70m）　34．石名塚古墳（前方後円墳　全長約110m）
35．柳本大塚古墳（前方後円墳　全長約92m）　36．茶臼山古墳（円　径約20m）　37．岩上古墳（古墳？）　38．勝山古墳（前方後円墳　全長約110m）
39．纒向石塚古墳（前方後円墳　全長約96m）　40．矢塚古墳（前方後円墳　全長96m）　41．東田大塚古墳（前方後円墳　全長約96m）
42．勝山東古墳（方　一辺約25m）　43．石塚東古墳（帆立貝形古墳　全長約20m）　44．トリイノ前古墳（円）
45．メクリ1号墳（前方後方墳　全長約28m）　46．ヤナイタ1号墳（方）　47．ヤナイタ2号墳（方）　48．堀川1号墳（円）　49．堀川2号墳（円）
50．箸中ビハクビ古墳（前方後円墳？）　51．堂後古墳群　52．箸墓古墳（前方後円墳　全長約280m）　53．箸中イヅカ古墳（前方後円墳？）
54．稲荷山古墳（円　径約10m）　55．原田古墳群　56．ツヅロ塚古墳（円　径約30m）　57．ツグロ塚古墳（円　径約20m）　58．藤ヶ森古墳（円？）
59．狐塚古墳（円　径約6m）　60．北石神塚古墳（円　約径22m）　61．南石神塚古墳（円？）　62．馬塚古墳（円？）
63．茅原大墓古墳（前方後円墳　全長約45m）　64．毘沙門塚古墳（前方後円墳　全長約45m）　65．三光古墳（古墳？）

図2　周辺位置図（S＝1／15,000）

中心で有力な古墳が築かれなくなる。

このような状況が変化するのは、５世紀後半以降で、平野部で帆立貝形の石塚東古墳[15]、方墳であるヤナイタ１・２号墳[16]、円墳と思われるトリイノ前古墳[17]、勝山東古墳[18]、高塚１・２号墳[19]、堀川１・２号墳[20]などが６世紀後半代にかけて築造される。ここにあげた古墳はいずれも削平されているため、発掘調査により再発見されたもので、調査が進展すればさらに数が増大するものと考えられる。また、山麓付近では、纒向川北岸域では、前方後円墳の可能性が指摘されている平塚古墳[21]や円墳である池田１号墳[22]など古墳時代後期の古墳が築かれる。また、ホケノ山古墳に築かれた全長13m以上の横穴式石室[23]や慶運寺裏古墳[24]など６世紀後半代の横穴式石室を内部主体にもつ古墳の築造が活発になる。横穴式石室導入により、平野部から山麓側に古墳の築造が移動していったと思われる。一方、珠城山古墳群の近辺での有力な後期古墳は、北東方向にある直径25m程度の円墳の立子塚古墳[25]があげられる。未調査なため詳細な時期は不明だが、石室の形態や巨石を用いる点などからして、７世紀代の築造と考えられる。珠城山古墳群築造以後のこの地域における有力な古墳と位置づけることができる。

【註記】

１）石野博信ほか　1976『纒向』　橿原考古学研究所　桜井市教育委員会　など

２）註１）文献

萩原儀征　寺沢薫　1989『桜井市纒向石塚古墳　墳丘範囲確認調査（第４次）概報』桜井市教育委員会
橿原考古学研究所

萩原儀征　1995『纒向遺跡石塚第１期整備事業範囲確認調査（第５～７次）概報』（財）大和文化財保存会
桜井市教育委員会

橋本輝彦　1997「纒向石塚古墳第８次調査の概要（纒向遺跡第87次）」
『平成８年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡会議

丹羽恵二　橋爪朝子　2006「纒向遺跡第144次調査（纒向石塚古墳第９次調査）概要報告」
『桜井市平成17年度国庫補助による発掘調査報告書　27集』桜井市教育委員会

３）小池香津江　1998「桜井市纒向遺跡第102（勝山古墳第１次）発掘調査概報―勝山池改修に伴うー」
『奈良県遺跡調査概報　1997年度』奈良県立橿原考古学研究所

大西貴夫ほか　1999「桜井市　勝山古墳第２次（纒向遺跡第111次）発掘調査概報」
『奈良県遺跡調査概報　1998年度』奈良県立橿原考古学研究所

小栗明彦　2000「桜井市　勝山古墳第３次（纒向遺跡第116次）発掘調査概報」
『奈良県遺跡調査概報　1999年度』奈良県立橿原考古学研究所

橋本裕行ほか　2001「桜井市　勝山古墳第４次（纒向遺跡第122次）発掘調査概報」
『奈良県遺跡調査概報　2000年度』奈良県立橿原考古学研究所

４）橋本輝彦　2006『東田大塚古墳』財団法人桜井市文化財協会など

５）註１）文献に同じ

６）寺澤薫（編）2002『箸墓古墳周辺の調査』奈良県立橿原考古学研究所など

７）奈良県立橿原考古学研究所（編）　2001『ホケノ山古墳　調査概報』学生社

８）伊達宗泰・小島俊次・森浩一　1963『大和天神山古墳』奈良県教育委員会

９）萩原儀征　1986『旧纒向小学校跡地発掘調査現地説明会資料』

10）橋詰清孝　1978「桜井市大字太田農業整備基盤事業に伴う発掘調査概報（纒向遺跡南飛塚）」

11）松宮昌樹　1999「纒向遺跡第112次調査　1998年度発掘調査概要」財団法人桜井市文化財協会

12）米川仁一　2001「桜井市箸中纒向遺跡第119次・121次調査概報〔箸中イヅカ古墳・箸中西遺跡〕
（国道169号線バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査）」『奈良県遺跡調査概報　2000年度』
奈良県立橿原考古学研究所
13）橋本輝彦（編）　2007『奈良県桜井市　纒向遺跡発掘調査報告書―巻野内坂田地区における調査報告―　28集』
桜井市教育委員会
14）橋本輝彦　2001「茅原大墓古墳」『大和前方後円墳集成』学生社
15）橋爪朝子　丹羽恵二　2006「纒向遺跡第144次調査（纒向石塚古墳第９次調査）概要報告」
『桜井市平成17年度国庫補助による発掘調査報告書　27集』桜井市教育委員会
16）福辻淳　2006「纒向遺跡第145次発掘調査報告」『桜井市平成17年度国庫補助による発掘調査報告書　27集』
桜井市教育委員会
17）註１）文献に同じ。
18）橋本輝彦　1995「纒向遺跡第79次調査報告」『平成６年国庫補助による発掘調査報告書２　16集』
桜井市教育委員会
19）清水眞一　1993「第69次の調査成果」『桜井市纒向遺跡第69・70次発掘調査報告』桜井市教育委員会
橋本輝彦　2002「纒向遺跡第124次調査報告」『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書　23集』
桜井市教育委員会
20）関川尚功　松永博明　1984「纒向遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1983年度』
奈良県立橿原考古学研究所
松宮昌樹　2001「纒向遺跡第120次調査報告」『桜井市平成12年度国庫補助による発掘調査報告書　22集』
桜井市教育委員会
21）福辻淳　2004「纒向遺跡第135次発掘調査報告」『桜井市　平成15年度国庫補助による発掘調査報告書　25集』
桜井市教育委員会
22）丹羽恵二　2004「纒向遺跡第137次発掘調査報告」『桜井市　平成15年度国庫補助による発掘調査報告書　25集』
桜井市教育委員会
23）註７）文献に同じ。
24）増田一祐　住谷久江　1979「奈良県桜井市箸中遺跡と纒向古墳群について」『古代文化』第30巻第５号
25）清水眞一　1987『桜井市の横穴式石室』桜井市教育委員会・（財）桜井市文化財協会

【その他の参考文献】

桜井市史編纂委員会　1979『桜井市史』桜井市役所
福辻淳　2005『平成17年度秋季特別展　古墳時代中期の桜井』財団法人桜井市文化財協会
中村利光　2006『平成18年度冬季企画展　忘れ去られた古墳』財団法人桜井市文化財協会

第３章　既往の調査

第１節　はじめに

珠城山古墳群は古墳として古くから認識されていたようである。野淵龍潜氏によって作成された県下の主要な古墳についての調査書である『大和國古墳墓取調書』（明治26年）に珠城山古墳群は以下のように記されている。

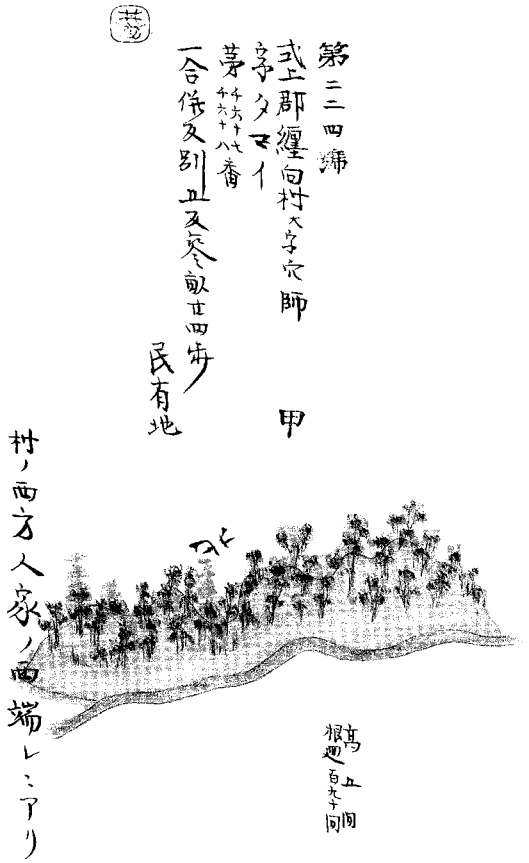


図３　珠城山古墳群見取図　註１）文献より

「第二百二十四号　式上郡纒向村大字穴師ニ在リ字「タマイ」ト云フ「タマイ」ハ恐ラク珠城ノ訛傳ナラン此地ノ西邊ハ往時珠城宮ノ旧址ナレバナリ之ヲ村人ニ訂スニ村人モ亦然リト云ウ村ノ西端北側ニ五箇ノ小塚相連ナリ皆北面シテ　景行陵ニ向フ因是考之此塚ハ　景行陵ノ陪塚タルヤ疑ナキモノノ如シ」

５基の小墳が連なっていると認識され、穴師の村人にとっては景行天皇の陪塚だと考えられていたのだろう。これらの記述を見る限り、横穴式石室の存在は認識されていないようである。こののち、昭和30年にこの丘陵の土取りが行われることになり石室が露出し認識されることになった。第１次調査（昭和30年度）はこのときの緊急調査である。第１次調査においても、円墳が連なっている（第１次調査は４基）と理解されており、今日のように３基の前方後円墳と理解されるのは、第２次調査（昭和33年）で古墳群の全域で測量調査が行われてからである。こののち昭和60年度に第３次調査が行なわれることになった。以下、各調査を概観する。

第２節　第１次発掘調査の概略

昭和30年７月当時の国鉄桜井線の巻向駅新設にともない珠城山丘陵の土砂が採取された。採取後の整備中に奈良学芸大学教授堀井甚一郎氏が、１号墳後円部の横穴式石室の羨道部が開口しているのを発見し、奈良県教育委員会に連絡した。県教委は直ちに地主に工事の中止を申し入れ、地元の大三輪町教育委員会を通じ遺跡発見の届出などの書類上の処理を進めた。その処理中に付近の住民により石室内流入土の排出が行われ始めたので奈良県教育委員会により昭和30年9月９日からわずか４日間で緊急に調査が行われた。この調査は伊達宗泰・小島俊次両氏によって報告されている[2)]。報告書によれ

ば、調査時は径約21m、高さ約２mの円墳と認識されていた。石室の掘形は、側壁より0.8m外までで地山を２m掘下げてあったとされている。石室は玄室は完存していたが羨道部は一部破壊を受けていたようだ。また、玄門部付近には石材が数個存在しており中扉（閉塞か）的な性質のものと推察されている。

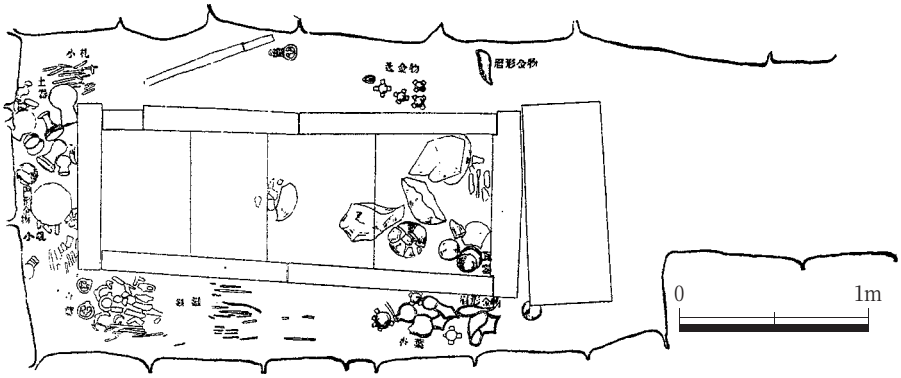


図４　珠城山１号墳土器出土状況　註２）文献より

石室内には凝灰岩製の組合式箱式石棺が安置されていた。石棺内の北半部にはガラス玉が集中して出土しているが、南半部は後世に荒らされていたようで黒色土器などの平安時代の遺物が出土している。石棺の周辺には盗掘があまり及んでいなかったのか遺物が豊富に出土している。棺内や石室からの出土遺物は以下のとおりである。

１号墳石室内出土遺物

石棺内　挂甲小札、円筒埴輪片、鹿角製装具片、刀子片、

北半部：雲母片（北半部に敷き詰められる）、ガラス製小玉、琥珀製棗玉、

南半部：人骨、土師器壷、黒色土器（底部に墨書）

石室内　羨道部～石棺付近：耳環、須恵器坏、土師器皿、承和昌宝８枚、金銅製勾玉

石棺東側：鞍金具、辻金具、三葉環頭大刀、槍先、剣菱形杏葉、鞍金具、土師器壷

石棺西側：鉄鏃、鉸具、辻金具、三葉形杏葉、雲珠

奥壁付近：蓋付長頸壷、長頸壷などの完形土器群、金銅製円形大形飾金具、挂甲小札

出土位置が報告されていないもの　鉄鋌、鉄斧、銀象嵌大刀片、鉄製輪鐙、鉄釘、鉄製鎹、鉄製素環轡、胡簶金具、銀製空玉など

（須恵器）　脚付𤭯、高坏、壷、（土師器）ミニチュア甑、甕、土師器皿、台付皿

第３節　第２次発掘調査の概略

珠城山丘陵の西端で採土作業が行われるにつれて、３号墳石室石材が露出し、再び堀井甚一郎氏によって発見されたことによって、土砂採取が中断され、昭和33年1月４日より第２次調査が行われた。第２次調査は３号墳の後円部と前方部にそれぞれ１基あった横穴式石室内で行われた。２号墳においても墳頂付近で、Ａトレンチ（長さ4.5m、幅1.5m、深さ2.5m）とＢトレンチ（長さ７

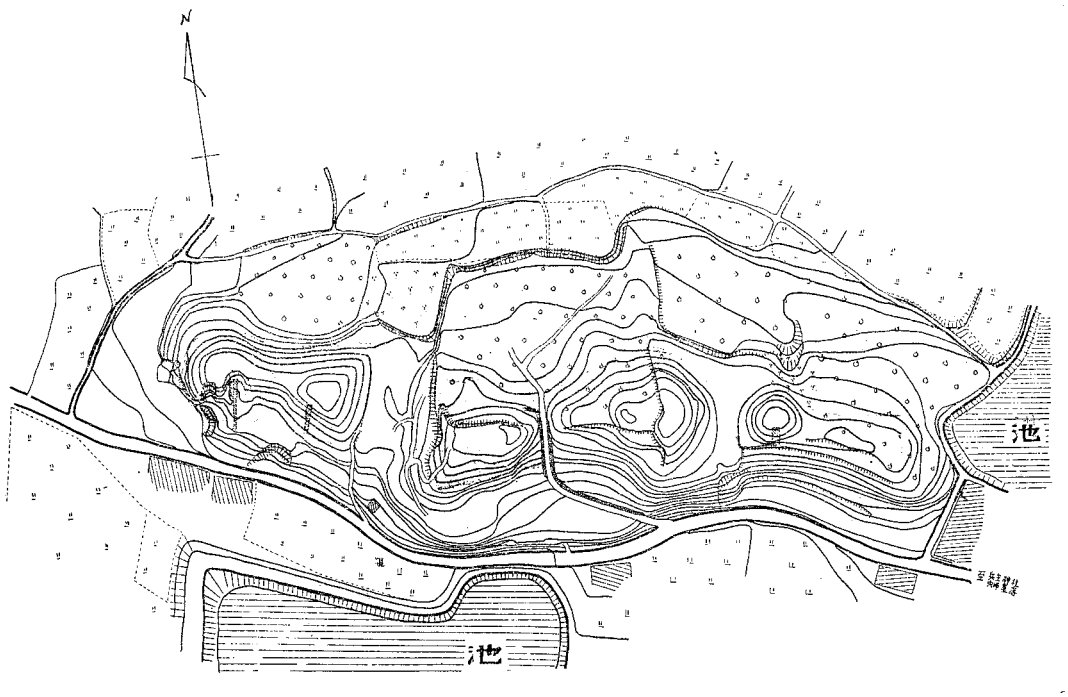


図５　珠城山古墳群平面図　註３）文献より（S＝約1／2000）

m、幅２m、深さ２m）の２ヶ所調査され、墳丘南斜面でもC・D・Eの３ヶ所のトレンチ（計５箇所の詳細な場所は不明）の調査を行なったと報告されているが、埋葬施設は発見されていない。また、丘陵全体の測量調査が行われ前方後円墳が３基連なっていることがはじめて確認された（図５）。後円部の横穴式石室は、既に天井石が抜き取られていたようである。石室の羨門付近には閉塞石があり、羨道中程には床面に仕切り石（梱石か）があった。羨道から玄室にかけての玄門部付近に組合式家形石棺、玄室中央に石棺があったと思われる窪みが存在し、凝灰岩片が散乱していたようで、石棺は少なくとも２基存在していた。一方、前方部の横穴式石室は片袖式石室で、玄室は完存していたが、羨道天井石は何石か抜取られた可能性がある。玄室内には敷石が敷かれていたようであり、羨門部には閉塞石があった。これら二つの石室内から出土した遺物は以下のとおりである。

３号墳後円部横穴式石室出土遺物

石棺～仕切り石　金銅製辻金具、金銅製透彫双鳳文心葉形杏葉、金銅製透彫忍冬唐草文心葉形鏡板、鉄製輪鐙、金銅製鉸具、鉄刀３振、巫女形埴輪、土師器長頸壷、須恵器器台、壷、𤭯、坏片、台付長頸壷、高坏、鞍金具片

玄室　挂甲小札、馬具、銀製革金具、金銅製三輪玉、鉄鏃、金銅製鉸具、緑釉台付壷、常滑焼片

その他　雲珠片、鉄槍片、捩り環頭大刀片など

３号墳前方部横穴式石室出土遺物

玄室　楕円形金具、鉄釘、耳環、円筒埴輪片、土師器脚付壷、長頸壷、須恵器高坏、坏、羽釜、土師器皿、骨片など

羨道部　須恵器坏など

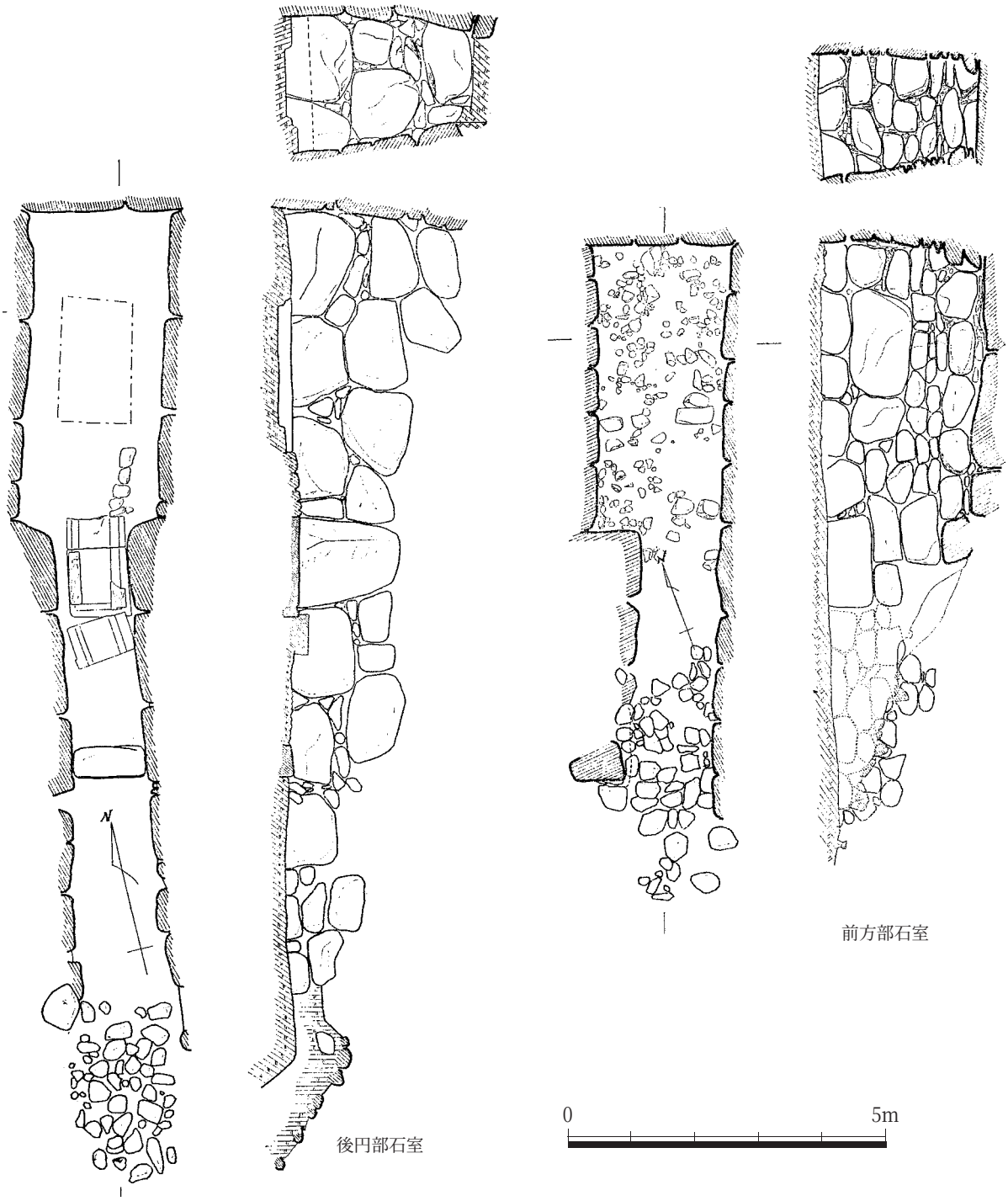


図６　珠城山３号墳横穴式石室（S＝1／100）

第４節　第３次発掘調査の概要

第３次調査は、昭和60年に史跡環境整備を行うための事前調査として行われた。桜井市教育委員会が花園大学考古学研究室に依頼し、昭和60年12月から発掘調査が行われることとなった。２号墳および３号墳の前方部を確定するために、２・３号墳間に調査区が設定された。調査の過程で円筒埴輪列が検出されたため、随時拡張を行い総面積は137.4㎡である。円筒埴輪は前方部東側に直線的に計25本検出され、それらは２号墳の掘割りを埋め立て整地したあとに樹立したものであり、２号墳が３号

（旧Y＝－13750）　（旧Y＝－13700）　（旧Y＝－13650）　（旧Y＝－13600）

（旧Y＝－161550）

（旧Y＝－161600）

図７　珠城山古墳群測量図（S＝1／600）　※昭和59年度に実施

墳よりも先行して築造されたことが確認された。円筒埴輪は前方部の東側のみで、北側や南側にはめぐらず、２・３号間のみに樹立されたものとされている。また、円筒埴輪列の中には盾持人物埴輪が含まれており、畿内における最終末の埴輪祭祀を考える上で重要な発見となっている。なお、第３次調査の出土遺物などは桜井市教育委員会が保管しており、今回の整備事業に伴い遺物の再整理および再実測を行い第８章第２節において報告している。

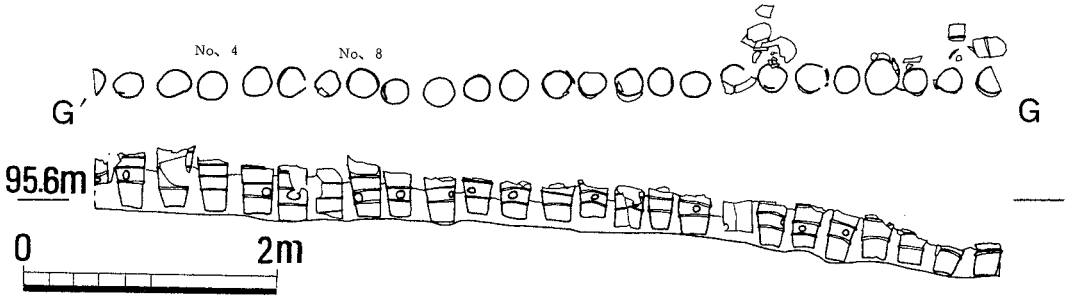


図８　第３次調査出土埴輪列（S＝1／60）

【註記】

１）野淵龍潜　1893『大和國古墳墓取調書』
２）小島俊次　伊達宗泰　1956『珠城山古墳』奈良県教育委員会
３）伊達宗泰　1960「大三輪町穴師珠城山２号･３号墳」『奈良県文化財調査報告』
第３集　奈良県教育委員会
４）伊達宗泰ほか　1993『国史跡珠城山古墳群範囲確認調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター第11集
桜井市教育委員会　花園大学考古学研究室

第４章　第４次調査報告

第１節　墳丘の調査

2004年度に行われた第４次調査は、図１の第１・２・４・５・６・８トレンチの計６ヶ所で調査を行った。２号墳を中心とした墳丘範囲確認であり、すべて人力での掘削、埋め戻しを行った。調査期間は2005年２月14日～3月31日で、調査総面積は126.25㎡である。以下それぞれのトレンチの調査成果を述べる。

１．第１トレンチ（図９）

第３次調査の発掘調査時の座標測量を行っていないため、調査位置を墳丘測量図に正確におとすには心もとなかった。そのため第１トレンチは、第３次調査のトレンチを確認するために南北２ヶ所に調査区を設定した。第３次調査で検出した円筒埴輪列が一部を除き、大半のものを現地保存という形をとったため土中に埴輪列が残ったままであった。第１トレンチはその埴輪列の一部と調査トレンチの肩を最低２ヶ所確認すれば、目的は達成できるので、第３次－１・３トレンチの一部を確認することを目指した。結果第３次－３トレンチの北東角及び第３次－１トレンチの西肩を検出し、埴輪列の上部のみを検出した（図版２）。位置確認だけのため、特に詳細な調査は行っていない。なお、検出した埴輪列は、終了後、前回の調査時と同様に土嚢袋などで保護した後埋め戻した。調査面積は約13㎡である。

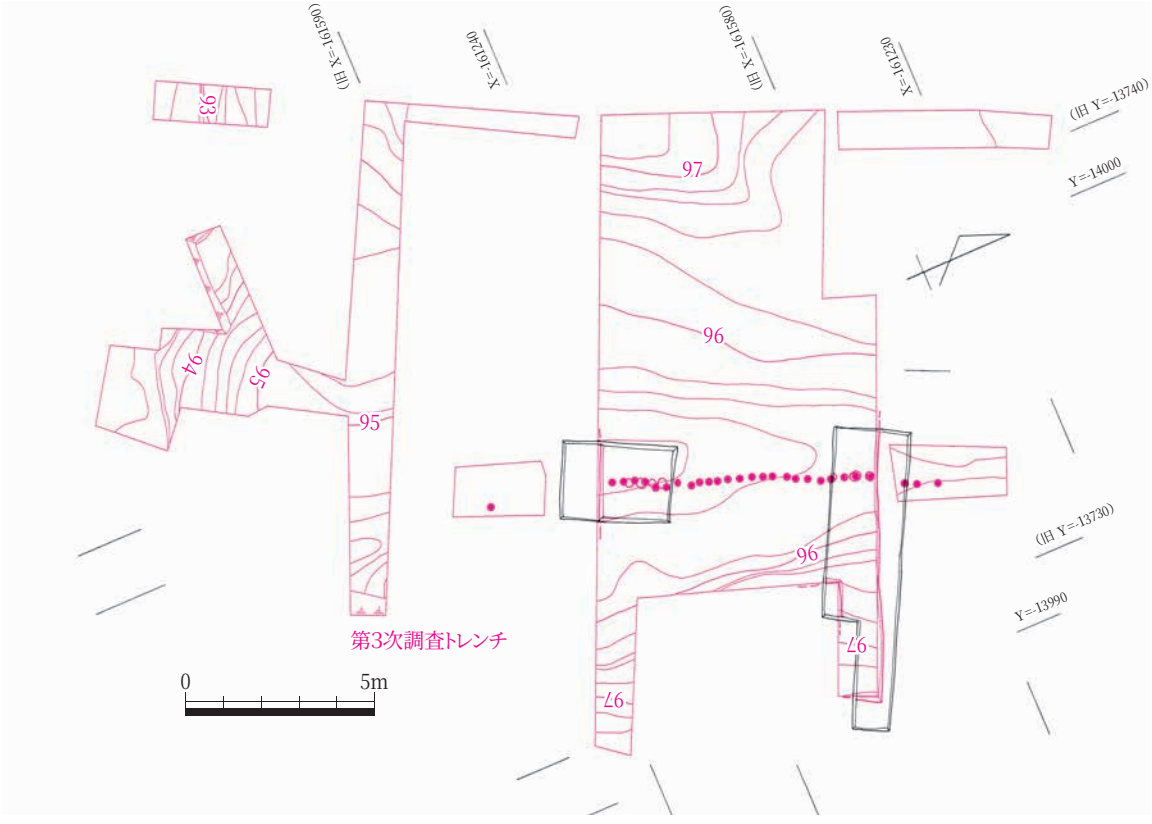


図９　第１トレンチと第３次調査トレンチ（S＝1／200）

２．第２トレンチ（図10）

第２トレンチは、２号墳前方部北西隅付近に設定した調査区である。現況測量図（図７）では、前方部北斜面の標高101～102m付近では等高線の間隔が広がり狭いながらも平坦面があり、テラス状を呈している。この調査区では前方部の裾及びこの平坦面の性格を明らかにするために、南北約10m、東西約1.5mの面積約15㎡のトレンチを設けた。

表土及び流土（層厚約40cm）を除去後、地山である明赤褐色土（花崗岩の風化土　図10－４層）が露出した。トレンチ南端の標高100.9m付近では、平坦面を呈しており、幅0.7～0.9mの素掘溝がみられた。この素掘溝から遺物は出土していないが、埋土の様子から、比較的新しいものだと考えられ、後世の耕作に関連するものだと思われた。よって前述した平坦面は古墳築造当初のものではないものと判断した。一方、地山層の傾斜変換点がトレンチ中央の標高98.6～98.7mにかけてみられ、ここが現状で認識できる墳丘裾部である。その北側には標高98.4mのレベルで平坦面が続き、掘割りなどは検出されなかった。また、トレンチ内で、墳丘裾より以北で土坑が２基みられるが、埋土は流土と同質で、攪乱と判断した。遺物は流土から現代～中世の遺物、須恵器片が出土しているがいずれも小片である。また、円筒埴輪片が少量であるが出土している。

３．第４トレンチ（図11）

第４トレンチは２号墳北くびれ部付近に設定した調査区で、南北約11.5m、東西約1.5mで調査面積は約17.25㎡である。

この調査区は、墳頂付近からとおもわれる流土が厚さ70～100㎝で堆積していた。それらを取り除くと地山層が露出し、墳丘裾付近では標高97.8m付近を上場とした幅約４m、深さ約0.6mの東西方向

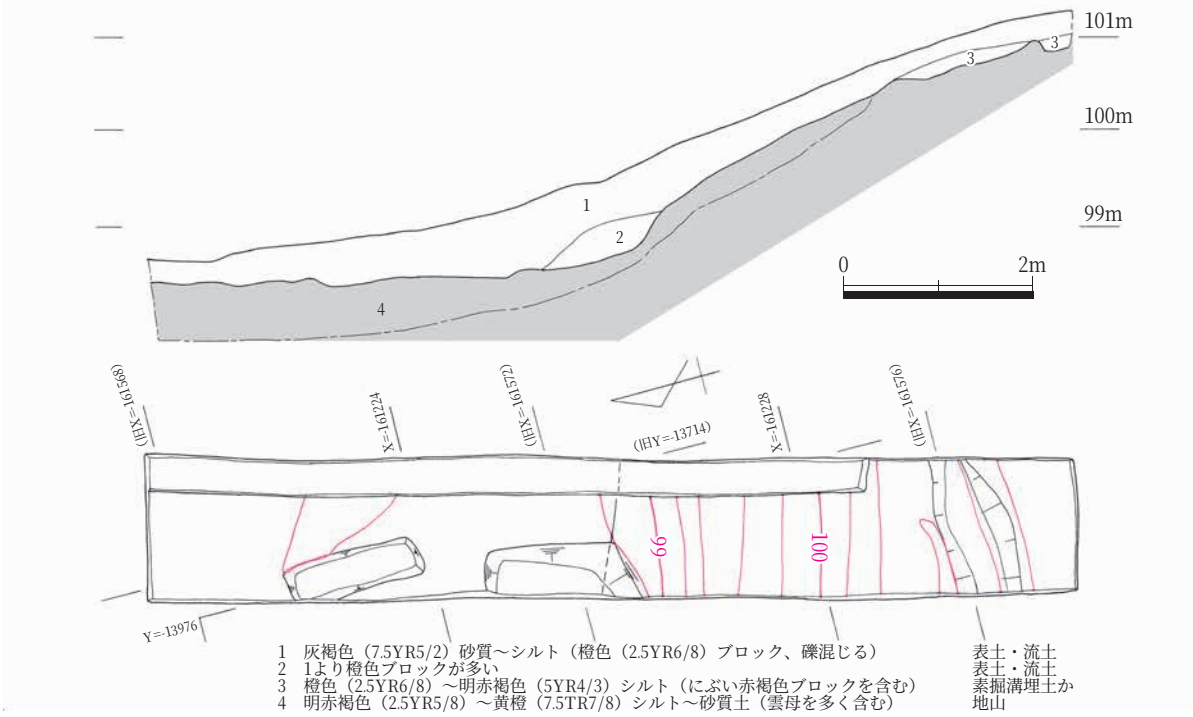


図10　第２トレンチ平面・断面図（S＝1／80）

の溝を検出した。埋土は大きく分けて上層（図11－６～８層）、中層（9～13層）、下層（14、15層）の３つに大分できる。断面の様子から中下層が堆積した後に、幅約2.4m、深さ約60cmの溝を再掘削しているものと理解できる。その再掘削した溝に堆積したものが上層（６～８層）で、上層と中下層の堆積時期には隔たりがあると思われる。また、上層の一番底からは石材が数点みつかっているが、特に並べてあるようにはみえず、溝に転落したものと判断している。当初この溝は古墳の掘割りと考えていたが、中下層からも陶器や瓦質の土器が出土したため、中世以降の堆積であることが判明し、古墳に伴うものではなかった。裾に関しては溝掘削に伴い削平を受けているため、調査区中ほどよりは北に存在していたとしかいえない。墳丘基底部の標高は、この溝がなかったと仮定すれば、標高97.8m付近になる。遺物は先述した溝埋土のものの他に流土から須恵器の小片が出土しているだけで、埴輪片はみられなかった。

４．第５トレンチ（図12）

第５トレンチは、２号墳後円部の北西部に設置した調査区で、南北約16m、東西1.5mで調査面積は約24m²である。この場所は現況をみると、後円部から北北西の方向に地形が張出し、造り出し状にみえる。この調査区では造出しの有無と墳丘裾を確認することが目的であった。

表土や流土（図12－１層）が30～60cm堆積し、その下層からは橙色とにぶい黄橙色のブロック土が交互に堆積している（７～20層）。この堆積土は、特にトレンチ南端で多く、厚さ1.7mになる。こ

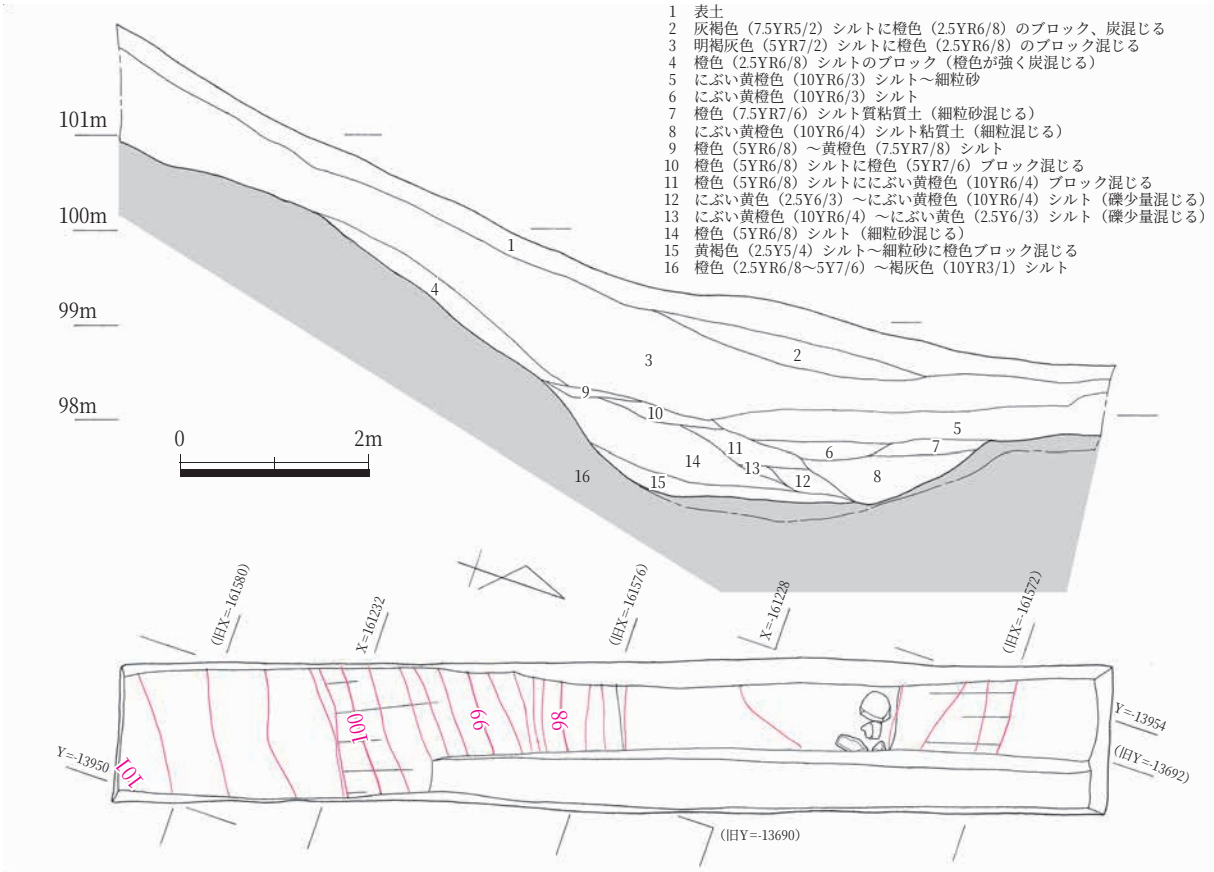
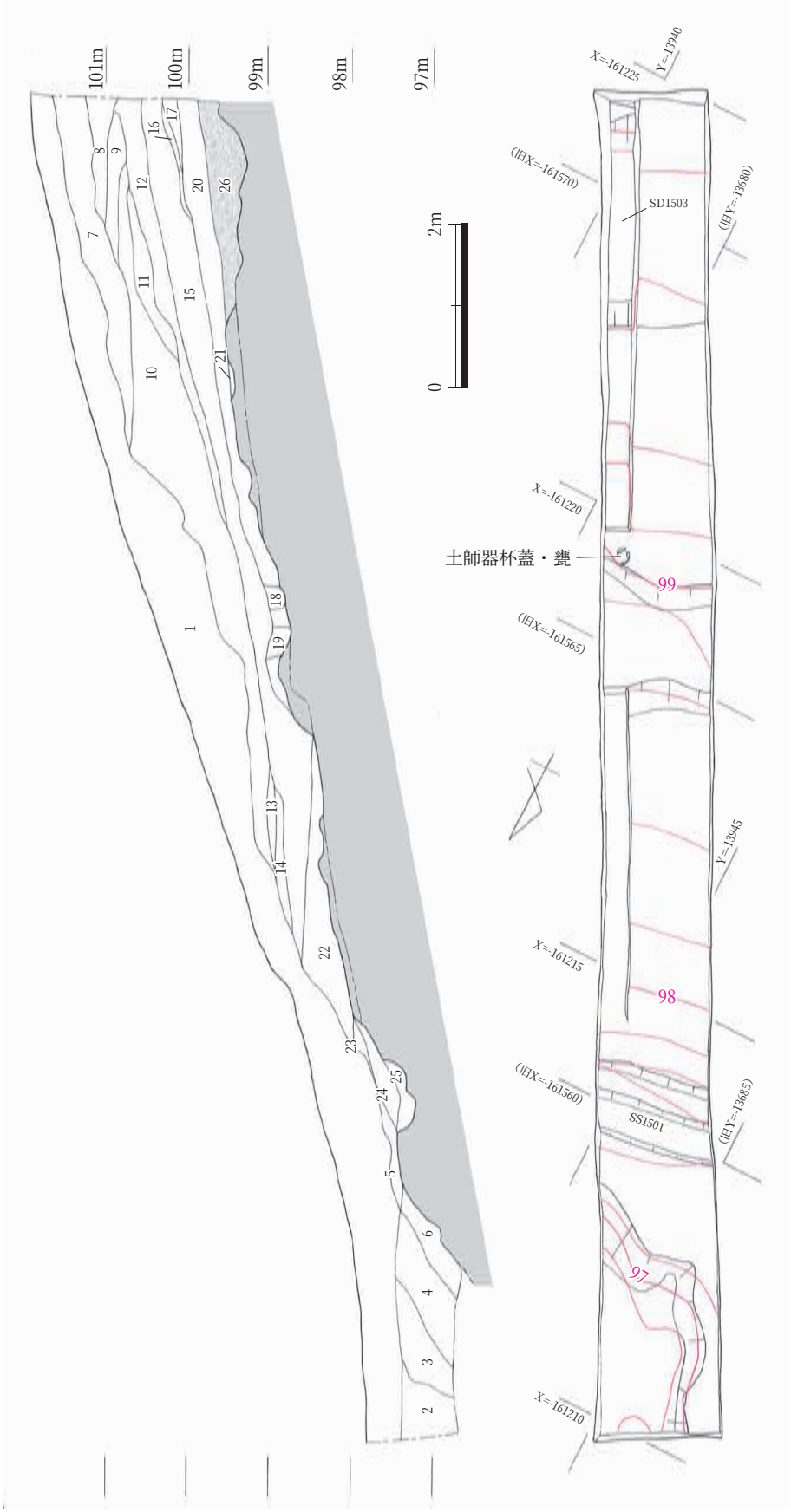


図11　第４トレンチ平面・断面図（S＝1／80）



1 表土・流土
2 にぶい黄橙色（10YR6/3）シルトに浅黄色（5Y7/3）ブロックまじる
3 浅黄色（5Y7/3）シルト～極細砂色（鉄分を含む）
4 橙色（2.5YR6/8）シルト～砂質土（礫少量混じりしまりがない）
5 にぶい黄橙色（10YR6/4）～明黄褐色（10YR6/4）シルトに灰褐色ブロック混じる（4より橙色が強い）
6 にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトに橙明黄褐色ブロック混じる
7 にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト～砂質土、橙色（2.5YR6/8）ブロックを含む
8 橙色（2.5YR6/8）シルトにぶい黄橙ブロックが入る
9 橙色（2.5YR6/8）シルトににぶい黄橙ブロック（地山）が多く入る
10 橙色（2.5YR6/8）シルトににぶい黄橙（10YR7/4）ブロックが入る
11 にぶい黄橙色（10YR6/3～7/4）シルト～砂質土に橙色（2.5YR6/8）のブロック混じる
12 橙色（2.5YR6/8）シルトに黄橙色（10YR8/6）ブロックが混じる
13 にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトに橙色ブロック、礫混じる
14 にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトに橙色ブロック（13より橙が多い）
15 にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトに橙色、灰黄褐（10YR5/2）などのブロックが混じる
16 橙色（2.5YR6/8）シルトのブロック層
17 にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトに橙色、浅黄橙色などのブロック混じる
18 にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトに橙色ブロック混じる
19 18に同じ
20 にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトに橙色ブロック混じる（ややしまる）
21 橙色（7.5YR6/6）シルト
22 にぶい黄橙色（10YR6/4）シルトに橙、黄橙、灰黄褐色のブロック混じる
23 にぶい黄橙色（10YR6/4）～明黄褐（10YR6/4）シルトに灰褐色ブロック混じる
24 黄橙色（10YR7/8）シルトに橙、明黄褐色ブロック混じる
25 にぶい黄褐色（10YR5/3）シルトに明黄褐色ブロック少量混じる
26 明黄褐色（10YR6/6）～にぶい黄橙色（7.5YR6/4）シルト（硬くしまる）

図12　第５トレンチ平面・断面図（S＝1／80）

れらの層は非常に締まりのないもので、古墳の築造以降に断続的に墳丘側から、自然もしくは人為的に土が堆積した結果であると考えられる。それぞれの層の細かな時期を推定することは不可能だが、その中でも11層からは土師器皿（図23－16～17）がまとまって出土しており、16世紀頃を中心とした時期の堆積だと考えられる。よって、後円部から北北西方向に張り出している地形は後世の流土もしくは盛土によるものである。また、南端においては、標高97m付近から北方向に向かって傾斜する。現況の平面図では、当調査区の東側に北方面に伸びる小さな谷状の地形が確認できるのでこれにつながるものだと考えられる。この谷状の地形に堆積する埋土は、締りがなく中世～近現代までの堆積だと考えられる。これらの古墳築造以降と判断できる層を取り除くと、地山層が露出した。地山層上面では、調査区北よりで幅１ｍ前後の素掘溝（SS1501）が検出されたが、埋土から土師器皿などが出土しており中世以降のものである。トレンチ南端では幅約2.5m、幅約30cmの溝状の遺構（SD1503）がみられた。埋土は明黄褐色～にぶい黄橙色シルト（26層）で、他の堆積土から比べると硬くしまっており、ブロック土もほとんど混入していない。埋土から全く土器が出土しなかったので堆積時期はわからないが、他の土層とは様子が異なる。この遺構の評価はむつかしいが、墳丘盛土や掘割りの可能性が考えられる。

出土遺物は、トレンチ中ほどの地山の直上で、土師器甕（図23－32）が出土している。土器の周囲に土坑などの遺構を検出できなかった。土師器甕の中には土師器坏蓋（図23－31）が落ち込んでいる状態であった。骨壷のような埋葬に関連する可能性もある。それら以外では流土より古墳時代後期の須恵器片や、土師器皿や羽釜などの中世のものが多く、埴輪は出土していない。また、サヌカイト製の石鏃（図23－43・44）も出土している。

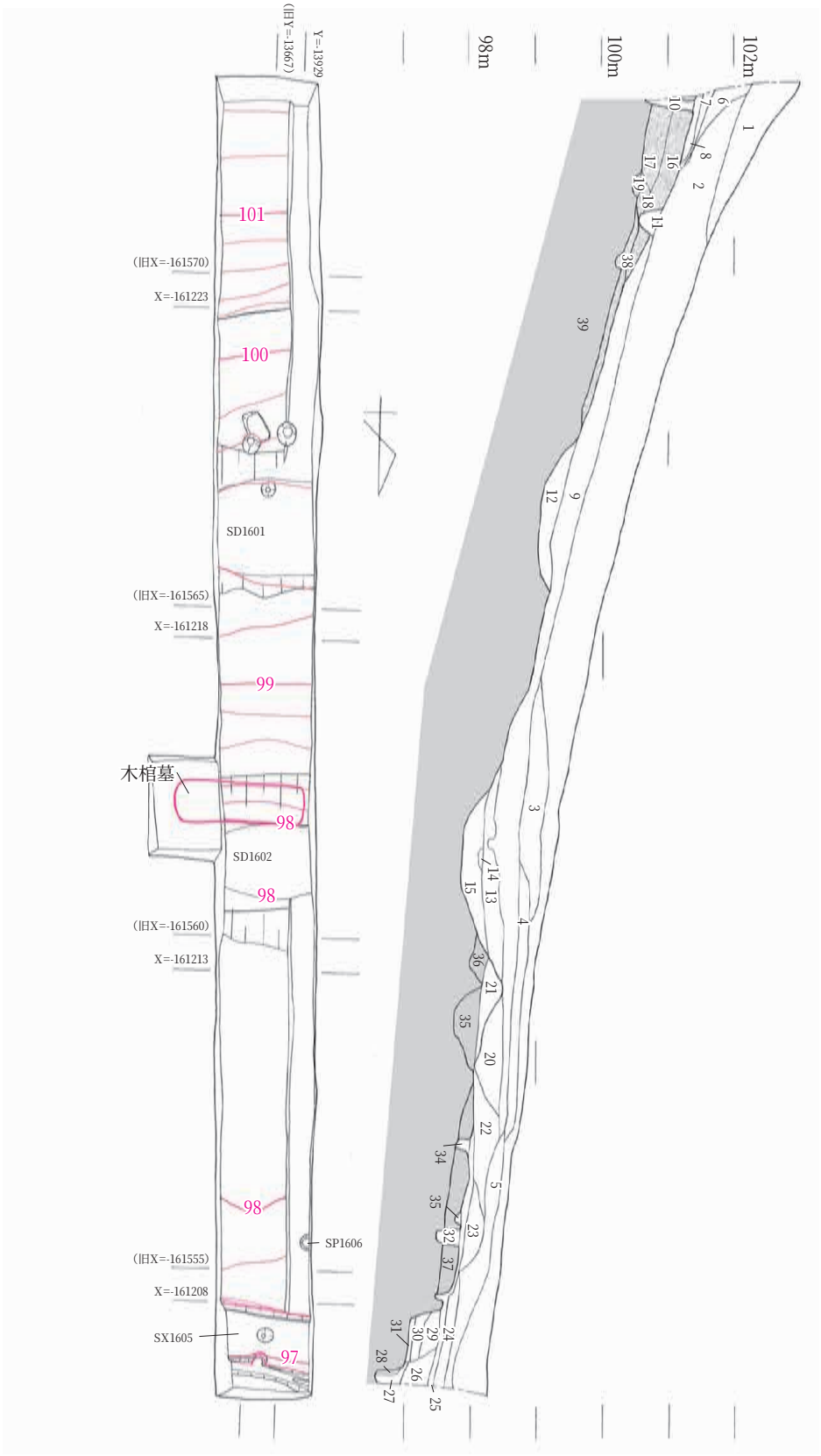
第５トレンチの範囲では、中世以降の改変もあり、墳丘裾と思われる明確な傾斜変換点は見出しにくいが、強いてあげるとすれば標高99m付近もしくは標高98.6m付近があげられる。また、SD1503（標高99.3～６ｍ）付近も墳裾の候補となるが確定的なものはない。

５．第６トレンチ（図13）

第６トレンチは墳丘主軸に直行するように、後円部の北側に南北約19.5m、東西約1.5mの規模で設定した。後に平安時代の木棺墓が検出されたため、一部拡張を行ったので調査面積は30.75㎡になる。

表土や流土が調査区全体に0.6～0.7mの厚さで堆積していた。それらを除去すると、調査区南端では、墳丘盛土と思われる層が標高100.8mより上に厚さ約50cm（16～19層）で検出した。また、標高99.1～99.6m付近では、幅約２ｍ、深さ約20㎝に溝状の遺構（SD1601）、標高97.9～98.5m付近では幅約3.3mで深さ約50㎝の溝状（SD1602）遺構が検出された。また、SD1602の埋土上面からは平安時代と思われる木棺墓が、北端では古式土師器が出土するSX1605が検出された。なお、木棺墓とSX1605に関しては古墳に直接関係がないため別に詳述することにする。

墳丘盛土は大きく分けて明黄褐色シルト（16層）とにぶい黄橙色シルト（17・18層）に分けられ、それぞれに地山層に由来する橙色ブロックが少量混じる。墳丘盛土の下層で、地山の直上の橙色シル



1 表土
2 にぶい黄褐色(10YR5/4)土　明黄褐色(ブロック混じる)
3 橙色(2.5YR6/8)～(5YR6/8)シルトに黄橙色ブロックが混じる
4 にぶい黄橙色(10YR6/3)と黄橙色(10YR8/6)のブロック土
5 にぶい黄褐色(10YR5/3～5/4)に橙・黒褐色ブロック混じる
6 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトに橙・褐灰色ブロック(礫少量混じる)
7 橙色(5YR6/8)とにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトのブロック層
8 灰褐色(7.5YR5/2)シルトに明黄褐色ブロックが少量混じる
9 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトに明黄褐ブロック混じる
10 木の根による攪乱
11 木の根による攪乱
12 明黄褐色(10TR6/6)～にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト(礫少量混じる)
13 橙色(5YR6/8)シルトにぶい褐色ブロック混じる(礫混じる)
14 ブロック土
15 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトに明黄褐色ブロック混じる(礫混じる)
16 明黄褐色シルトに黄橙色ブロック混じる
17 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルトに橙色ブロック(礫少量の混じる)
18 にぶい黄橙色(10YR6/3)シルトに橙色ブロック(礫少量の混じる)17より橙色が強い
19 橙色(5YR6/6)シルト質ににぶい黄褐・明黄褐色のブロック混じる(礫少量混じる)
20 橙色(2.5YR6/8)とにぶい黄褐色(10YR5/4)のブロック土
21 橙色(2.5YR6/8)とにぶい黄褐色(10TR5/4)のブロック土(22より柔らかい)
22 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土に明黄褐、にぶい黄橙色ブロック混じる
23 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土に橙色ブロックが多く混じる
24 にぶい橙色(7.5YR6/4)シルトに橙色ブロック混じる(礫混じる)
25 灰黄褐色(10YR4/2)シルト～砂質土に黄橙色ブロック・礫混じる
26 褐灰色(10YR4/1)シルトに橙色ブロック少量混じる
27 褐灰色(10YR4/1～4/2)シルトに橙色ブロック多く混じる
28 橙色(7.5YR6/8)シルトブロック
29 褐灰色(10YR4/1)シルト橙色ブロック、礫多く混じる
30 褐灰色(10YR4/1)シルト～細砂(炭、橙色ブロック混じる)
31 橙色(7.5YR6/8)シルト粘質土　固くしまる
32 灰黄褐色(10YR4/2)シルトに黄橙色ブロック混じる
33 明黄褐色シルトににぶい黄褐色ブロック混じる
34 黄橙色(7.5YR7/8～7.5YR6/8)と灰褐色(7.5YR5/2)のブロック土
35 灰黄褐色(10YR4/2)シルト～砂質土ににぶい黄褐色ブロック混じる
36 黄橙色(7.5YR7/8～7.5YR6/8)と橙色ブロック混じる
37 明黄褐色(10YR7/6)シルト～砂質土ににぶい黄褐色のブロック含む
38 橙色(5YR6/6)シルト質ににぶい黄褐・明黄褐色のブロック混じる(礫少量混じる)
39 橙色(2.5YR6/8)シルト(淡橙・明黄褐色のバイラン土)地山

図13　第６トレンチ平面・断面図（S＝1／100）

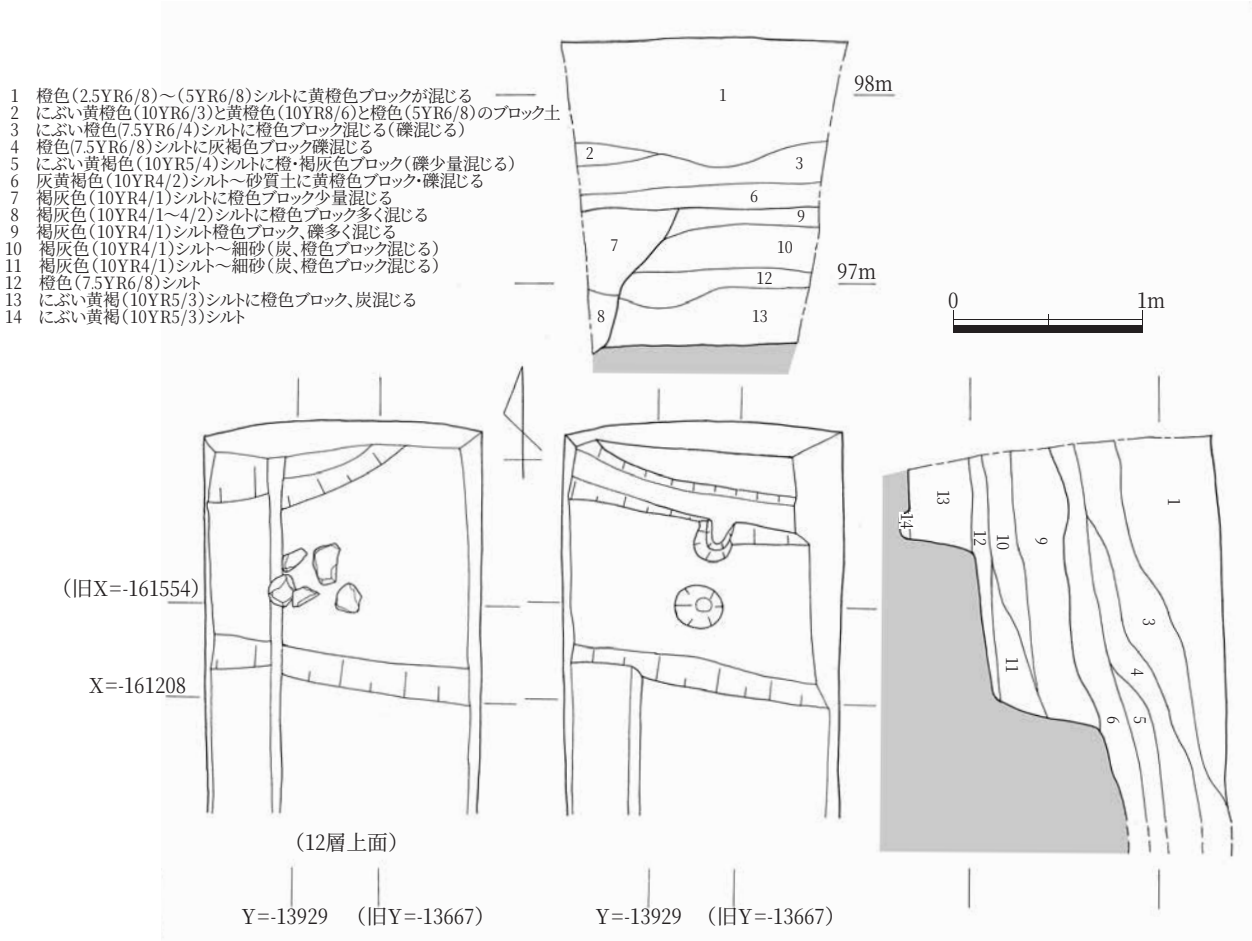
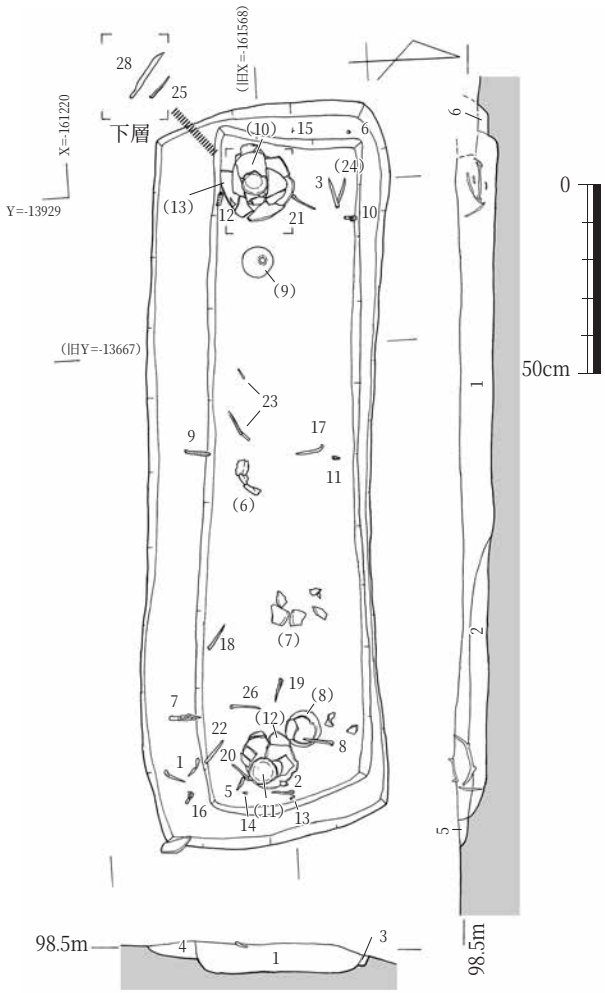


図14　SX1605　平面・断面図（S＝1／40）

ト層（38層）は先述した盛土に比べ、地山層に非常に近いため、盛土ではなく古墳築造以前の旧表土層と判断した。SD1601とSD1602の埋土からは出土遺物はなく堆積時期は特定できない。ただ、SD1602に関しては後述するように埋土上面から平安時代の木棺墓の掘形が掘削されており、少なくともそれ以前の堆積である。これらを含めて、墳丘裾の可能性がある箇所は、盛土の北端（標高100.3m付近）、SD1601の南肩（標高99.2m付近）、SD1602の南肩（標高98.5m付近）が考えられるであろう。

後述する木棺墓とSX1605以外の遺物をあげると、流土からは、羽釜や土師器皿などの中世の遺物が多く、その他では須恵器や土師器、サヌカイト片が上げられ、埴輪片は非常に少ない。

SX1605（図14）　トレンチ北端で検出された落ち込みから布留式期の土器が出土しており、古墳群築造以前の遺構であった。東西方向に直線的な掘形を持ち、幅80cmのテラス状の段をもつ。検出面からテラス面までは深さ約50cmで、テラス面から底までは約30cm深さであった。また、二段目の落ち込みの南壁沿いには幅10cm深さ5cmほどの小さな溝がみられた。埋土はにぶい黄褐色シルトに橙色のブロックが混じるもので、炭化物も混じっていた。とくにテラス面直上の12層は他よりも締りがよく、整地されている可能性もあったため、その面で精査したところ、１辺20cm内外の大きさの礫



※釘は図20･21、土器は図19の番号に対応する

1　にぶい褐色(7.5YR5/4)シルトに明褐色(7.5YR5/8)のブロック少量混じる
2　にぶい褐色(7.5YR5/4)シルトに明褐色(7.5YR5/8)のブロック少量混じり、締まる
3　にぶい褐色(7.5YR5/4)シルトに明褐色(7.5YR5/9)のブロック少量混じる
4　にぶい褐色(7.5YR5/4)シルトに明褐色(7.5YR5/10)のブロック少量混じる
5　にぶい褐色(7.5YR5/4)シルトに明褐色(7.5YR5/11)のブロック少量混じる
6　にぶい褐色(7.5YR5/3)シルトに明褐色(7.5YR5/8)のやや多くブロック混じる

図15　木棺墓遺物出土状況（S＝1／20）

がやや集中してみられた（図14)。12層を除去し完掘すると先述した形状になり、礫が検出された箇所は径20cm、深さ10cmのピットになった（図14)。幅1.5mのトレンチで検出したため全体の形状は不明であるが、すぐ南側でもピット（SP1606）が見られることなどから、住居跡のような遺構が周囲にあった可能性も考えられる。残念ながら、調査区の東西両側は改変され旧地形が残っていない。遺構も消滅したものと考えられる。纒向遺跡の盛行する布留式期の遺構がこの丘陵に存在していたことが確認できた成果は大きい。

木棺墓（図15）　トレンチの中央のSD1602の埋土上面から木棺墓が検出された。掘形の規模は長さ約195㎝、幅約60㎝で、北に偏る位置で、長さ約185㎝、幅約40cmの木棺の痕跡と思われるものを検出した。木棺の主軸は東西方位をとる。検出面から木棺の底までの深さは約10㎝あまりで上半部はかなり削平を受けている。遺物は東西両端に集中してみられた。西側からは黒色土器埦が口を合わせるように２点、黒色土器壷１点が、また、埦の下からは刀子が出土した。東側も同様に黒色土器埦が口を合わせるように重なった状態で２点、灰釉陶器の壷の胴部と思われるものが１点出土している。そのほか木棺を結合していたと思われる鉄釘が東西両端および中央付近で27点以上出土している。鉄釘６・９～16などは先を上に向けて出土しており、その他のものはほとんど水平の状態で出土している。釘の出土位置や木棺の痕跡などから先に挙げた土器類は棺内に副葬されたものと判断できる。上半部にかなりの削平を受けていたにもかかわらず、埋葬当時の副葬位置を保っているといえる。また中央付近からは土師器皿２点が破片の状態で出土している。埦などと比べ５cmほど浮いた状態で出土している。後世の攪乱がほぼ土師器皿の直上までおよんでいることや、他の土器と異なり残存状態が悪いため、これらは棺上に供えられていた可能性もある。

６．第８トレンチ（図16）

第８トレンチは１・２号墳間に設定された調査区で、それぞれの墳丘裾を確認することが目的であった。東西約10.5m、南北約1.5mの調査面積15.75㎡の規模である。

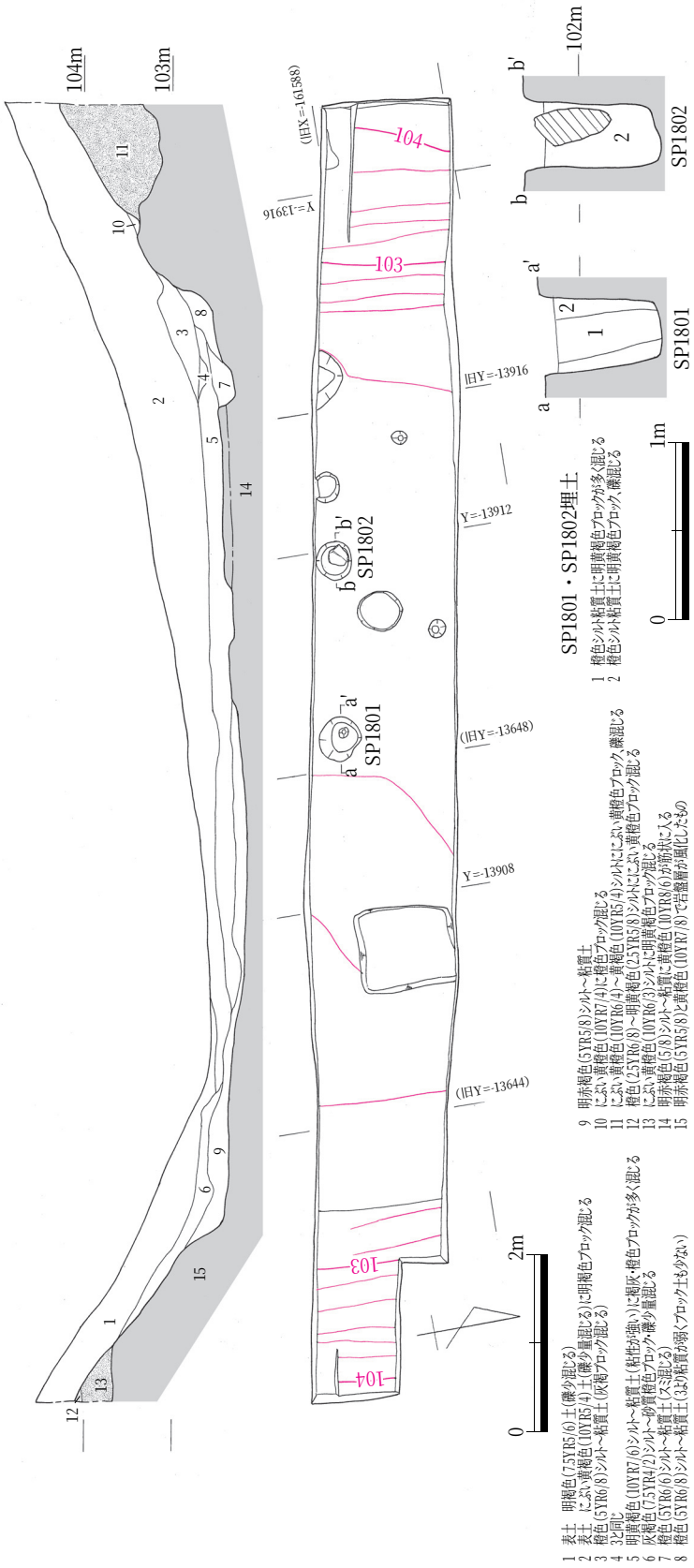


図16　第８トレンチ平面・断面図（S＝1／80・1／40）

表土・流土を除去すると１・２号墳のそれぞれで墳丘盛土が、中央部では地山層が検出された。

２号墳の墳丘盛土（図16－11層）は標高103.2～４ｍより上へ積まれており、盛土直下の地山層は墳丘中心部に向かって水平に延びていく。現況の墳頂部の標高が約107.1ｍであるので、地山層が中心部に向かって多少高くなるにしても３～４ｍの厚さの墳丘盛土が施されたと考えられる。検出した部分での盛土はにぶい黄橙～黄褐色シルト（ブロック混じり）の１層で、細かな単位で分層できるものではなかった。墳丘裾部は地山を削りだしているものと思われ、現状では標高102.4～５ｍ付近となる。

一方、１号墳の墳丘盛土は標高103.7mより上に積まれており、橙色系のシルト（12層）とにぶい黄橙色系シルト層の２層が確認できた。２号墳と同様に盛土直下の地山層は墳丘中央部に向かって水平方向にのびていく。現況での墳頂部の標高は約107.3mなので、3.6m以上の盛土が施されたものと思われる。墳丘裾部は地山を削りだしており、現況では標高102.4m付近であり、ほぼ２号墳と同じレベルである。

また、トレンチ中央部ではピットや土坑が検出された。その中でもSP1801及びSP1802は芯芯間が

約２mでほぼ東西方向に並んでおり、東西１間で南北方向にのびる建物の柱穴である可能性が高い。SP1801の埋土から土師器皿などが出土しており15世紀中頃から16世紀頃のものだと考えられる。１・２号墳間は標高102.2～４mで、平坦面を呈しており、掘割り等はみられない。先述した中世期の建物を建てる際に平坦面に造成した可能性もあり、その際に多少なりとも墳丘の削平が行われたものと考えられる。遺構以外からの遺物は古墳時代後期の須恵器片、土師器皿などの中世の遺物などが出土している。円筒埴輪片は第４次調査の他のトレンチと比べると多く、調査区の東半の１号墳近辺から出土したものが多い。

第２節　出土遺物（表２）

（１）古墳時代後期の遺物

土器（図18）　出土した須恵器のうち、図示できたのは３点である。（３）は壷の体部であり、カキ目、櫛描の波状文が施されている。（４）は平瓶の頸部だと思われる。（５）は器台の口縁部であり、波状文、及びタタキ痕がみられる。これらの遺物の時期は、小片のため明確にはしがたく、６世紀代から７世紀初めにかけてのものと考えられる。

埴輪（図17）　第４次調査で出土した埴輪は、第２・４・６トレンチで少量出土しただけで、第３次・第５次調査と比べ、極端に少ない。第２トレンチで出土したものは１次調整のタテハケのみで、２次調整は行っておらず、突帯も扁平なもので６世紀代の埴輪だと思われる。２点の埴輪は、２号墳の近辺から出土しているが、いずれも流土中であり、摩耗が激しく、１号墳や３号墳に樹立されたものが、混入した可能性もある。出土数の少なさからも２号墳の北側には円筒埴輪列が樹立されなかったと思われる。

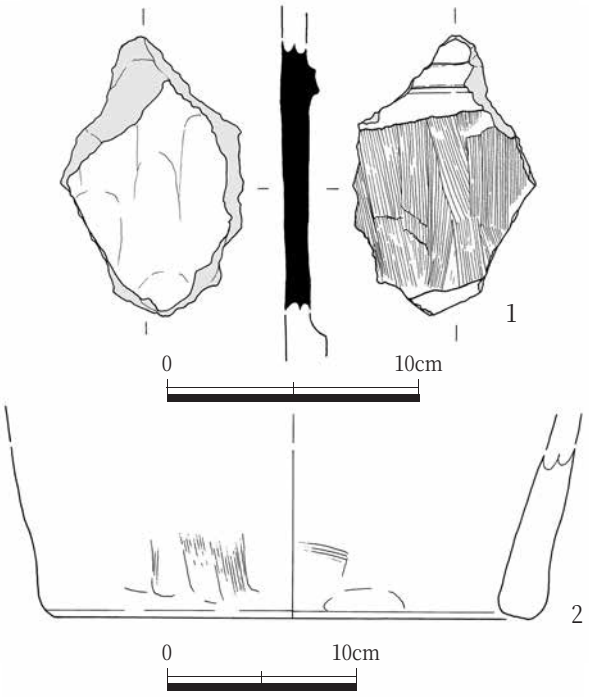


図17　第４次調査出土円筒埴輪（S＝1／3・1／4）

（２）古墳時代後期以降の遺物

１．木棺墓出土遺物

土器（図19）　木棺墓からは黒色土器では埦４点、壷１点、灰釉陶器壷１点、土師器皿が２点出土している。黒色土器埦は土圧により、破片となっているが、ほぼ完形に復元できる。（10）～（12）は内面のみ、（13）は内外面とも黒化処理がされている。（13）は他の埦と比べ径が大きい。（８）と（９）は口縁から頸部にかけて欠いているが、頸部より下半は完存している。（８）は灰釉陶器壷で、底部には糸切り痕がみられる。（９）は黒色土器壷である。（６）・（７）の土師器皿は、他の土器より高いレベルで出土したため、残存状態は悪く破片であるが、木棺墓にともなう可能性が高いものである。

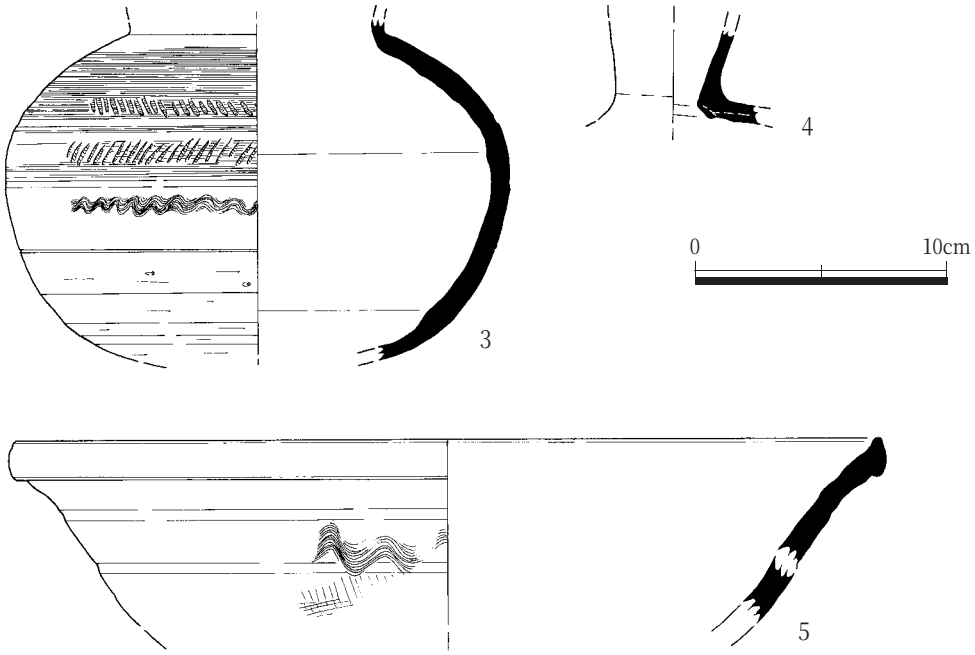


図18　第４次調査出土土器（１）（S＝1／3）

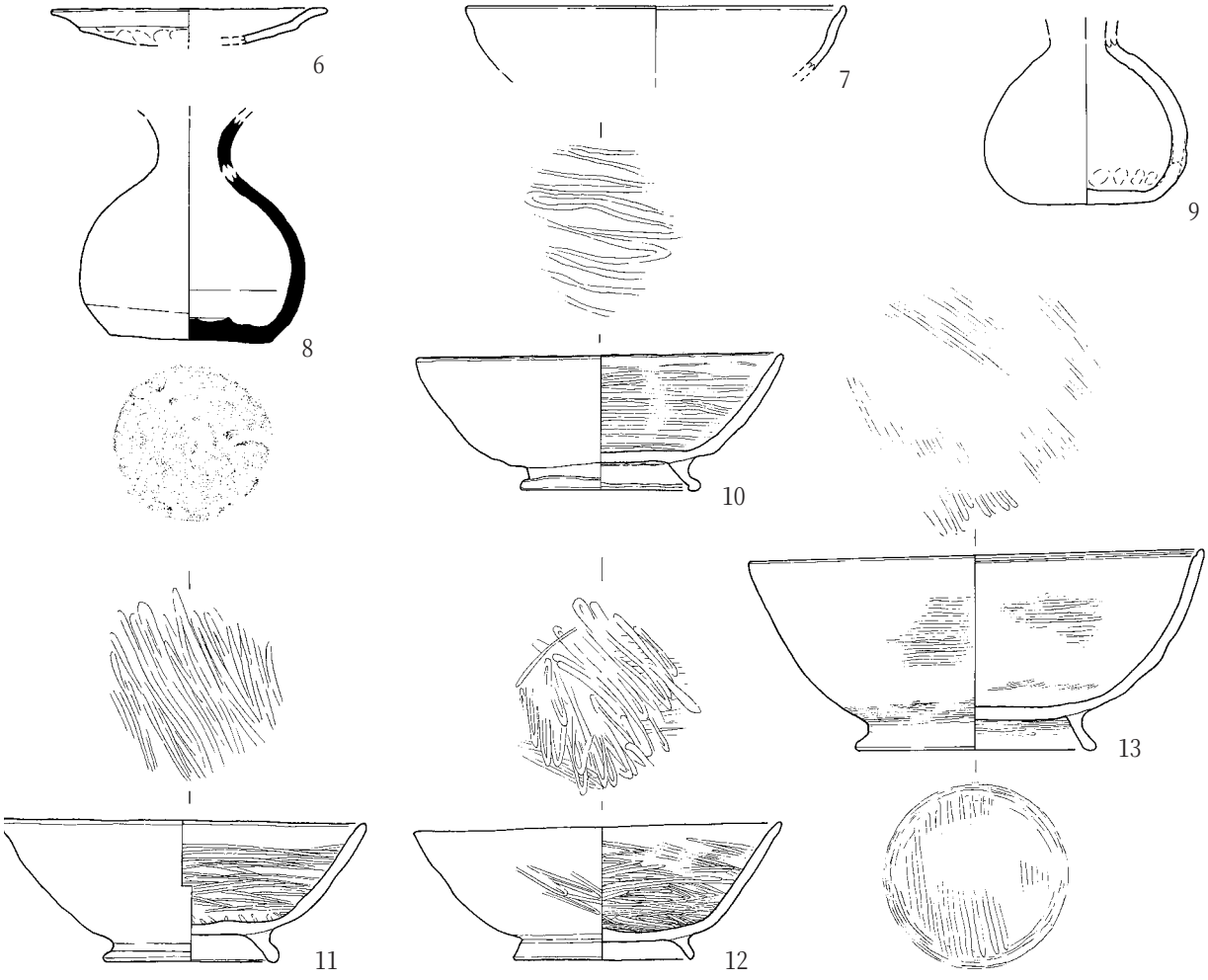


図19　第４次調査出土土器（２）（S＝1／3）

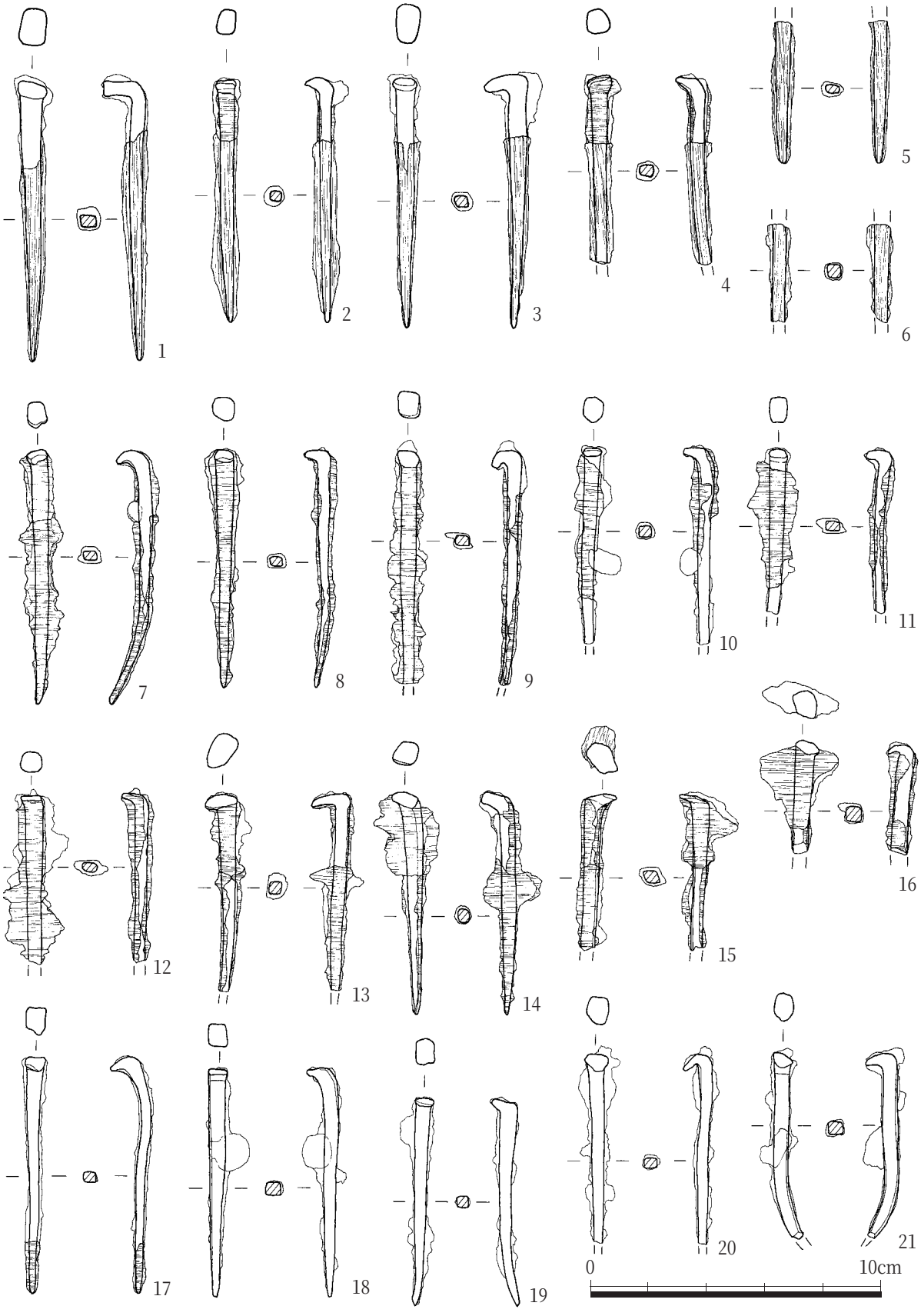


図20　木棺墓出土鉄釘（１）（S＝1／2）

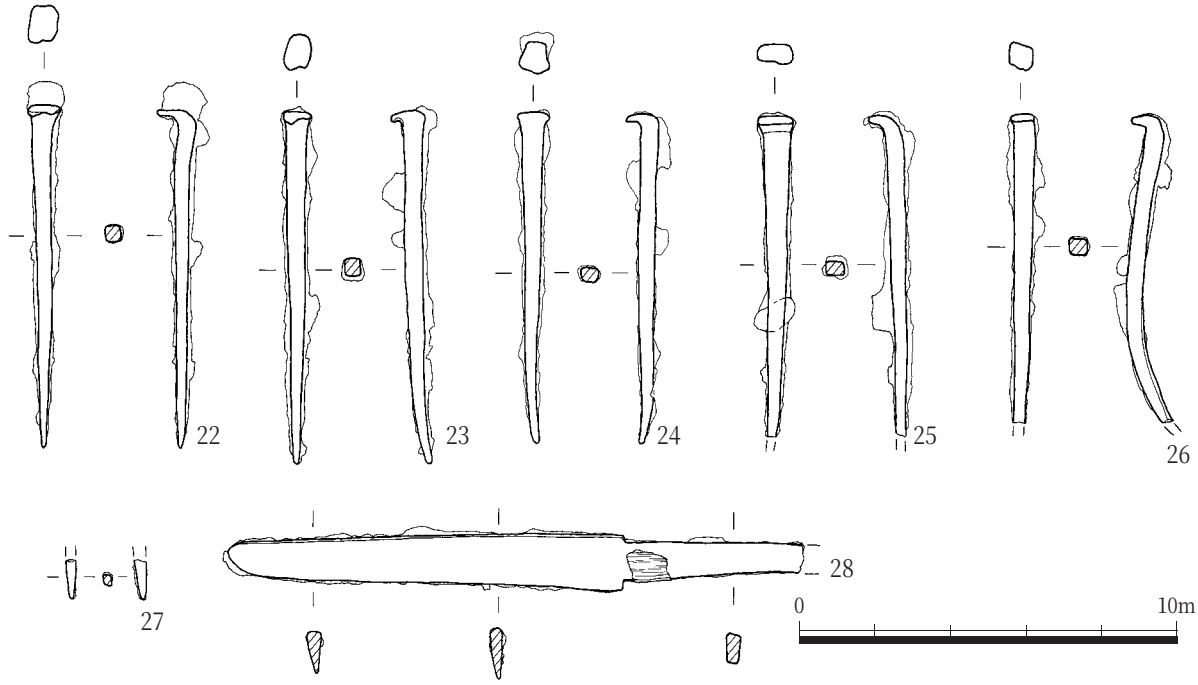


図21　木棺墓出土鉄釘（２）・刀子（S＝1／2）

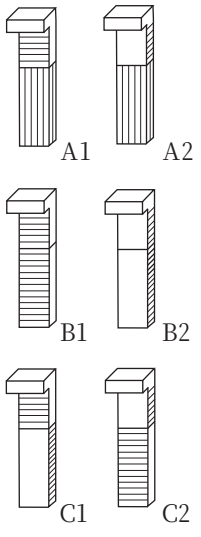


図22　鉄釘模式図

表１　木棺墓出土鉄釘一覧表

図面番号	全長	木質分類	残存状況	木質幅上	木質幅下	接合箇所
図20－1	9.8	A	完形	*1.9*	7.9	小口板－長側板？
図20－2	8.4	A1	完形	1.8	6.5	小口板－長側板？
図20－3	8.7	A	完形	*2.3*	6.5	小口板－長側板？
図20－4	(6.5)	A1	先端欠損	2.2	4.2以上	小口板－長側板？
図20－5	(4.9)	A	上半部欠損		4.9以上	小口板－長側板？
図20－6	(3.4)	A	頭部､先端部欠損		3.4以上	小口板－長側板？
図20－7	8.7	B1	完形	2.5	6.3	底板－長側板
図20－8	8.2	B1	完形	不明	不明	底板－長側板
図20－9	(7.9)	B1	先端欠損	不明	不明	底板－長側板
図20－10	(6.7)	B1	先端欠損	不明		底板－長側板
図20－11	(5.7)	Bか	先端欠損	不明		底板－長側板？
図20－12	(6.0)	Bか	先端欠損	不明		底板－長側板？
図20－13	(6.8)	C1	先端欠損	2.4	4.1以上	底板－小口板
図20－14	7.7	C1	完形	2.8	4.8	底板－小口板
図20－15	(5.4)	C2	下半部欠損	2.6	2.6以上	底板－小口板
図20－16	(3.9)	C1	下半部欠損	2.7	1.0以上	底板－小口板
図20－17	8.1	BorC	完形､木質は先端部のみ	不明	1.8以上	
図20－18	7.9	不明	完形	不明		
図20－19	7.2	不明	完形	不明		
図20－20	(6.4)	不明	先端欠損	不明		
図20－21	(6.4)	不明	先端欠損	不明		
図21－22	9.7	不明	完形	不明		
図21－23	9.4	不明	完形	不明		
図21－24	8.7	不明	完形	不明		
図21－25	(8.5)	不明	先端欠損	不明		
図21－26	(8.2)	不明	先端欠損	不明		
図21－27	(1.1)	不明	先端部のみ	不明		

＊単位はcm。（）は残存。斜字は推定。

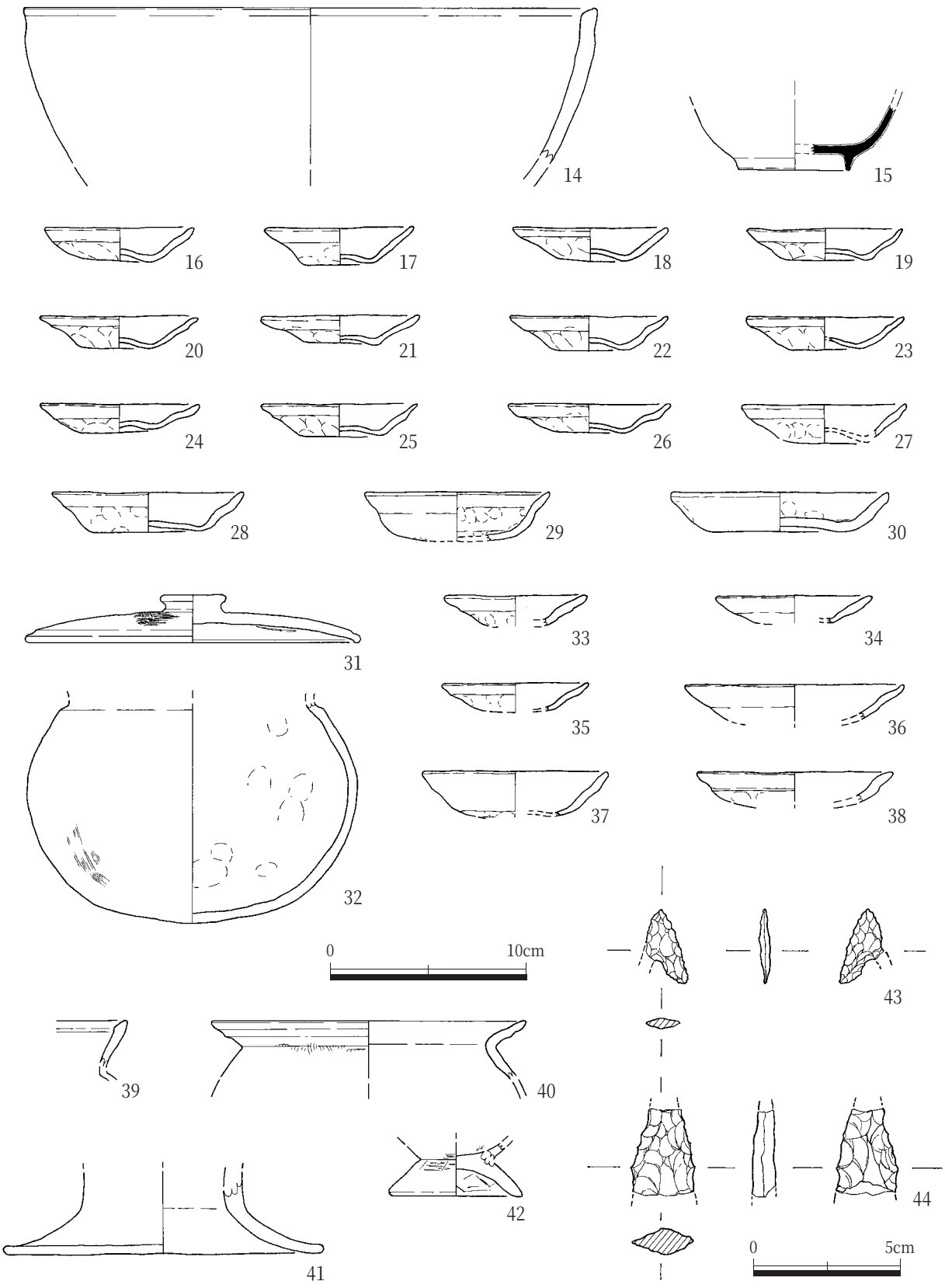


図23　第４次調査出土遺物（S＝1／2・1／3）

鉄釘　鉄釘は破片も含め27点出土している。鉄釘の頭部の形状はすべて折り曲げる形態のものである。長さは7.2cm～9.7cmである。約半数の鉄釘には木質が付着しており、図22のように分けられる。（１）～（６）はA類、（７）～（12）はＢ類、（13）～（16）はＣ類に該当する。これらの木質の付着状況と出土状況（図15）から木棺墓の構造について考えると、Ｂ類は出土位置から底板と長側板を留められたものとして推測でき、下から上に垂直方向に打ち込まれたものがあるので、底板に長側板をのせるものと思われる。A類とＣ類は木棺が腐植した時に土圧により動いたものが多いと考えられ、本来の使用状況を復元するのは困難である。ただ、Ｃ類は、下から上に向かって打ち込まれたと思われる出土状況のものが多いことや、小口付近にしか無いことから、底板と小口板の接合したものと考えられ、小口板は底板にのせられたものと考えられる。そうするとA類は小口板と長側板を接合したものと考えられるが、出土状況からは推測しにくいため、確証は得られない。

刀子　刀子は１点出土している。茎尻は一部欠損している。残存長は15.7cmで、刃部の最大幅は1.3cmである。両関のものである。

２．その他の出土遺物

土器　第４トレンチ出土の（14）は瓦質のすり鉢で（15）は第８トレンチから出土した物で青磁の埦で、これらはいずれも小片である。（16）～（27）は第５トレンチの東壁11層（図12）から出土したもので比較的まとまった形で出土している。これらは径3.7cm～4.2cmをはかり規格がそろっており、底部を押しあげたへそ皿の形態になっている。（28）も同様に第５トレンチからの出土であるが、径4.8cmと大きく平底である。（29）と（30）の土師器皿は第６トレンチ出土である。（31）と（32）は第５トレンチの地山直上から出土したもので（32）に（31）が入り込む形で出土した。（31）は摩滅が激しいものの、表裏とも暗文を施している。甕は口縁部を欠いている。体部は摩滅が激しく調整を認識しにくいが、ハケメが施されているようである。（33）～（38）は第８トレンチ出土で、（33）～（36）はSP1801、（37）・（38）はSP1802から出土している。

鉄製品　第２トレンチの流土から残長9.2cmの棒状の鉄製品が出土した。断面継体はほぼ正方形であり、その形態から鉄釘の可能性が考えられるが確証を得ない。

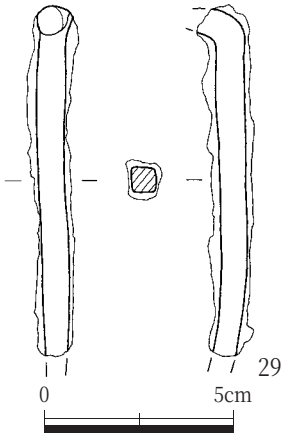


図24　第２トレンチ出土鉄製品（S=1/2）

（３）古墳時代後期以前の出土遺物

（39）～（42）はSX1605から出土した土器で、（39）は布留形甕の口縁や、（40）はいわゆるS字甕の口縁で、（42）は台部の破片となる。小片のものが多いが、布留式期の遺物が比較的まとまって出土した。（43）と（44）はサヌカイト製の石鏃で第５トレンチの流土から出土している。

第５章　第５次調査報告

第１節　墳丘の調査

2005年度に行われた第５次発掘調査は、第３・７・9・10・11・12トレンチの計６ヶ所で調査を行った（図１）。１・２号墳を中心とした墳丘範囲確認調査であった。初年度に計画したうち第４次調査で実施できなかった箇所である。ただ、第12トレンチは第４次調査までの結果を受けて、２号墳の前方部前面と墳丘主軸のずれが問題となったため追加して設けた調査区である。調査期間は2005年８月３日～10月20日である。以下それぞれのトレンチの成果を述べる。

１．第３トレンチ（図25）

２号墳くびれ部には後世に通路がつけられて古墳が切断された形になっており、大きく削平を受けているのは明らかであった。整備工事計画ではこの箇所に盛土を施し、２号墳の後円部と前方部を一体の古墳として認識させる予定であった。第３トレンチはそのような２号墳くびれ部に設けた調査区で、前方部の墳丘盛土の有無の確認を主な目的とした。調査面積は27.6㎡である。

表土を除去すると標高104.1m付近より下部は地山層が露出した。地山層より上は、地山層が風化した橙色シルトにブロック土が均質に混じっており、地山層でないことは明らかであったが、第４次調査で確認された各トレンチの墳丘盛土と比べると少し様相が異なるため、この層の性格を判断しかねた。よって、上部のその部分のみに断割りを設定し、地山層より上は３層に分層することができた（図25－1・2・4層）。それぞれが固くしまっているため、流土の可能性はないが、それぞれの層の境界は明確でないことや、やはりブロック土が他の墳丘盛土と比べ、少なく均質なため、古墳築造以前の旧表土層の可能性もある。当調査区の範囲では、地山直上の層を墳丘盛土

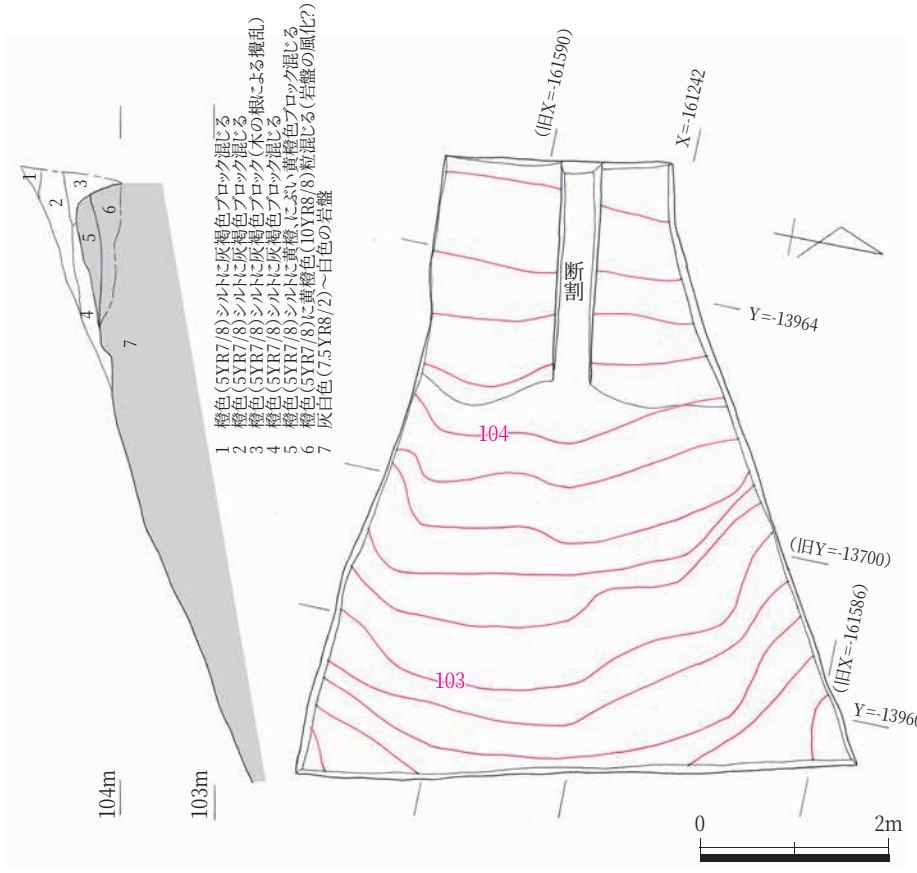


図25　第３トレンチ平面・断面図（S＝1／80）

もしくは旧表土層の両方の可能性を指摘するにとどめたい。遺物は表土中から須恵器や土師器の小片が少量出土しただけであった。

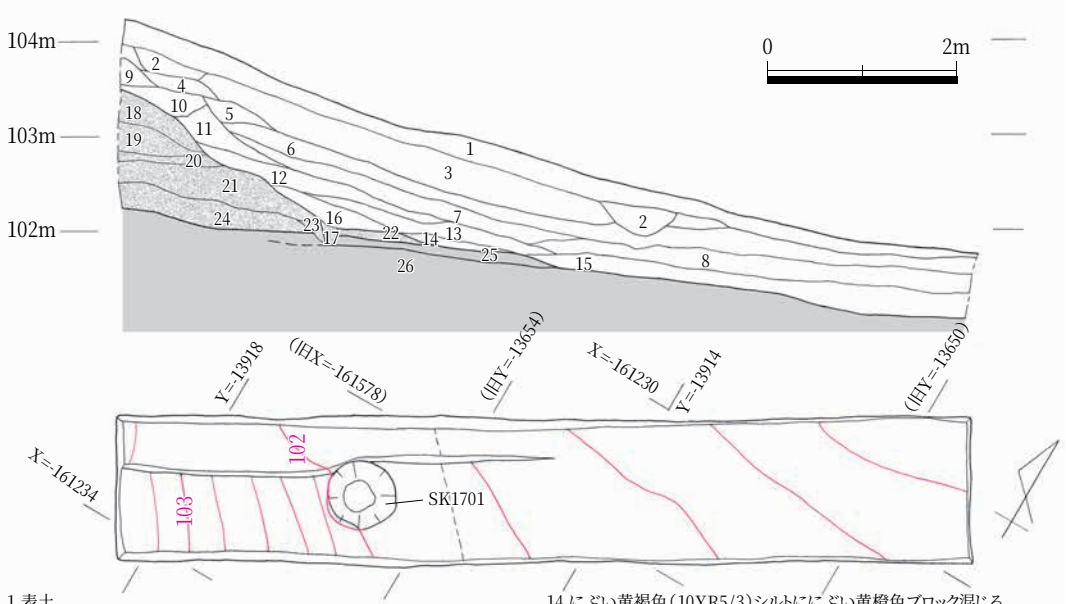
２．第７トレンチ（図26）

第７トレンチは２号墳後円部の北東方向の墳裾を確認する目的で、長さ９m、幅1.5mで、面積約13.5㎡の調査区を設定した。

表土・流土（図26　１～16層）は、最も堆積しているところで厚さ1.2m、調査区南西端の墳丘側でも約70cmの厚さがあった。それらを除去すると、墳丘側では２号墳の墳丘盛土層が、調査区北東側では地山層が露出した。２号墳の盛土は、にぶい黄褐色もしくは橙色シルトに黄橙、橙、明黄褐色ブロックが混じる（18～24層）ものである。墳丘盛土の直下の25層は地山層とも判断されるがやや土壌化が進んだもので、古墳築造以前の旧表土層と思われる。

当調査区の主な遺構として墳丘裾周辺から検出されたSK1701があげられる。墳丘盛土層である22層の上面から掘削されており、規模は径約70cmで深さ45cm前後である。埋土からは土師器皿などが出土しており、第４次－８トレンチで検出された柱穴と同様の時期の遺構と思われる。

現状では、墳丘盛土層である22層の先端の標高101.8m付近に墳丘裾を求めることができるが、中世における改変により墳丘裾が多少なりとも改変を受けているのは明らかで、本来はもう少し北東側に墳丘が延びていたものと思われる。調査区内の状況では掘割りなど痕跡は検出されなかった。遺物は、流土から須恵器や土師器の小片およびサヌカイト片、円筒埴輪の破片などが出土している。



1 表土
2 褐色(5YR6/1)シルト
3 にぶい橙色(5YR6/4)シルトに褐灰・橙色ブロック混じる
4 にぶい橙色(5YR6/4)シルトに褐灰・橙色ブロック混じる(褐灰やや強い)
5 橙色(5YR6/8)シルトに褐色ブロック混じる
6 橙色(5YR6/8)シルトに褐色ブロック混じる(褐色が強い)
7 灰褐色(7.5YR5/2)に橙色ブロック混じる
8 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト～粘質土に褐色の大ブロックが多く混じる
9 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトに褐灰色、橙色ブロックが混じる
10 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトに褐灰色、橙色ブロックが混じる
11 橙色(5YR6/6)シルト
12 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトににぶい黄橙ブロック混じる
13 にぶい橙色(7.5YR6/4)に灰褐ブロックが混じる
14 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトににぶい黄橙色ブロック混じる
15 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト(固くしまる)
16 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトににぶい黄橙色ブロック混じる
17 灰黄褐色(10YR5/2)シルト(木の根か?)
18 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトににぶい黄橙色ブロック混じる
19 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトににぶい黄橙色ブロック混じる(地山の礫混じる)
20 にぶい黄褐色(10YR5/3)～灰黄褐色(10YR5/2)シルトににぶい黄橙色ブロック混じる
21 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトににぶい黄橙色ブロック混じる
22 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトににぶい黄橙、明黄褐色ブロックまじる
23 にぶい橙色(7.5YR6/4)～にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト
24 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトににぶい黄橙、明黄褐色ブロック混じる
25 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトに橙色ブロック混じる
26 地山層

図26　第７トレンチ平面・断面図（S＝1／80）

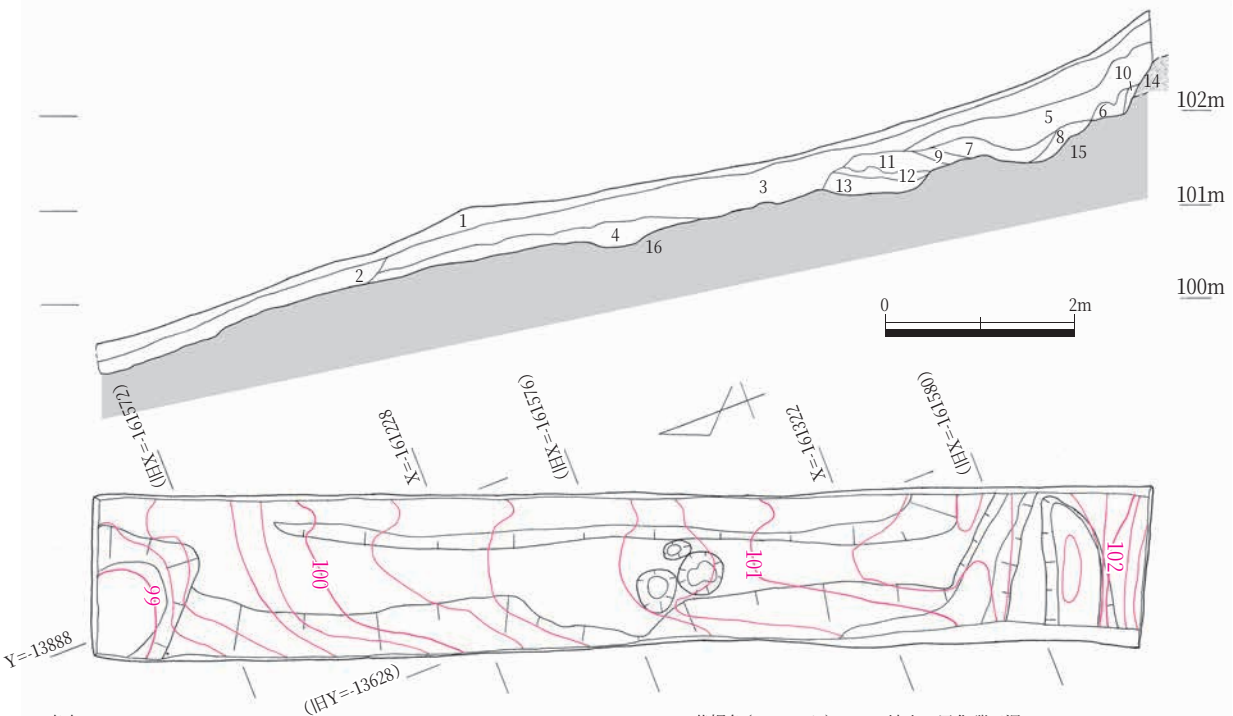
３．第９トレンチ（図27）

第９トレンチは１号墳後円部の北端を確認するために南北約11m、東西約1.5m、面積約16.5㎡の調査区を設定した。

表土・流土が厚さ20～50cmで堆積しており、それらを除去すると南端では１号墳丘盛土（図27－14層）が、その他では地山層が露出した。墳裾周辺や、調査区の東西両端で溝状や土坑状の落込みがみられたが、いずれの埋土も上層の流土と区別できないものであるため新しい時期のものだと考えられた。史跡に指定される前は、１号墳の北斜面は果樹園として利用されていたためそれに伴う排水溝や攪乱であると思われる。調査区南端で検出された墳丘盛土は、標高102.1～２m付近から上に施されており、にぶい黄橙色シルトを基本としているものであった。現状での墳丘基底部は標高101.4m付近に求められ、基底部は地山を削りだしたものであったと思われる。ただ、前述したようにかなり新しい時期に削平を受けているものみられ、墳丘裾はさらに北側にあったと思われる。遺物は、円筒埴輪片が多く出土しているが原位置を保っているようなものはなかった。

４．第10トレンチ（図28）

第10トレンチは１号墳のくびれ部を確認するために設定した調査区である。当初は南北約15.5m、東西1.5mの規模の細長い調査区を設定したが、トレンチ南半部より墳丘を検出したため、くびれ部



1 表土
2 にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)シルトに灰、橙色ブロック多く混じる
3 にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)シルトに灰、橙色ブロック混じる
4 にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)シルトに灰、橙色ブロック混じる(やや粘質)
5 にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)シルトに灰褐色ブロック混じる
6 明黄褐色(10YR7/6)シルトに橙色ブロック混じる
7 にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)シルトに灰白色シルトが層状に堆積
8 にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)シルトに橙・灰褐色ブロック混じる
9 黄褐色(7.5YR8/8)シルトに地山の風化礫が混じる
10 橙色(5YR7/8～6/8)シルトに地山の風化土が混じる
11 にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)シルトに灰褐色ブロック混じる
12 にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)シルトに橙・灰褐色ブロック混じる
13 にぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)シルトに灰褐色ブロック混じる
14 にぶい黄橙色(10YR7/4)シルト(固くしまる)
15 橙色(2.5YR6/8～7/8)シルトの岩盤層
16 浅黄橙色(7.5YR8/6)の岩盤層

図27　第９トレンチ平面・断面図（S＝1／80）

図28　第10トレンチ平面・断面図（S＝1／80）

の形状を明らかにするため一部東西に拡張している。調査面積は約33㎡である。

厚さ約50cmの表土・流土を除去すると、調査区中ほどで土坑（SK1101）が、北よりで溝状（SD1102）の遺構が検出された。SK1101からは須恵器や土師器の小片が出土しているが、SD1102からは遺物が出土せず明確な時期は確定しがたい。ただ、層位からみると両方の遺構とも古墳築造以降であることは間違いない。一方調査区南端では地山層が露出し、標高102.8mから傾斜するのがわかった。その上場の平面形が「く」の字の形に広がっていくことから、くびれ部であることが考えられたため東西両方に拡張し、それぞれの延長部分を検出した。墳丘側には盛土層が全く見つからず、標高103m付近で平坦になっている。平坦面の上面には土坑状の遺構がみられたが締まりのない埋土のため、雑木などの根による攪乱であると思われる。おそらく墳丘上部は削平を受けたものと思われる。また、その傾斜面にはやや固くしまった橙色シルト（図28　15～18層）が検出された。この層からは、埴輪片などが多く出土し、中世などの新しい時期の遺物は一切含まれておらず、１号墳築造以後、比較的早い段階で堆積した墳丘側からの流土だと思われる。そのような状況から、現状で認識できる墳丘基底部は築造当初に近い様子を表しているものと思われる。調査区内での墳丘基底部の標高は101.5m付近である。遺物は、円筒埴輪片を中心に出土しており、その他では南側平坦面の直上の流土からは土馬の胴体が出土している。

５．第11トレンチ（図29）

第11トレンチは１号墳前方部の北端を確認するために設けた調査区で南北11m、東西1.5mの面積16.5㎡の規模で調査を行った。

表土・流土を除去すると、調査区北端部では北東方向にむかって急激に傾斜していた。埋土にはしまりがなく、灰白色のブロックや礫などが多く混じっており、ごく最近に堆積したものだと思われる。北西方向に向かって谷地形が広がるのか攪乱によるものと思われる。墳丘側では流土の直下の13層は固く締まっていたため墳丘盛土の可能性も考えられたが、墳裾周辺標高101.2m付近から検出された土壙墓は、13層を除去後の地山層で検出したため、墳丘盛土でないことが判明した。よって15～18層が墳丘を形成する層と考えられ、いずれも地山層が風化したもので、人為的に盛土されたものではないと思われる。墳丘裾の候補となる地山の傾斜変換点は土壙墓のすぐ南の標高101.3m付近があげられる。

前方部付近墳頂部では盛土が全く確認されなかったが、現況をみても後円部より著しく低いため削平を受けた可能性が高く築造当初に盛土がなされていたかは確認できなかった。

また、トレンチ南端は、ほぼ前方部墳頂部でありながら、後世の堆積土が厚さ約１m近くあるのは不自然であるが、地元の方によると、耕作を行うときに頂部の土砂の流出を補うため墳裾から墳頂に向かって耕していたことがわかっている。耕作のたびにかなりの土砂を上に盛り上げていたためだと考えられる。

土壙墓（図30）　１号墳裾周辺で検出された土壙墓は、幅0.75～0.8mで、深さは検出面からでは約

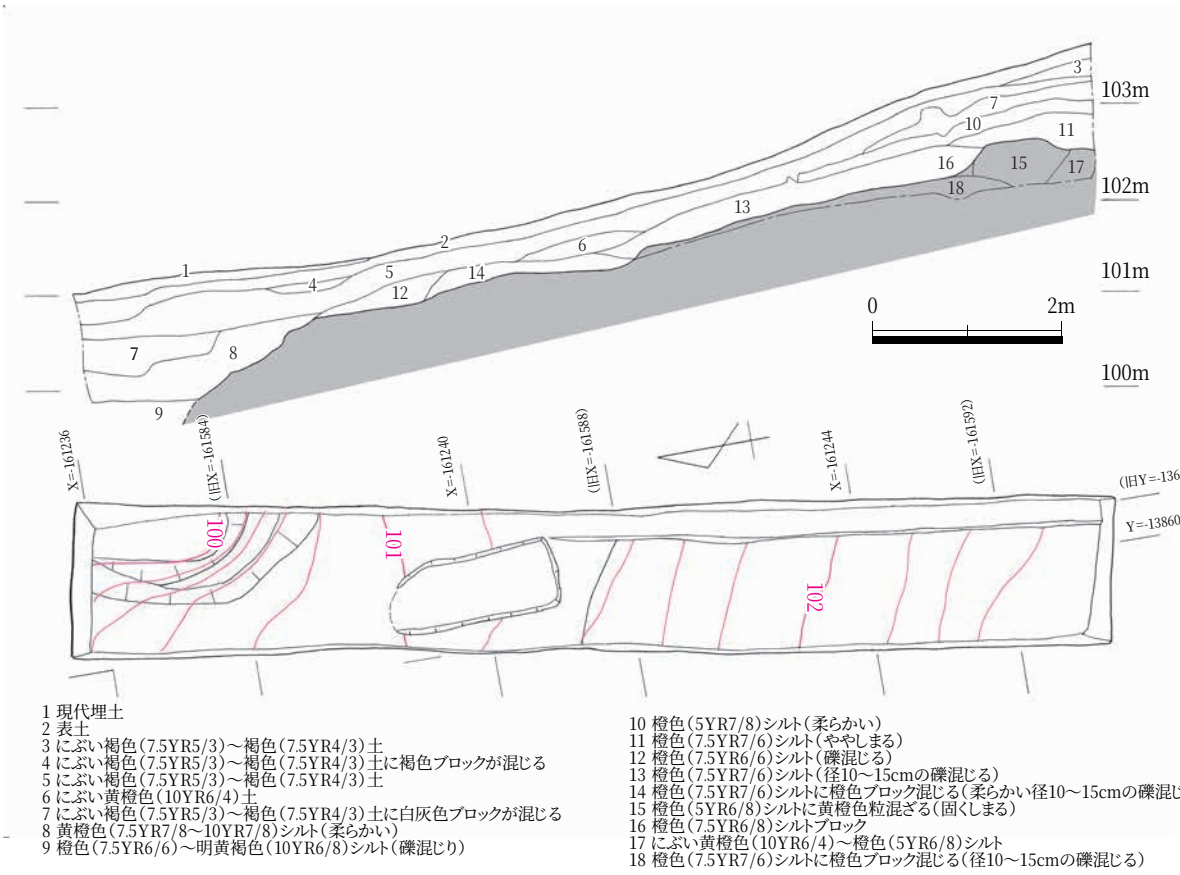


図29　第11トレンチ平面・断面図（S＝1／80）

40cmを測る。北側では掘形の肩が検出されなかったため長さは不明であるが、須恵器坏が２個伏せた状態で出土しているので、これより北側に範囲がさらに延びることは確実で長さ約2.1m以上になる。土壙墓の底面は標高101m付近で平坦であり、北側の掘形上面も南側の上面のレベルとさほど変わらないものだとすれば、北側の上半部は40cm以上の削平を受けているものだと思われる。なお、埋土中より鉄釘や棺の痕跡が検出できなかったので木棺に埋葬されたものではないと思われる。出土した土器は７世紀前半頃のものだと考えられ、１号墳の築造時期よりも後のものである。

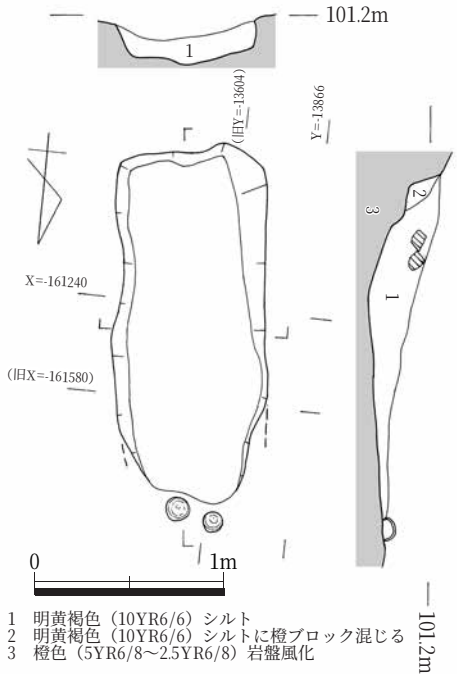


図30　土壙墓遺物出土状況（S＝1／40）

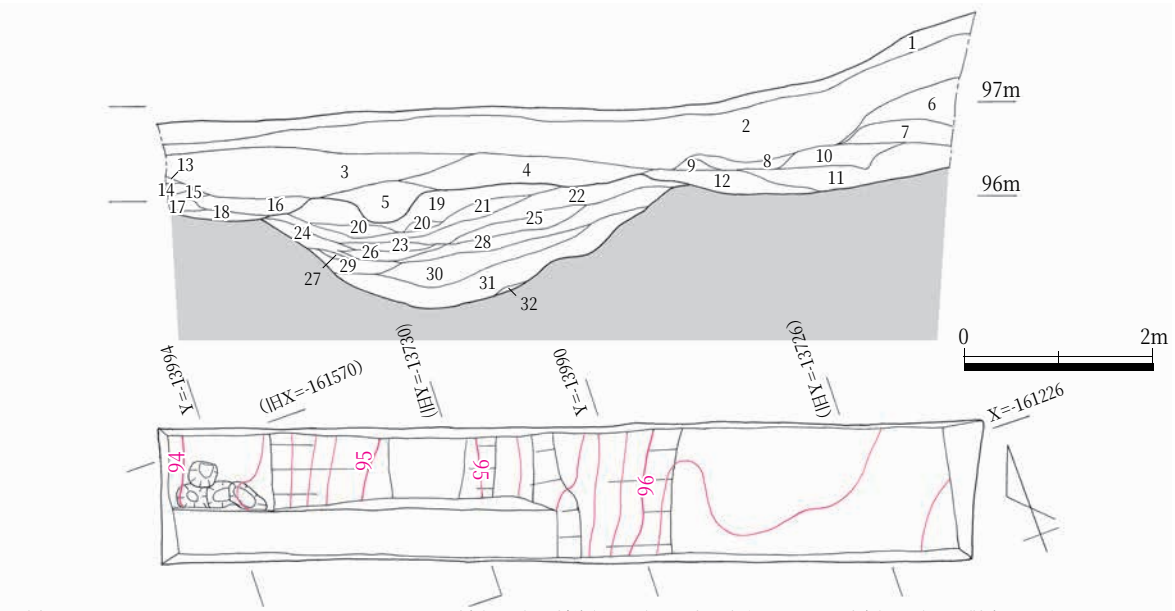
６．第12トレンチ（図31）

第12トレンチは２号墳の前方部の西端を確認するために設けたもので、東西8.5m、南北1.5mの面積12.75㎡である。２号墳の前方部前面は、現況測量図（図7）では見かけの墳

丘主軸に対して北半部が東側に傾いており、築造当初からそのような規格で墳丘を構築をしたのかを確認する目的であった。前方部端の中央から南半にかけては第３次調査によって確認されているため、前方部前面の北半で墳丘の残存状態の良い場所に調査区を設定した。

表土と流土（図31　２～４層）が0.7～0.8mの厚さで堆積していた。調査区東半部ではそれらの層の下にブロック土を多く含む６～12層が堆積していた。これらの層からは土師器皿などが出土しており、中世以降の堆積である。それらを完全に除去すると地山層が露出した。地山層は標高96.1～３mで平坦面になっており、墳丘盛土などは全くみつからず、後世に大きく削平をうけたものと考えられる。調査区西半部においては、流土の下には円筒埴輪片を多く含む層（15～18層）があった。古墳築造以後の土層をすべて除去すると幅4.4m、深さ1.2mの溝が検出された。埋土は橙色シルト層の間に浅黄色や礫が混じる層（21、25～27層）が何層かにわたって薄くたまるものであった。それらは固く締まっており、埋土の状態から自然に堆積したものではなく、人為的に埋められた可能性が高い。

溝からは遺物などは全く出土していない。この溝はその位置や規模、埋土の状態から、第３次調査で検出した２号墳の掘割りに繋がるものに間違いない。今回検出した掘割りの上面は３号墳側で標高95.8m、２号墳側で標高96.1mを測り、掘割の底は標高94.85mである。２号墳の墳丘基底部を掘割りの斜面のどの部分とするのかは難しいが、２号墳側の掘割り斜面は標高95.4m付近で傾斜変換点がありテラス状になっている。第３次調査で検出した掘割の２号墳側の斜面でも標高95.7～５m付近で傾斜変換点があるので今回の調査成果とあう。さらに３号墳側の掘割上面のレベルとさほど齟齬がないのでこの付近95.4～95.7m付近を墳丘基底部と考えるのが妥当だと思われる。



1 表土
2 明赤褐色(2.5YR5/6～5/4)シルト(炭・瓦・礫など混じる)
3 にぶい褐色(7.5YR5/4～5/3)シルトに橙色・褐色・白色ブロック混じる
4 橙色(5YR6/8)シルト～にぶい橙色(5YR6/3)シルトに白色・橙色ブロック混じる
5 にぶい褐色(7.5YR6/3)～にぶい褐色(7.5YR6/4)シルト
6 橙色(2.5YR6/8)シルトに黄橙色ブロック混じる
7 橙色(2.5YR6/8)～明赤褐色(2.5YR5/8)シルトに黄褐色ブロック少量混じる
8 にぶい橙色(5YR6/3)シルトに灰褐色ブロックが多く混じる
9 赤色(10R5/8)～明赤褐色(2.5YR5/8)シルトに灰褐色ブロック混じる
10 橙色(2.5YR6/8)シルトに黄橙色ブロックが多く混じる
11 橙色(7.5YR6/8)～黄橙色(7.5YR7/8)シルトに橙色ブロック混じる
12 赤色(10R5/8)～明赤褐色(2.5YR5/8)シルトに地山の礫が混じる
13 にぶい橙色(2.5YR6/3～5YR6/3)シルト
14 褐灰色(5YR5/1)シルトブロック
15 にぶい橙色(2.5YR6/3)シルトに橙色ブロック混じる
16 褐灰色(5YR5/1)シルトに橙色(2.5YR6/8)が混じる
17 橙色(2.5YR6/8)シルトに褐灰色ブロック混じる
18 橙色(2.5YR6/8)シルトに明黄褐色シルトブロック混じる
19 橙色(5YR6/8)シルトややにぶい橙色ブロック
20 橙色(5YR6/8)シルトに浅黄色ブロックが混じる
21 橙色(5YR6/8)シルト　浅黄・黄褐色のくされ礫が多く混じる
22 橙色(5YR6/8)シルトに黄橙色ブロックが混じる
23 橙色(5YR6/8)シルトに黄橙色ブロックが混じる
24 橙色(2.5YR6/8)～明赤褐色(2.5YR5/8)シルト(白色石が混じる)
25 橙色(5YR6/8)シルト　浅黄・黄褐色のくされ礫が多く混じる
26 橙色(7.5YR7/6)シルトやや褐色
27 橙色(5YR6/8)シルト　浅黄・黄褐色のくされ礫が多く混じる
28 橙色(5YR6/8)シルトに黄橙色ブロックが混じる(ややしまる)
29 橙色(2.5YR6/8)シルトに明黄褐色ブロック混じる
30 橙色(7.5Y6/8～5YR6/8)シルト(しまる)
31 橙色(2.5YR6/8)シルトに浅黄橙・白色ブロック混じる(柔らかい)
32 浅黄橙色(7.5YR8/6)砂礫(地山崩落土)

図31　第12トレンチ平面・断面図

第２節　出土遺物（表３）

第５次調査の出土遺物は、第４次調査と比較すると土器量は少なく、図示できたのは土馬を含めて８点である。そのかわりに、１号墳及び３号墳の墳丘裾の範囲確認だったため円筒埴輪の出土量が多かった。以下その概要を述べる。なお、個々の出土位置や法量などは表３を参照していただきたい。

土器（図32）　（１）～（４）は第７トレンチの流土から出土しているもので（２）と（３）は須恵器坏身、（４）は土師器甕の破片である。（５）と（６）は、第11トレンチで検出された土壙墓から出土したものである。いずれも伏せて副葬されており、蓋か身のいずれの機能を有していたかは不明のため、それぞれの形態から推測して図示している。（５）と（６）は両者とも底部は回転ヘラ切り後は未調整である。（７）は第11トレンチから出土している土師器甕で、内外面とも磨耗が激しく調整は不明である。

土馬　土馬（８）は体部のみで、頭や手足などは欠損していた。外面はナデ調整により整形されている。体部上部中央には、指で強くなで凹ませており、鞍を表現している。

埴輪（図33～35）　（27）と（28）は第９トレンチ、（９）～（15）、（19）～（26）は第10トレンチ、（16）～（18）、（29）・（30）は第12トレンチから出土しているものですべて円筒埴輪片であると思われる。調査位置より、第９・10トレンチ出土のものは１号墳に使用されたもので、特にくびれ部付近からの出土が多い。第12トレンチ出土のものは２・３号墳間からの出土であるが第４次調査の成果から、２号墳の北側に埴輪を使用した可能性が低いことから３号墳に用いられた埴輪だと考えられる。いずれの埴輪も１次調整のみで、２次調整が省略されており、突帯部の突出もひくいものである。

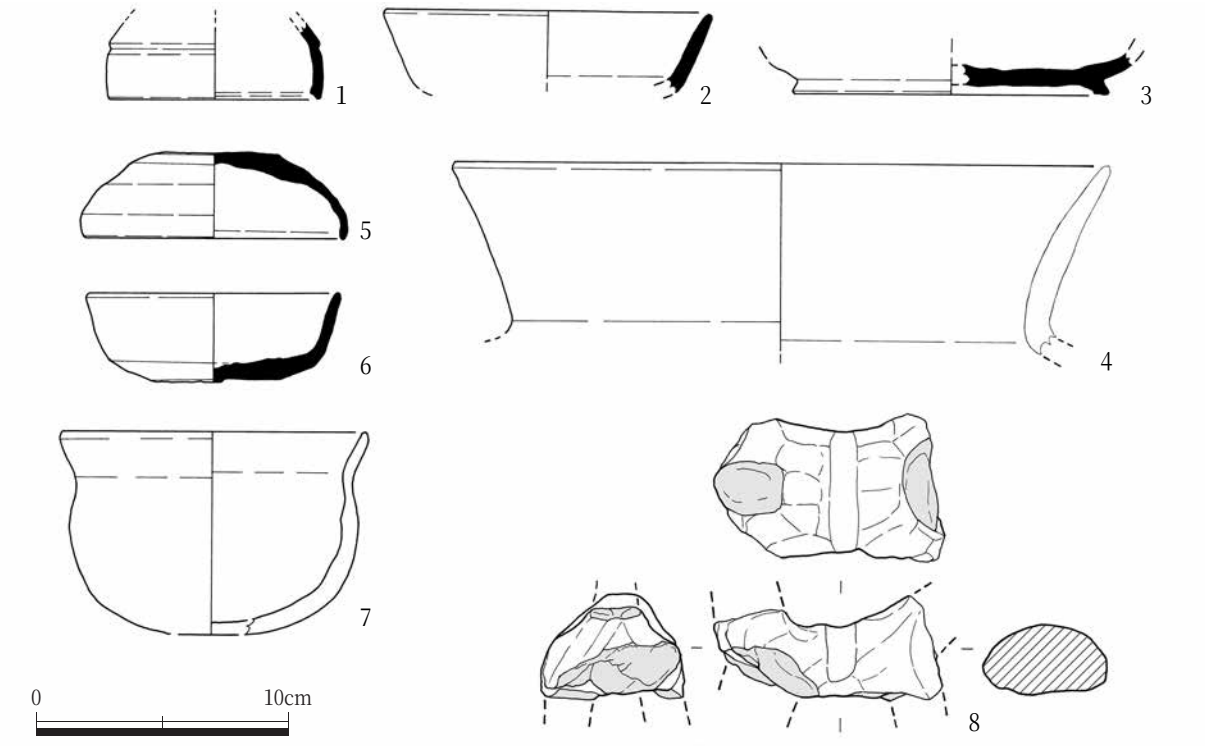


図32　第５次調査出土土器・土馬（S＝1／３）

図33　第５次調査出土円筒埴輪（１）（S＝1／４）

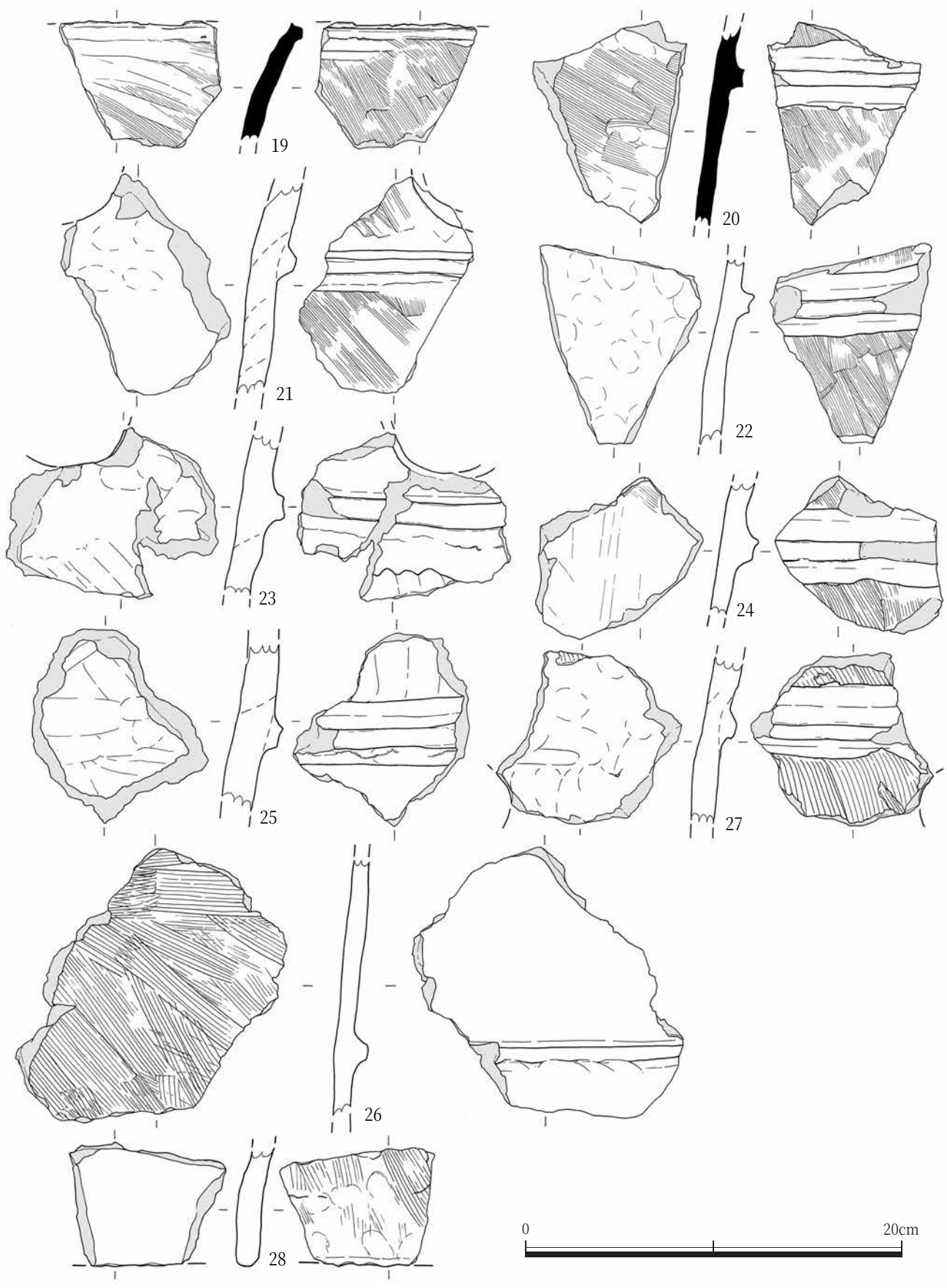


図34　第５次調査出土円筒埴輪（２）（S＝1／３）

（９）・(26）などは表面の摩擦が激しいため、外面調整を確認できないが他のものと同じくハケ目が施されていたと思われる。(17）～（20）は灰色系の色調をもつ須恵質の円筒埴輪である。他は橙色系をもつ土師質のものである。ただ、（10）・(23)・(27)・(29）は硬質で焼成も非常に良く須恵質に近いものである。

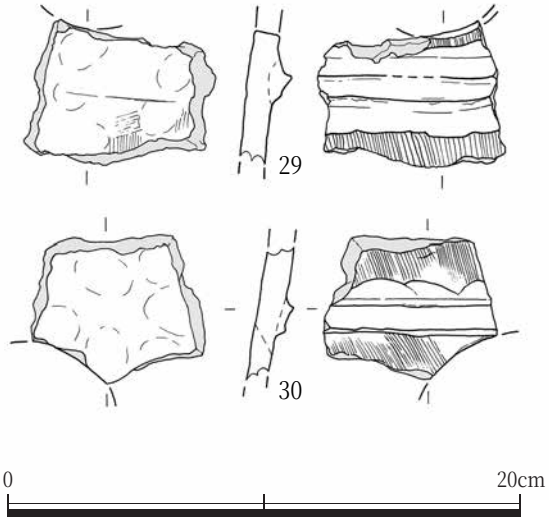


図35　第５次調査出土円筒埴輪（３）（S＝1／３）

第６章　珠城山１号墳横穴式石室測量報告

第１節　はじめに

今回整備事業を行うのにあわせて１号墳後円部の横穴式石室の再実測を行った。１号墳は昭和30年度に奈良県教育委員会によって石室内が調査されている（第１次調査）。玄室は完存しているが、羨道部の大半は調査以前に失われていたようである。その後、保存され、現在も石室内部を見学することは可能である。しかしながら、第１次調査時の測量図には羨道天井石が２石描かれているものが、現在は１石になっており、それに対応する西側羨道側壁も失われている。いつの時点かは定かではないが調査後に失われたようである。その他は変化はみあたらない。なお、測量期間は平成19年1月18～23日までである。

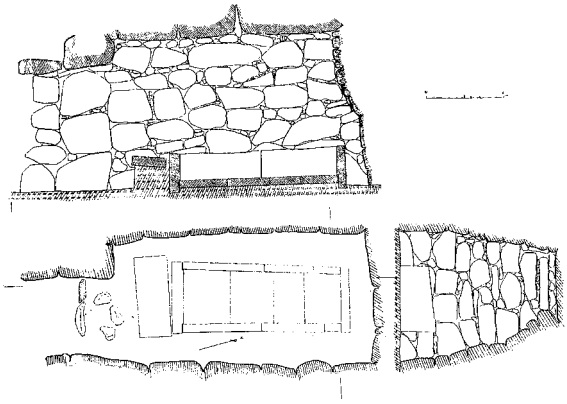


図36　第１次調査 １号墳後円部横穴式石室（S＝約1／100）

第２節　横穴式石室と墳丘の関係（図38）

１号墳全体の墳丘復元の詳細は終章に譲り、ここでは後円部と横穴式石室の位置関係に限ってみていく。第４・５次調査結果により、第10トレンチからはくびれ部を検出することができ、第８・９トンチからは削平されているものの墳丘端を確認している。それにより復元すると直径約25mの後円部になる。現地表面の墳丘北側の102.5mの等高線付近が墳丘裾をあらわしていることになるため、横穴式石室との平面的な位置関係をみると石室奥壁付近に後円部の中心がくると考えるのが妥当である。また、第９トレンチで確認されている１号墳の墳丘基底部は標高101.4m付近で、墳丘西側の第８トレンチでは標高102.4～5m付近で確認されている。石室基底部の標高は102.9m付近で墳丘基底部よりやや高いレベルに位置している。

また、第８トレンチでは地山層が103.7m付近まで確認されており、横穴式石室は地山層に少なくとも１m以上の墓壙を掘り込んで構築されたこ

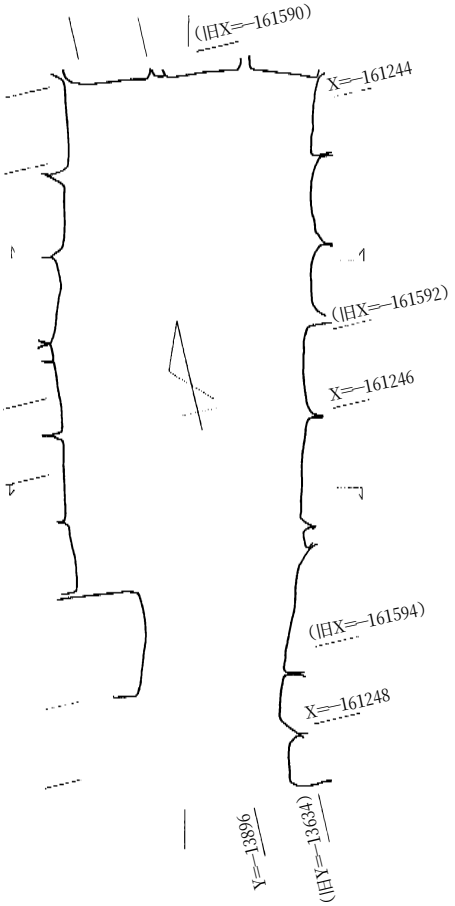


図37　１号墳石室座標位置（S＝1／100）

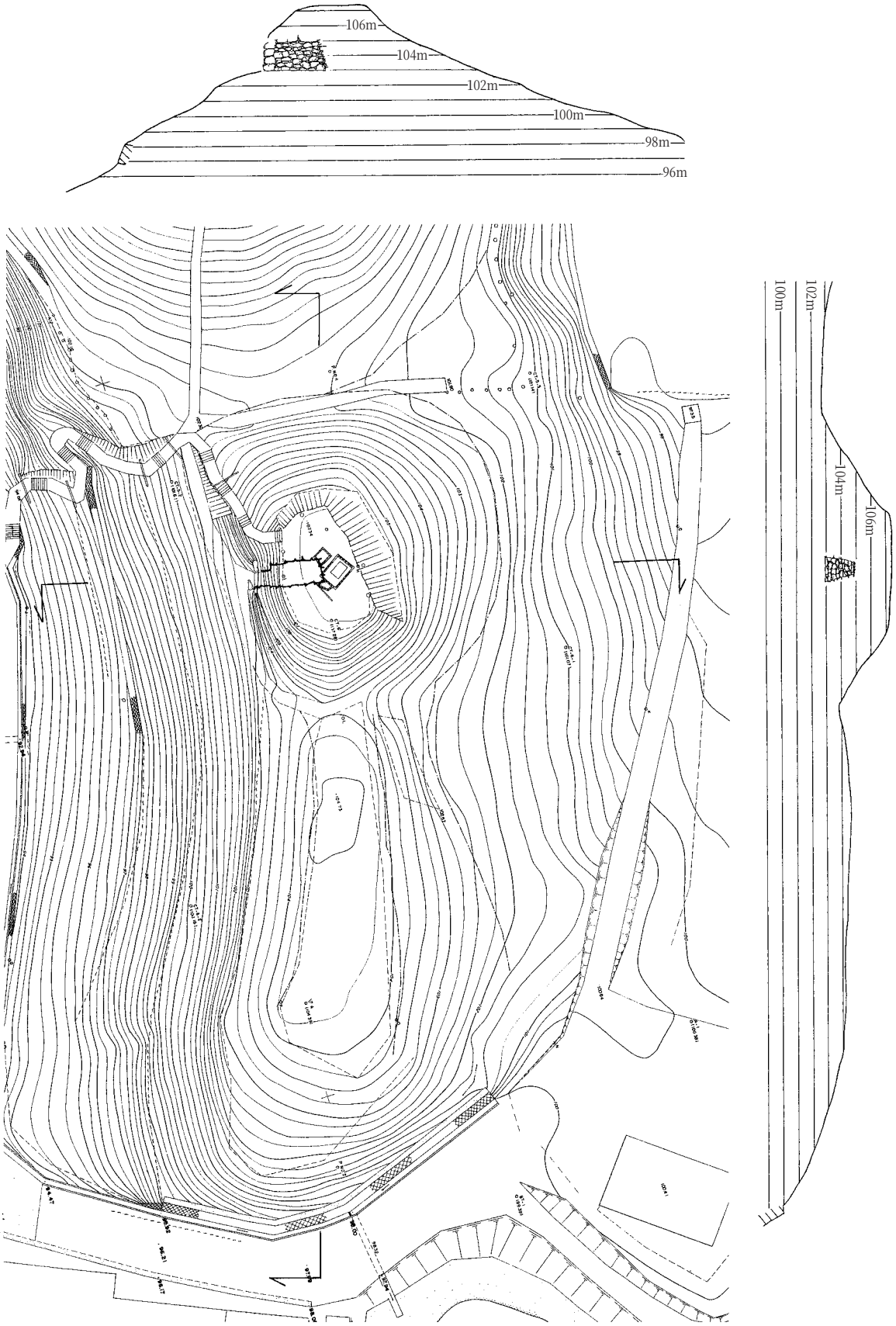


図38　1号墳の墳丘と石室（S＝1／400）

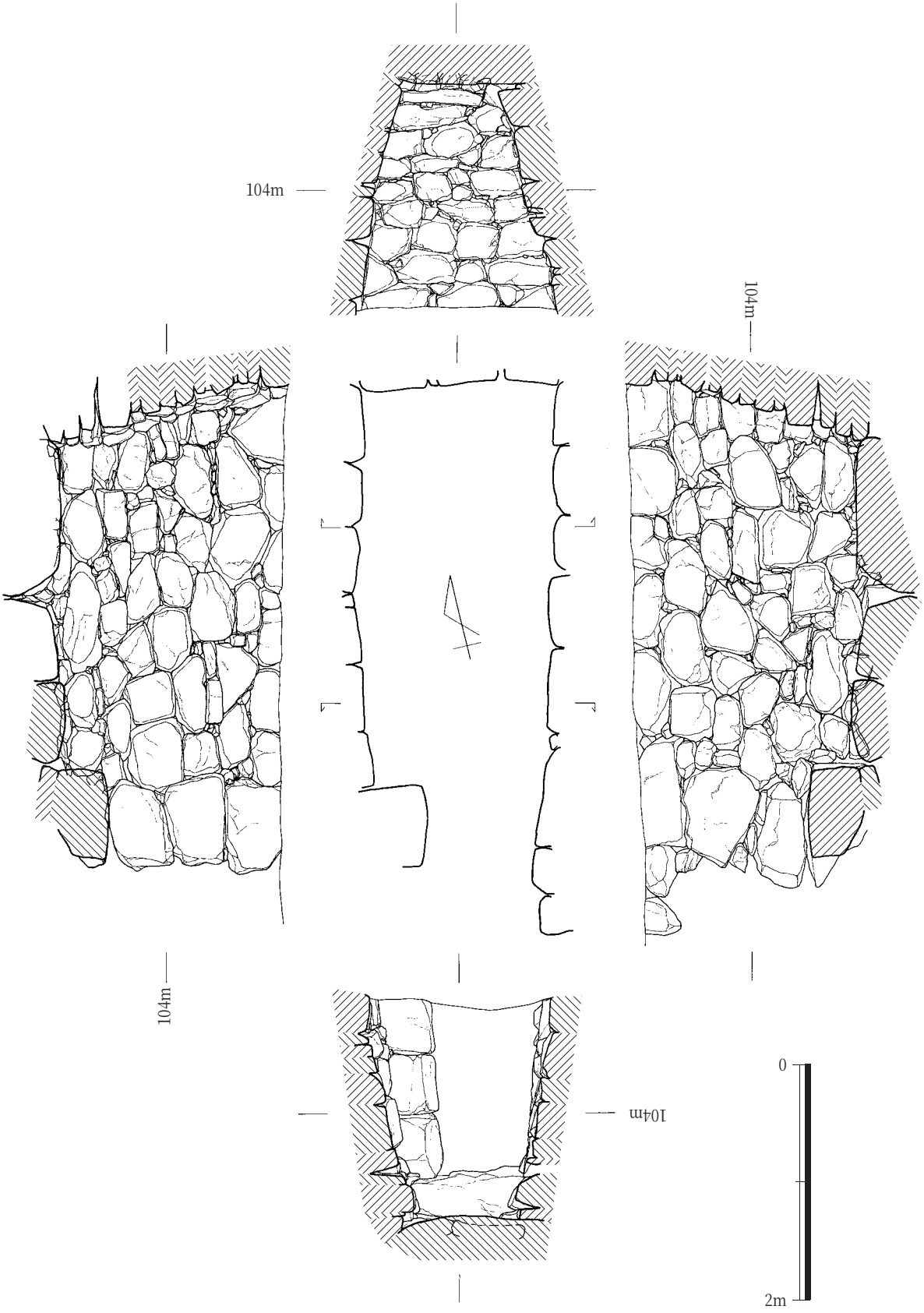


図39　１号墳横穴式石室（現況）（S＝1／50）

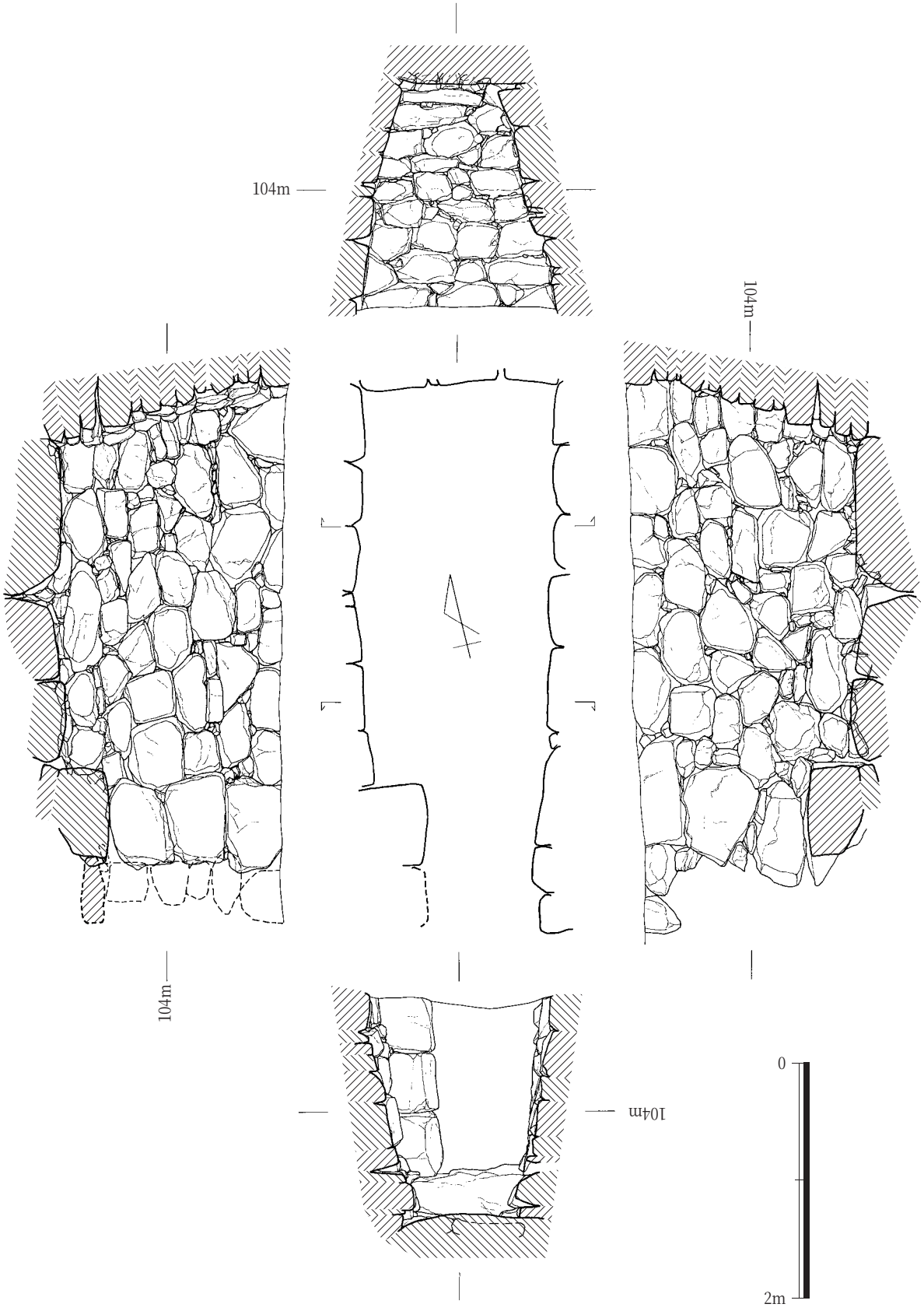


図40　１号墳横穴式石室（復元）（S＝1／50）

とがわかり、現状の南の崖面からも確認することができる。

第３節　横穴式石室（図39・40）

石室は、奥から見て右側に袖をもつ右片袖式石室である。主軸は座標北を中心としてN－11°－Wで、開口部は南南東方向へ開口している。規模は残存長4.3mで、玄室は長さ3.4m、幅は奥壁付近で1.65m、玄門付近ではやや幅は狭くなり約1.45m、高さは約1.9mである。羨道は残存長1.3m、幅は0.95m、高さ約1.5mを測る。右片袖部の幅は50cm、前壁高は約0.4mである。

玄室側壁は両側壁とも小型の石材を用い、石材と石材との間を調整する小さな詰石も多くみられる。水平方向に明確に目地はとおらないが、６～７段を基調として石材を積んでいることがわかる。両側壁とも内傾するように積まれており、横断面は台形状になっている。奥壁も小形の石材で構成されており、８～９段積である。奥壁上部では幅が長く高さが低い扁平な石材を使用している。奥壁も両側壁と同様に内傾するように積まれている。

羨道部はほとんど残存しておらず、西側側壁は袖部のみ、東側側壁も玄門部の１列分と、基底石がもう２石残存しているのみである。玄門部は袖部のある西側は横位にした石材を３段に積み、袖のない東側も西側に対応するように３段で積んでいる。玄門部を構成する石材は、玄室に使用している石材よりも大きく、玄室壁面の石材の積み方と異なる。第１次調査の測量図をみるとこれより羨門側の羨道壁面の石材は小さく、玄門部のみ大きな石材を使用したと考えられる。天井石は玄室で３石、羨道は第１次調査次では２石あった。玄室天井石は羨道天井石の上に接していない。

以上のような石室構造から編年的位置を考えると、先にあげたもののうち、玄室や奥壁の壁面が５段以上で構成されていること、袖部が各段を一石で構成した３段積みで、他の部位よりも大型の石材を用いていること、羨道側壁の石材の大形化がなされていないことなどが編年の指標となる。これらの特徴は、川西市勝福寺古墳１石室などと共通しており、１号墳の横穴式石室はTK10形式期古～新段階前後を中心とした時期を推定しておきたい[2)]。

【註記】

１）小島俊次　伊達宗泰　1956『珠城山古墳』奈良県教育委員会

２）近畿地方の横穴式石室の変遷を考えるとき、玄門構造が特に重視されている。
太田宏明2003「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』第15号　日本考古学協会
太田宏明2003「畿内地域における導入期の横穴式石室」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設50周年記念
宮元香織2005「大和における横穴式石室についてー大和盆地における古墳時代後期の動向－」
『古代日本と東アジア世界』奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集Vol.６
高松雅文2006「第４章　４　第１石室の編年的位置」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会

第７章　整備工事

第１節　はじめに

珠城山古墳群史跡整備工事の基本設計及び実施設計の策定にあたり、初年度の平成16年度から山の辺古墳群整備検討委員会において審議を重ねた。その後第４・５次発掘調査成果を得て、随時委員会において審議・修正を経て、以下の基本方針、基本計画を決定した。それをもとにし、平成17年度に実施設計を委託し、平成18年度に整備工事を行った。

第２節　基本方針および全体計画

（１）基本方針

珠城山古墳群の整備計画を進めるにあたって以下の点について留意した。

・学術的に貴重な文化財である珠城山古墳群を文化遺産として好ましい状態で保存活用する。

・珠城山古墳群は、ハイキングコースである「山の辺の道」沿いに位置しており、休日になれば、古代に関心を持つ人をはじめとし、多くの人が訪れる場所である。地元の方々はもちろん、それらの人々にとっても親しみやすい歴史的空間、憩いの場を提供する。

・大和青垣国定公園内に位置しており、自然が多く残されている場所であるため、大規模な構造物を伴うような過度な復元整備はせず、現在の植生をいかした自然の素朴さを感じられるものを方針とした。

（２）全体計画（図41）

上記の基本方針に沿って、発掘調査の成果を踏まえ以下の全体基本計画を決定し、それをもとに実施設計を行った。

・第４・５次の発掘調査の成果から、築造当初の正確な墳丘を復元することは不可能であり、墳丘の明示を行わない。ただ、２号墳に関しては後円部と前方部が寸断されているため、現況と違和感がないように盛土を行い一体の古墳として認識させる。

・珠城山古墳群への進入路のうち、１・２号墳間の南側の既設の階段を整備し、主要な園路とする。また、入り口には導入のための案内板を設置する。

・北側の平坦面を整地し、見学者が立ち寄る学習の場とする。

・倒木や隣地に対して影響のあるもの、また、墳丘上をある程度見学できるように伐採し、墳丘上からの眺望もよくする。

第３節　整備工事

平成17年度に決定された基本計画をもとに作成された実施設計のもと平成18年度に整備工事を実施した。工事期間は、１月24日～2月28日である。各工事箇所の概要について以下に述べる。なお、各箇所の標準図などは設計図書から転載したものを図41～44に図示した。

工事用仮設道路　本工事において盛土や転圧などを行うため、小規模なものであるが重機などを搬入しなければならなかった。珠城山古墳群の南側はすべて斜面であり、重機の搬入は不可能であった。古墳群すぐ東の私道を利用して、１号墳の北側を通過し、北側の平坦面まで搬入するしかなかった。私道に関しては地権者の理解が得られ、使用する許可を得た。北側平坦面までの仮設道路設置場所は発掘調査により古墳時代後期の遺構はないことは判明していたが、１号墳北側には適宜、鉄板や盛土などを設置し、史跡内における掘削などは最小限にとどめ、重機搬入路をつくった。その他の部分でも同様に鉄板などを敷き、古墳はもちろんのこと史跡内を掘削することがないようにした。工事終了後は現況に戻した（図版30）。

伐採　各々の工事を行うにあたって、まず支障となる木の伐採をおこなった。また、史跡内から、市道側や史跡に隣接する住居などに影響を及ぼすもの、立ち枯れし、倒れる危険のあるもの、墳丘を損なう恐れのあるものの伐採をおこない、その他北側広場周辺など史跡内からの眺望を確保するため部分的に伐採をおこなった。

２号墳くびれ部の盛土　２号墳くびれ部には盛土を行った。盛土量は293.8m³で、盛土の表面積は256m²であった。古墳本来の墳丘を復元することは不可能なため、現状の後円部と前方部をなだらかにつなぎ、現在の地形と違和感がないようにした。また、２号墳前方部と後円部が往来できるように、盛土上部を整え、全体に張り芝を行い現況になじむようにした。

園路　１・２号墳間の南側の既設の階段は、コンクリートブロックを置いただけのものであったので、まずこれらを除去したあと、擬木製の階段と手すり（防護柵）を設置した。既設の道を利用するため、南側階段の幅は１ｍとした。南側階段は斜面をジグザク状に屈曲して登るため、南側の崖面に接する箇所のみ手すりを設置した。また、この階段から北側の広場に直接行けるようにするため、１・２号墳間には幅１.5mで土系舗装した園路を新設した。北側階段を設置する斜面には果樹園として利用しているときに石垣が設置されていたため、これを一部除去し、幅1.5mの擬木製の階段を新設し、両側には手すりをつけた。

北側広場の整地　北側の平坦面は現在説明板がつけられているものの、進入路である園路が整備されておらず、草などが繁茂する季節はその場所に行くのさえ困難であった。本工事では、まず、広場周辺の伐採を行い、環境を整えた。そのあと、地表に比較的粒の粗い山土を盛土し、ローラーによって転圧し表面を整えた。また、既設看板を見やすい位置に移動し、見学者及び地元の方々にとって親しみやすい空間、古墳群の歴史的な理解を深めるための場として利用されることを目指した。

説明板　珠城山古墳群には昭和59年度に作成した既設の看板があった（北側広場）。この看板は、第１・２次調査成果を盛り込んだ学術的な内容に特化しており、珠城山古墳群の歴史的な理解を得るものであった。よって、今回は、第４・５次調査の成果を盛り込むこと、また見学者が古墳群のどの場所にいるのかがわかる（現在位置確認ができるように）ことを目的に看板を製作した。南側階段を登ったところの1・２号墳間の平坦面（説明板１）、また、3号墳の前方部が残存しているところ（説明板２）の２箇所に設置した。説明板１は、91cm×60cm（フルカラー）で大きめの板を使用し、現在

地を図示した古墳の測量図や簡単な調査成果を載せた（図版31）。説明板２は、41cm×60cm（フルカラー）の板を使用し、既に大半が失われている３号墳を見学者に認識してもらうことを目標とし、現在位置を図示した墳丘図や第３次調査の調査写真を載せた（図版31）。

案内板　通常当古墳群を見学する際に通る市道から、古墳群への導入案内が今まで全く無かったため、今回整備した１・２号墳間と２・３号墳の既設の登り口に案内板を設置した。

その他　用地買収前に果樹園として利用されていたときに使用されていたと思われる用水枡が放置されていたので、これを壊して埋め戻した。

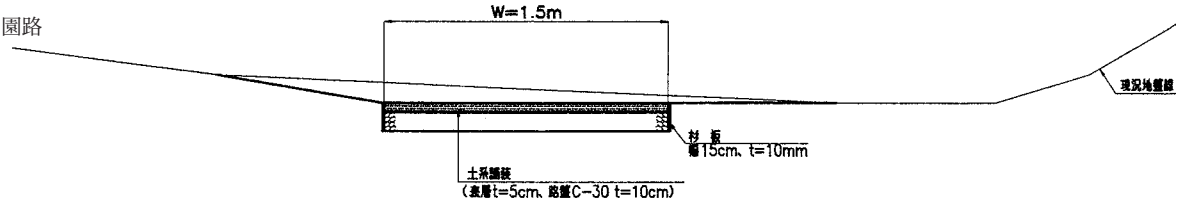
第４節　まとめ

昭和53年に史跡指定を受け、また、昭和60年に整備を一部実施してから、約20年間たってようやく整備工事が完了した。工事の結果、古墳の墳丘を散策できるようになり、快適に見学できるようになった。

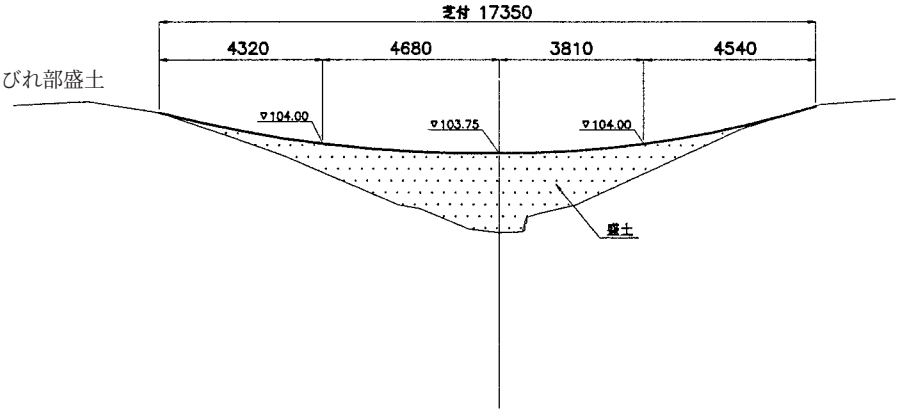
整備工事は、現況をできるだけ生かし、なおかつ見学しやすいことを第一目標と置いた。そのため、復元整備は２号墳の盛土（厳密には復元ではない）を除いては全く行っていない。伐採などの環境の整備と園路の整備などが主要な工事であった。ただ、基本方針で決められたように山の辺の道沿いという自然が豊かに残っているこの場所においては、無理な復元をする必要はないと思われる。今後、当古墳群が地元の方々に愛され、見学しやすい場になっていくためには、この状態を維持していくことを主眼に置き、保存管理に勤めなければならない。

図41　保存整備工事計画平面図

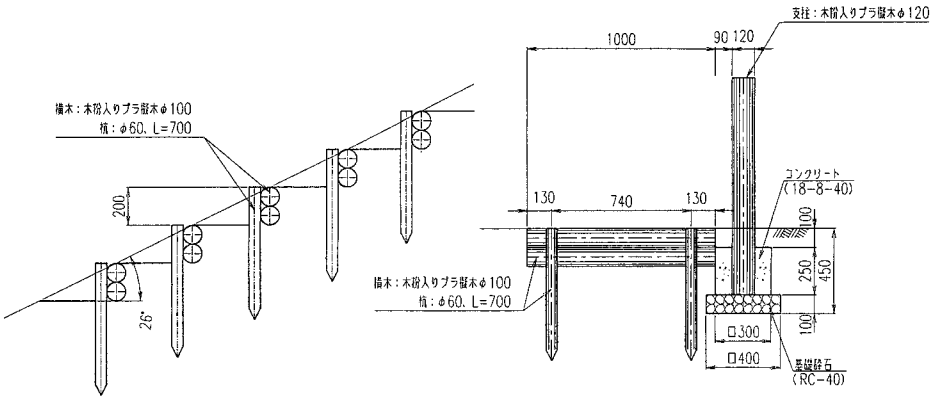
園路



2号墳くびれ部盛土



南側階段



北側階段

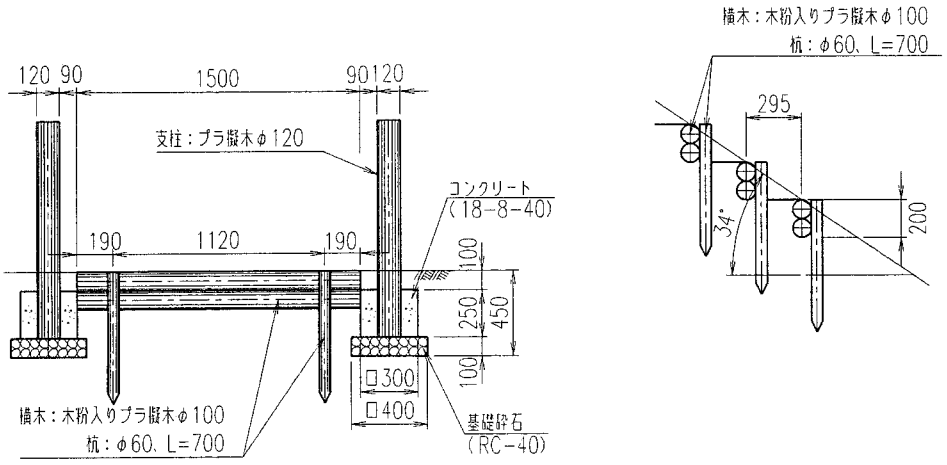
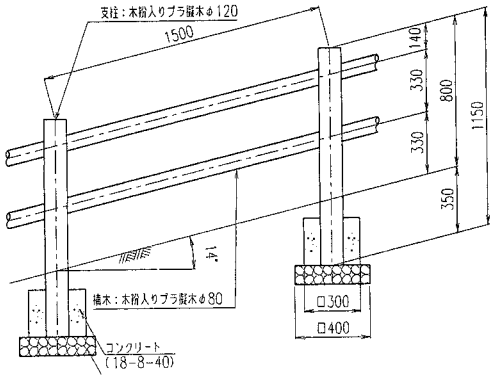
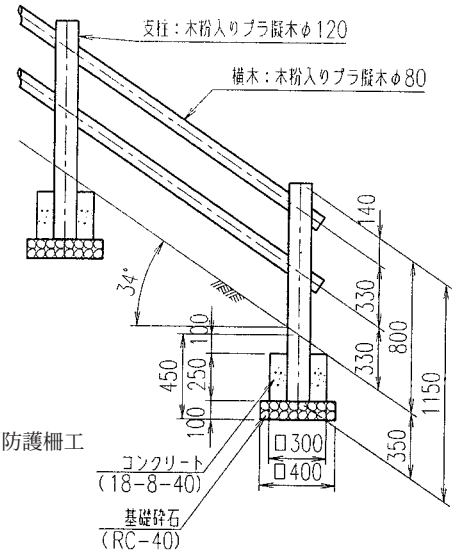


図42　標準断面・側面図１

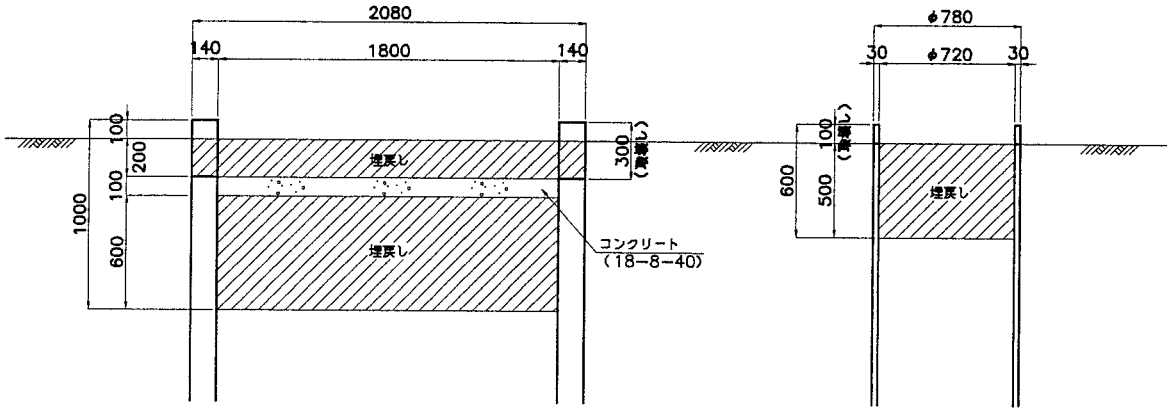


南側防護柵工



北側防護柵工

既設用水桝埋戻し工



案内板1・2

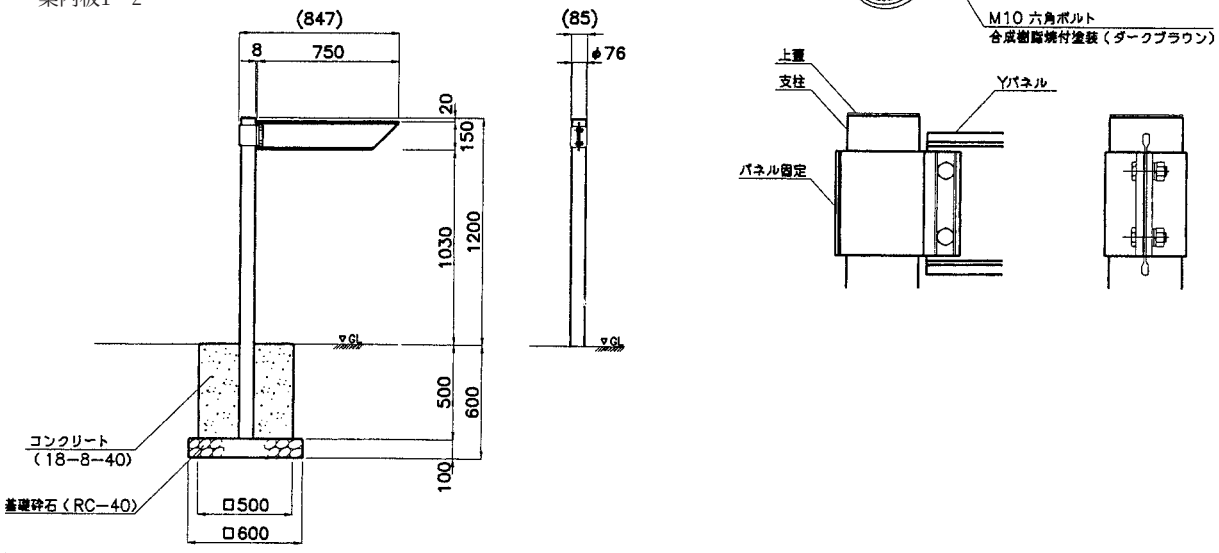
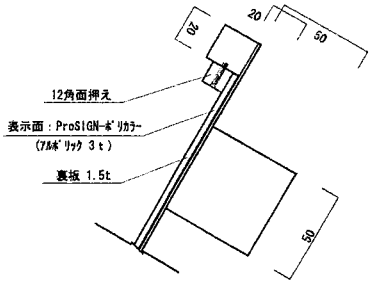
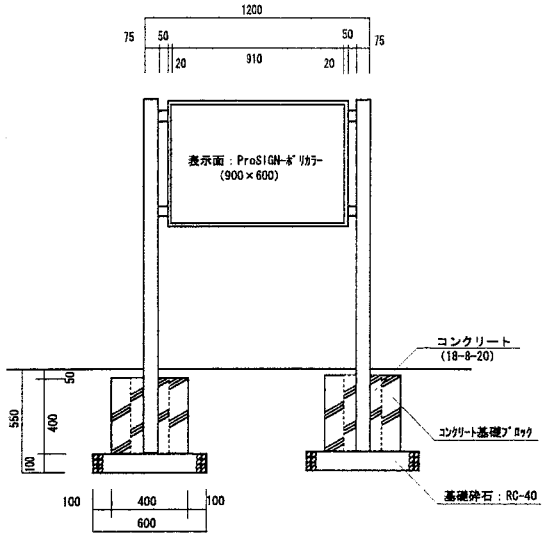
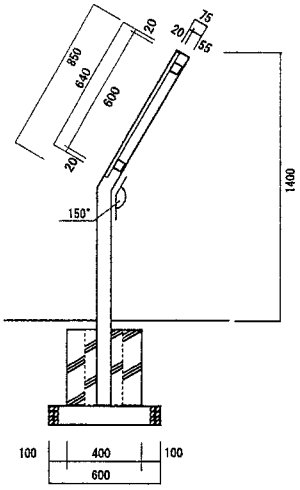


図43　標準断面・側面図２

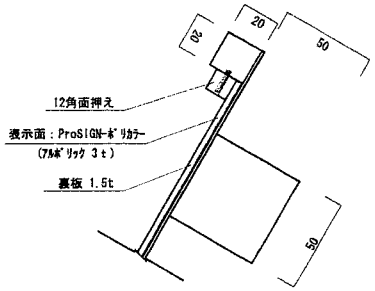
説明板1

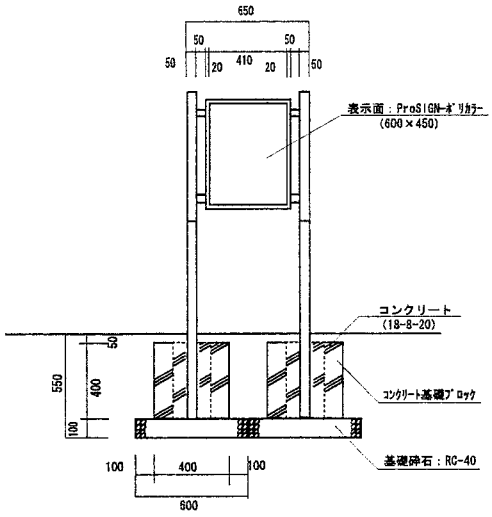






説明板2





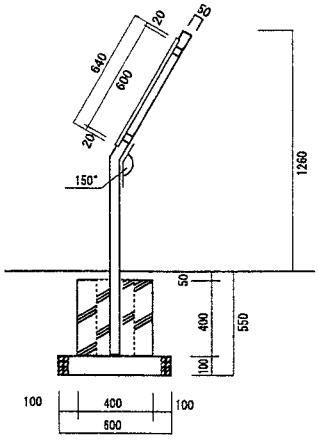


図44　標準断面・側面図３

第８章　過去の調査の出土遺物について

第１節　第２次調査出土遺物－奈良国立博物館所蔵の珠城山３号墳出土埴輪－

１．はじめに

珠城山古墳群第２次調査の報告書に掲載された珠城山３号墳出土遺物の中に、１点の不明形象埴輪がある[1)]。これは３号墳の後円部石室内より出土したもので、現在では奈良国立博物館に所蔵されている。桜井市立埋蔵文化財センターでは平成18年度春季特別展『前方後円墳の終焉とその後』を開催するにあたりこの埴輪を他の遺物とともに借用したが、その際に埴輪の詳細な観察を行なったところ、これが巫女形埴輪の胴体部分であることが判明した。

横穴式石室内から形象埴輪が出土することは石室の調査事例の増えた今日においても稀有であるため、再観察によって得られた成果を以下に報告することとしたい。

２．出土状況の概要（図45）

まずはこの埴輪の出土状況について概要を述べておく。1958年、第２次調査の時点で、３号墳の後円部石室はすでに玄室・羨道両方の天井石を失っていた。しかしながら側石や羨道部入口の閉塞石は比較的よく残っており、玄室では撹乱土の中から家形石棺の破片が確認されたほか、羨道部には追葬の組合式石棺が安置されていた。棺周辺からは金銅製馬具をはじめ大刀・須恵器などが見つかっている。羨道部は瓦器片・羽釜片・埴輪片などを含む撹乱土に覆われており、その下には直径30cm程度の石が乱雑に入っていたようであるが、「形象埴輪片」はこれらを除去したのちに、倒れていた組合式石棺の石室入口側小口石の前面より出土している[2)]。

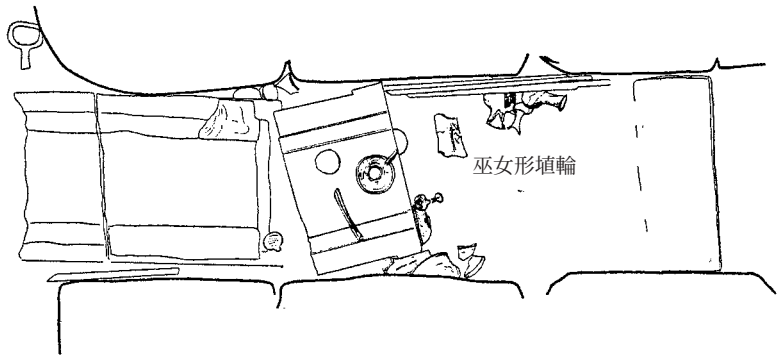


図45　巫女形埴輪出土状況

３．形象埴輪の詳細（図46・図版32）

図46がその埴輪である。筒形につくられた人物の胴体部分と、その下に付く円筒基部の一部分が残存している。胴体は、残存部上端に透孔の一部が確認できたことから胸から腰の部分と判断できた。下半は現状では円筒基部が露出しているが、本来はスカート状に広がる衣服の裾が表現されていたよ

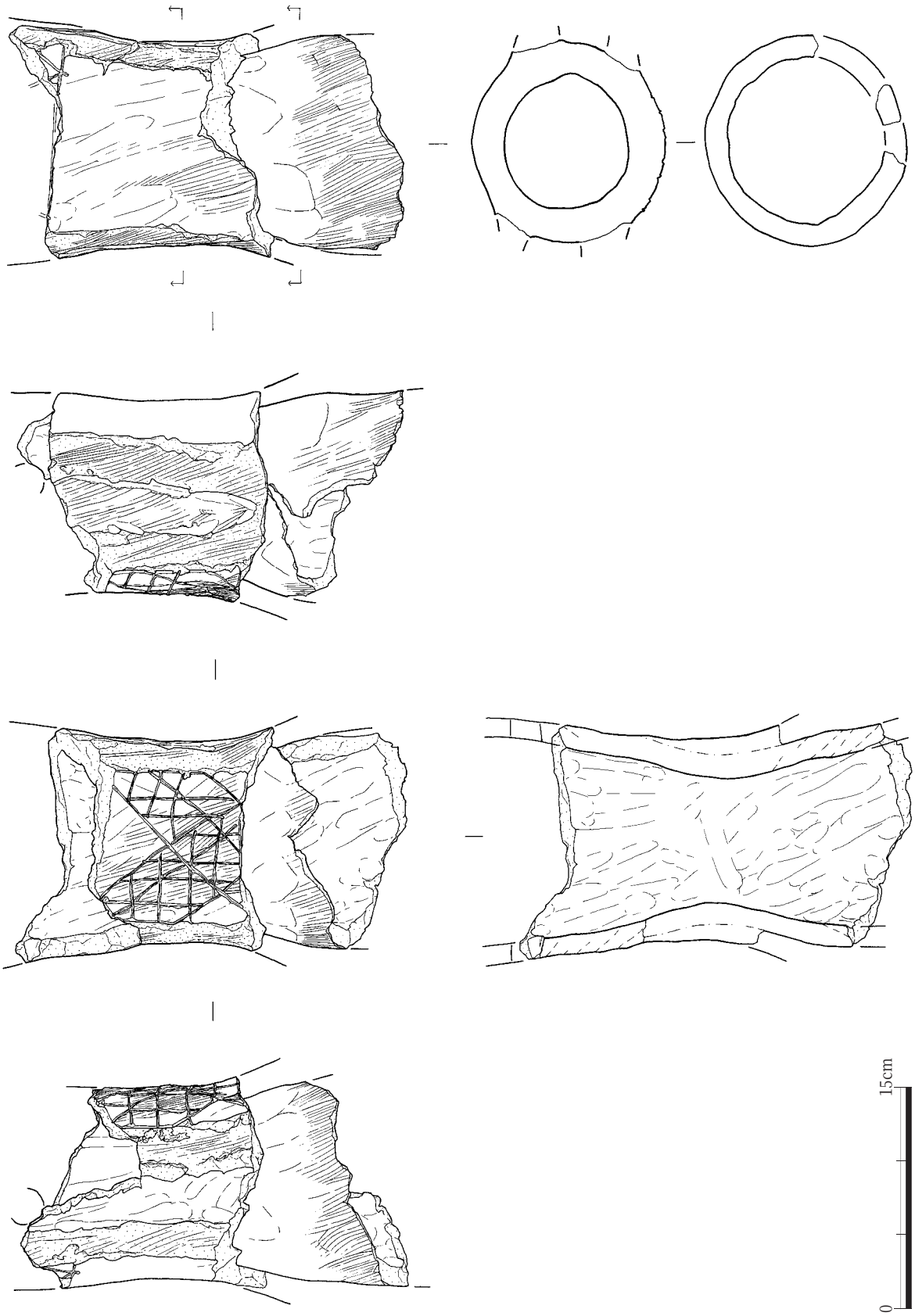


図46　３号墳出土　巫女形埴輪（S＝1／4）

うである。

この埴輪には、胴体両側面に縦方向の剥離痕がみられるが、うち人物埴輪の右手側（以下、右）では２条確認でき、剥離痕どうしは平行である。左手側（以下、左）にも２条の剥離痕が認められたが、右側とは異なり剥離痕と剥離痕が平行にならず、胴体残存部の下端で両者がつながってＶ字を形成していた。おそらく本来は、右側には三角形の鰭２枚、左側はこの２枚の鰭の下端をつなげた袋状のものが付いていたと考えられるが、これは巫女が着ける意須比（おすい）という独特の衣装を表現するものであり、このことからこの人物埴輪が巫女であることがわかった。

巫女形埴輪は通常、衣服の上に意須比を着けて両襷をかけ、腰の部分に帯を回して前面で結ぶ。珠城山３号墳の巫女形埴輪には腰帯が線刻によって描かれていた。線刻は正面と背面に施されているが、これらはおそらく一体で背中を回って腰の前で結わえる帯となるのであろう。正面の線刻は、まず右上から左下に傾斜する３本の斜線を施し、斜線の間に縦→横の順に直線を格子状に描いてある。その後、これに重ねて左上から右下に傾斜する３本の斜線を描いて反対側と同じように縦横の直線を充填する。左側から回ってくる帯の縦・横方向の線が右側面から回ってきた帯の線刻を切らないことから、右から回ってきた帯が左からきた帯の上に重ねられた状態が描かれているようである。背面の線刻は、横方向にひかれた１条の沈線のうえに鋸歯文かと思われる文様の一部が残っている。

製作手順は、倒立した円筒埴輪の上に胴部を積み上げ、現在は欠失しているスカート状の部分を貼り足したとみられる。器面をハケで整えたのちに側面に鰭を接着し、その後、主に背面のハケメをなで消して、最後に線刻を施している。

胴部内面に赤色顔料が付着している箇所があり、現状では確認できないが表面に赤色顔料を塗布していた可能性が高い。焼成は良好で須恵質である。

そして今回、奥田尚氏のご厚意により巫女形埴輪の胎土をみていただくことができた。その結果は、在地の土で作られた可能性が高いとのことであった。

４．おわりに

この埴輪の出土状況について、当時の発掘調査を担当された伊達宗泰氏は「形象埴輪が石棺前に倒れていた事実は石棺前に樹立していたのではないかとの疑問を残し、後期古墳における埴輪の性格、またその終末等今後の調査にまたれる面が多い。[3)]」とされている。既に周知のことであろうが、この後、伊達氏が実施した奈良県内の古墳の発掘調査で相次いで同様の事例が確認された。そのひとつが1963年に行われた三郷町勢野茶臼山古墳である。この古墳では、後円部石室の前庭部に形象埴輪を樹立していた状況が良好な状態で遺存しており、閉塞石の外側に円筒埴輪・家形埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪・大刀形埴輪・巫女形埴輪を入口に向けて樹立していたことがわかった。[4)]また、この勢野茶臼山古墳と同じ平群谷に所在する烏土塚古墳でも1968年の調査において後円部石室の閉塞石の内側で巫女形埴輪、前庭部で家形埴輪・人物埴輪などが出土している。[5)]

珠城山３号墳の巫女形埴輪の場合、石室内に樹立されていたか否かを出土状況から断言することが

できない。しかしながら、当古墳においては前方部前面の埴輪列中に樹立されていた盾持人物埴輪のみしか形象埴輪が発見されていないという状況に加え、勢野茶臼山古墳・烏土塚古墳例の両者に巫女形埴輪が含まれていることから考えて、今回これが巫女であるとわかったことで当初より石室内に樹立されていた可能性がさらに高くなったといえる。

冒頭でも述べたとおり石室内に埴輪を樹立している事例は限られており、先に挙げた２古墳のほか烏土塚古墳に近接する大塚山古墳の石室内からも蓋形埴輪が出土している[6)]。伊達氏は、平群谷という近接する位置に存在するこれらの古墳が同じ系譜をもつであろうことが、共通する埴輪祭祀を執り行っている点からも明らかにできたとしている。そんな中で珠城山３号墳においても石室内の埴輪樹立があったとすれば、平群谷と珠城山古墳群をはじめとしたこの桜井市北西地域に何らかのつながりがうかがわれる。

このように、珠城山３号墳では前方部前面の円筒埴輪列内に盾持人物埴輪を樹立していただけでなく後円部石室内に巫女形埴輪を樹てていたことが推測されたわけであるが、古墳時代後期の当地域における埴輪祭祀の展開を知るうえで貴重な資料と思われる。

それでは最後に、胎土観察の結果について付け加えておきたい。今回、巫女形埴輪が在地の土で作られていることが明らかになったが、すでに珠城山３号墳出土の円筒埴輪については、大和北部の土を使用したものと在地の土を用いたものの二者が存在する[7)]ことがわかっており、円筒埴輪とともに出土した盾持人物埴輪の胎土もまた大和北部のものであった[8)]。つまり、珠城山３号墳には大和北部産の円筒・形象埴輪と在地産の円筒・形象埴輪が樹立されていたことになる。桜井市北西部に所在する６世紀代の古墳については、前方後円墳には大和北部産と在地産の埴輪が、円墳や方墳には在地産の埴輪のみが使用される傾向にあることが知られている[9)]が、前方後円墳のなかでも埴輪の種類と胎土の関係が明らかになった例は今回が初めてである。埴輪の供給や一つの古墳に樹立するための埴輪の調達状況などを考えるうえで興味深い結果となった。

最後になりましたが、埴輪の胎土観察を快くお引き受け下さった奥田尚氏、ならびに資料の掲載を許可してくださった奈良国立博物館の皆様に深く御礼申し上げます。　（橋爪）

【註記】

１）伊達宗泰1960『珠城山古墳』（奈良県文化財調査報告第３集）奈良県教育委員会
　この後、勢野茶臼山古墳の調査で羨道部から盾形埴輪を含む埴輪群が出土したことを受け、伊達氏は鰭の剥離痕をもつこの不明形象埴輪を盾形埴輪と考えていたが（伊達宗泰1986「珠城山３号墳の再検討」『花園史学』第７号）、珠城山３号墳の追加調査において前方部の埴輪列から盾持ち人物埴輪が出土したことから、この埴輪についても盾持人物埴輪の可能性を指摘しておられた（伊達宗泰1993「第５章　まとめ」『国史跡珠城山古墳範囲確認調査報告書』桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書11集　桜井市埋蔵文化財センター・花園大学考古学研究室）。
２）前掲１）に同じ。
３）前掲１）に同じ。
４）伊達宗泰1966『勢野茶臼山古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第23冊）奈良県教育委員会
５）伊達宗泰1972『烏土塚古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊）奈良県教育委員会
６）前掲５）および　村社仁史1998「大塚山古墳」『矢田丘陵周辺の古墳文化―郡山・斑鳩・平群の古墳を考える―』
　第４回こおりやま歴史フォーラム　大和郡山市教育委員会

また、伊達氏は石室内に形象埴輪を樹立する事例についてほかにも大阪府信太千塚５号墳を挙げているが、氏が述べたとおりこの信太山例は平群谷の事例とは同一視しがたいものと思われる。

森浩一1963『和泉信太千塚の記録』和泉市市史編纂委員会・和泉市文化財保護委員会

７）三辻利一・秋森秀己1993「珠城山古墳（３号墳）出土埴輪の蛍光Ｘ線分析」『国史跡珠城山古墳範囲確認調査報告書』（桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書11集）桜井市埋蔵文化財センター・花園大学考古学研究室

奥田尚1995「埴輪の表面に見られる砂礫」『平成６年度国庫補助事業による発掘調査報告書２』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書16集）桜井市教育委員会・桜井市埋蔵文化財センター

８）前掲７）奥田1995に同じ。

９）橋本輝彦1995『平成６年度国庫補助事業による発掘調査報告書２』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書16集）桜井市教育委員会・桜井市埋蔵文化財センター

福辻淳2004「纒向遺跡第135次発掘調査報告（平塚古墳隣接地）」『平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書25集）桜井市教育委員会

第２節　第３次調査出土遺物

１．はじめに

第３次調査は、昭和60年度に花園大学考古学研究室と桜井市教育委員会によって行われた。調査の概要は第３章第４節に述べたとおりである。その後、昭和61年３月に報告書が刊行され[1)]、遺物、記録などは桜井市教育委員会が保管していた。今回の整備事業を行うにあたって、遺物の接合及び台帳の整理等をおこなった。それにより実測が可能な遺物が新たに出てきたため、既報告分を含めて再実測をおこない、ここに報告する。

２．遺物出土状況の概要

第３次調査では、２号墳と３号墳の間に３号墳のものと思われる合計25本の円筒埴輪を検出している。そのうち、No.４とNo.８の２本のみの取り上げを行っている（図８）。その他、墳丘攪乱層や表土などの二次的に動かされた状態で多量の円筒埴輪が出土しており、前報告では３号墳前方部の中段に樹立されていたものが移動したものと推測されている。また、円筒埴輪列の南よりの３号墳側では盾持人物埴輪の破片が出土している。前報告書では埴輪列の内側に樹立されていたと推測されている。しかしながら、今回調査時の写真や図面などを検討した結果、図８に示した埴輪列の南から８本目の円筒埴輪の基部が、他の埴輪と色調が明らかに異なり、突帯もみられないことから、形象埴輪の基部の可能性が考えられた。その近辺は盾持人物埴輪の破片が出土した場所であり、色調も非常に似ていることから、埴輪列のなかに盾持人物形埴輪が樹立されていた可能性を指摘しておきたい。また、円筒埴輪以外にも、朝顔形埴輪の破片も確認できた。その他土器片などが出土しているが、いずれも攪乱層や表土層から出土しており、二次的に動かされた状態で出土している。

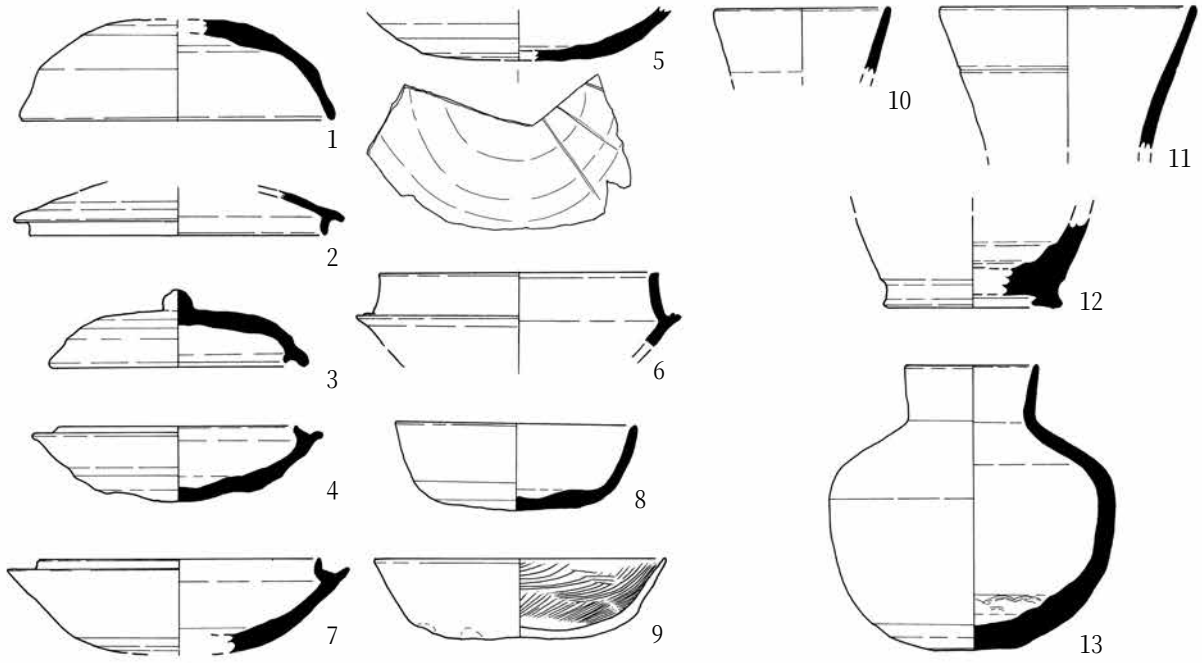


図47　第３次調査出土土器（S＝1／3）

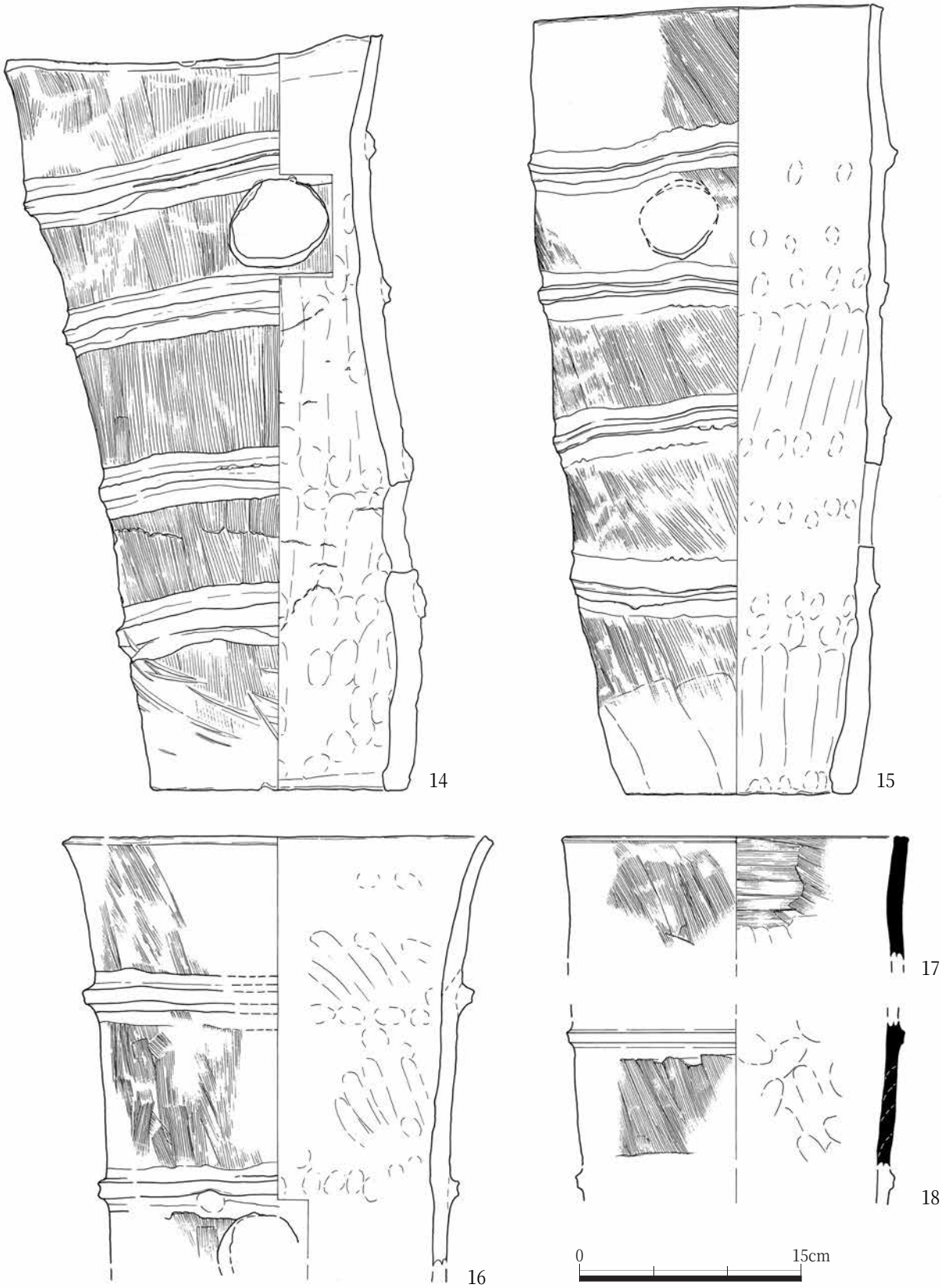


図48　第３次調査出土円筒埴輪（１）（S＝1／4）

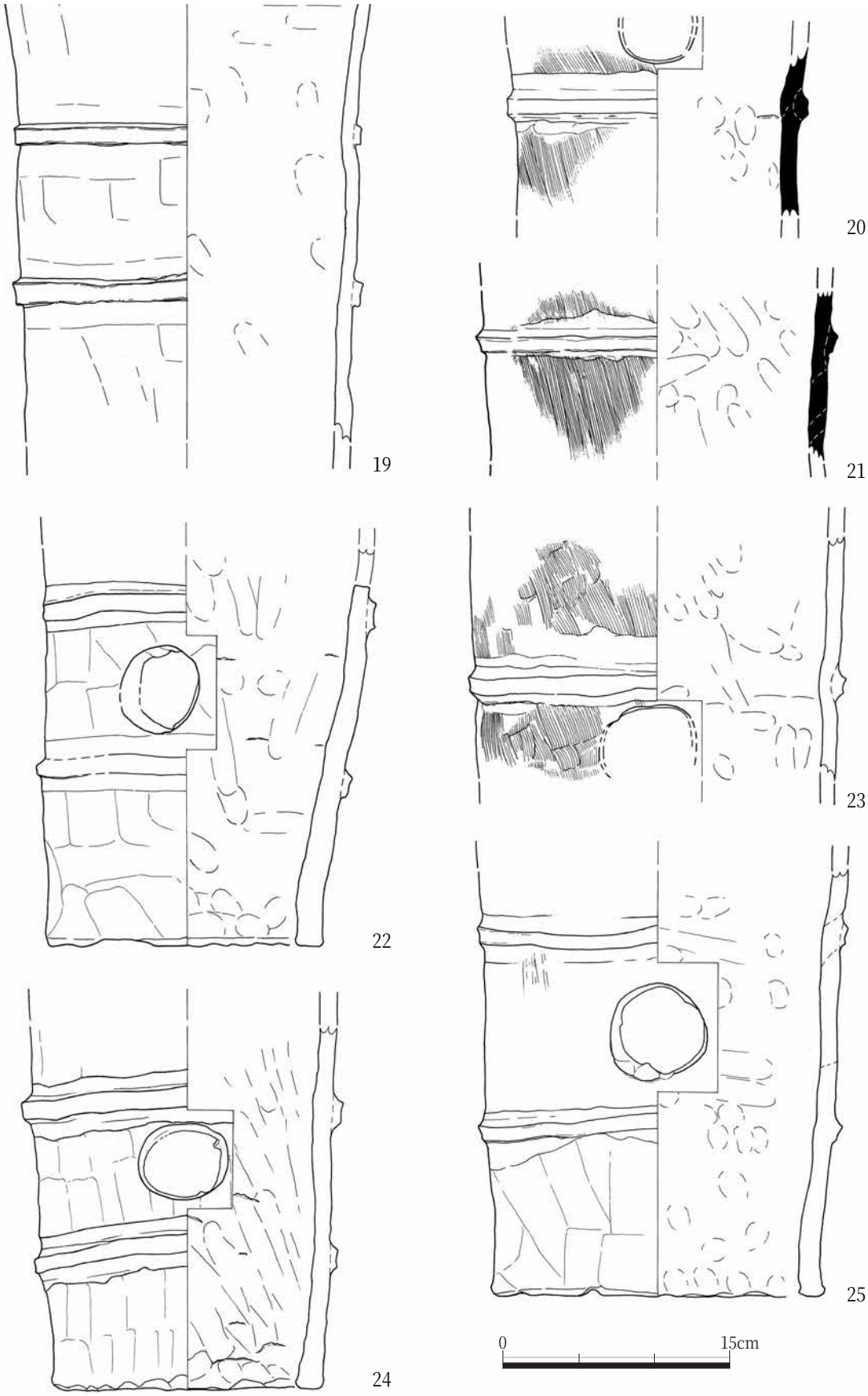


図49　第３次調査出土円筒埴輪（２）（S＝1／4）

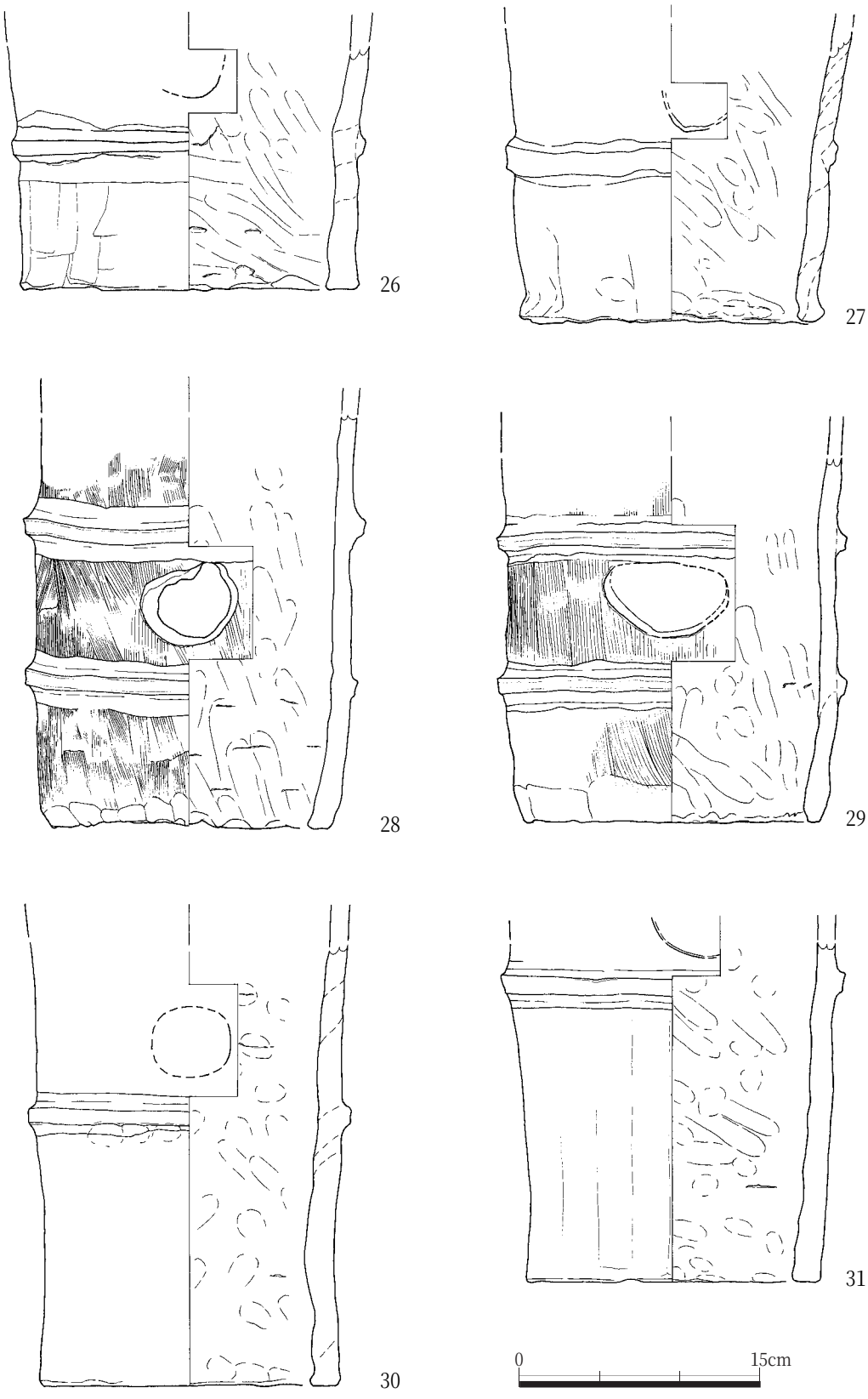


図50　第３次調査出土円筒埴輪（３）（S＝1／4）

３．出土遺物の概要

再実測は既報告分をすべて、未報告分でも端部の破片や法量などが明らかなものは可能な限り実測を行うように努めた。ただ、土器は特に小片が多く前報告との対応が不明なものがあるなど少し混乱している部分もある。一方、円筒埴輪については、未報告分においても、法量が推定できるものがあり、多くの資料を図示できた。また、盾持人物埴輪においても、顔の破片や盾部の破片も多くみつかっているため、法量の検討や再復元を含めて検討を行っている。以下、これらの成果の概要について述る。法量等は表４の一覧表を参照していただきたい。

土器　土器は須恵器12点、土師器１点が図示できた。（１）～（３）は須恵器坏蓋で、（１）は天井部の約1/3の範囲に回転ヘラ削りを施している。そのうち（２）と（３）は端部にかえりをもつもので、宝珠つまみがついているものである。（４）～（８）は須恵器坏身で、（４）と（７）の底部は回転ヘラ削りが施され、口縁の立ち上がりが低い。（６）の底部調整は不明であるが、口縁端部の立ち上がりが高く、図示したものの中で、もっとも古い要素を持っている。（８）は須恵器坏であるが、身か蓋かの判別は難しい。底部は回転ヘラ切り後未調整である。(10）～（13）は、須恵器の瓶や壷類の口縁である。(13）は短頸壷である。体部下半部の残存状態は良いが、上半部の残存が良くない上、口縁部の歪みが激しいため正確な口径は出しえないが、前報告よりも小さな口径で図示している。

円筒埴輪　３号墳から出土した円筒埴輪の内、(14)・(15）は埴輪列から引き抜いたもので、(14）はNo.８、(15）はNo.４に対応する（図８）。両者とも４条突帯５段構成である。器高はそれぞれ50.9cmと53.3cmである。(14）は外面には縦方向のハケ目で１次調整を行い、２次調整は行っていない。最下段には板オサエをし、底部調整をおこなっている。内面は指ナデや指オサエで調整し、口縁部にはヨコナデを施している。全体的に歪みが激しいものである。(15)もほぼ同様の調整が行われているが、

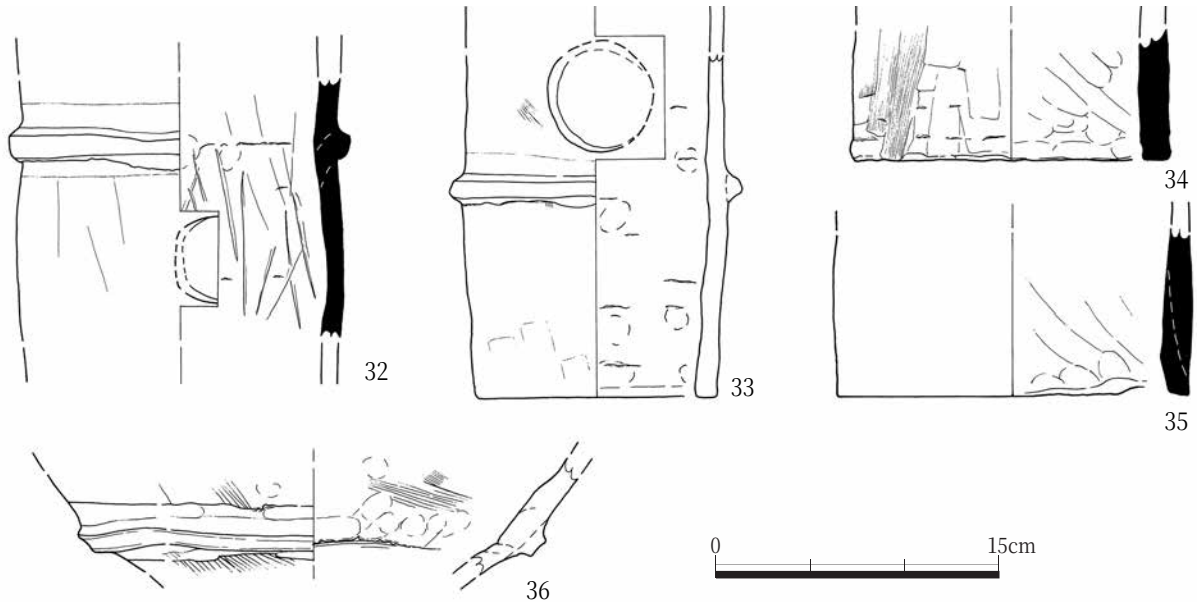


図51　第３次調査出土円筒埴輪（４）（S＝1／4）

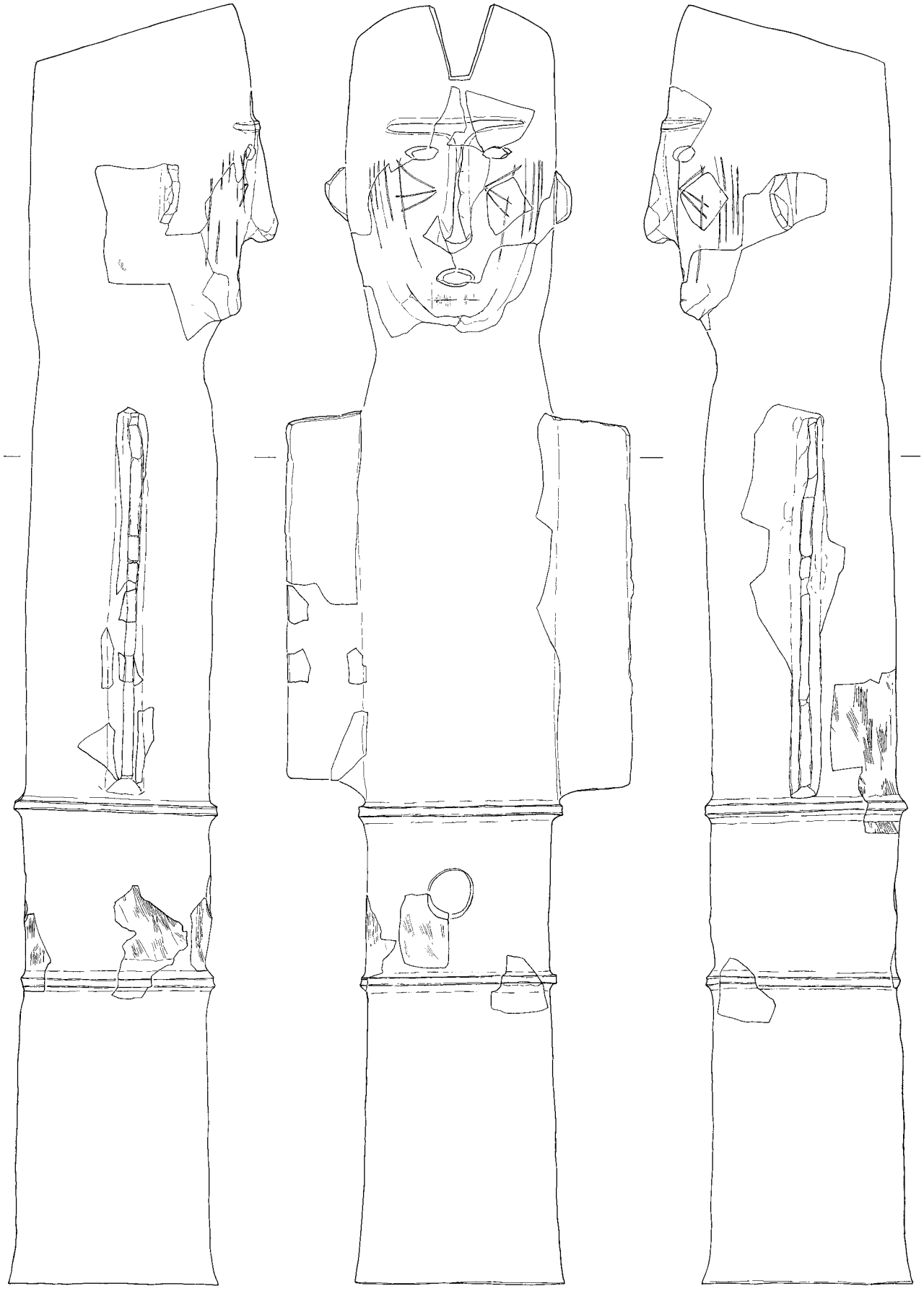


図52　盾持人物埴輪復元図（１）（S＝1／6）

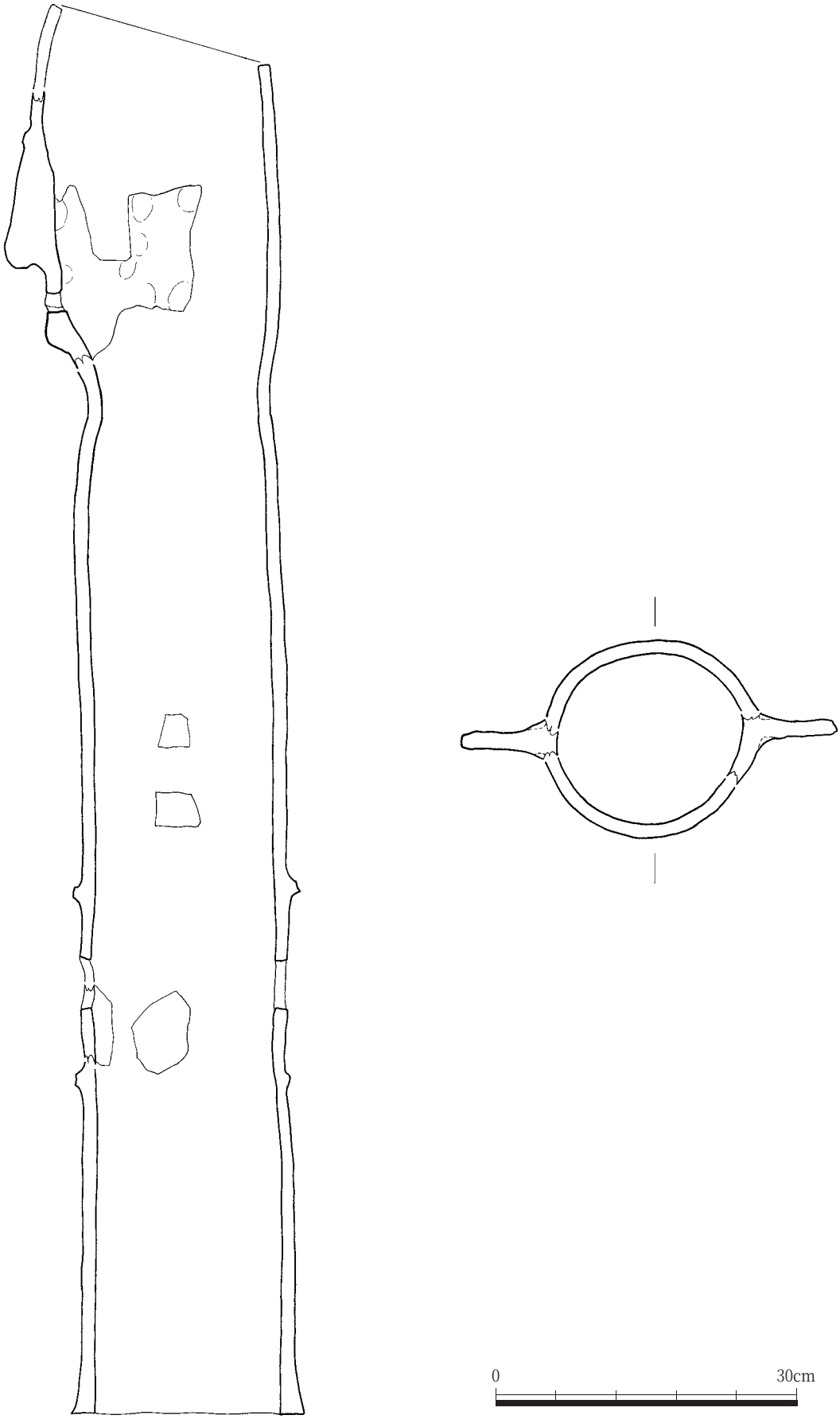


図53　盾持人物埴輪復元図（２）（S＝1／6）

外面のハケ目が斜め方向なことや、口縁部がほとんど外反しないなど異なる点もある。その他については埴輪列付近や、攪乱土などの上層の堆積土から出土したもので二次的に動かされた状態で出土したものといえる。(17)・(18)・(20)・(21)・(34)・(35)は須恵質で、器壁も土師質のものよりも薄い。(32)は焼成よく硬質なものに仕上がっているため、須恵質とも土師質とも判断しかねる。外面調整は板ナデである。その他の物は土師質の円筒埴輪である。(30)と(31)は底部高が他のものより高い。10～12cm前後の底部高を持つものが多い中で、それぞれ17cmと18.5cmである。(19)・(22)・(24)・(25)・(26)・(27)は外面に板ナデを施し、ハケ目はみられない。(36)は朝顔形埴輪の破片と推定できる破片で、埴輪列のなかに朝顔形埴輪が存在していたことを示す。

盾持人物埴輪　前報告書作成以降に一度復元されていたが、盾を表す鰭や顔と特定できる破片が多く未接合のまま残されていたため、再度復元を行った。

顔面部分ではおもに右の耳や頬の破片が新たに接合した。顔の幅は、耳を含めて24.5cm、高さは25cm以上ある。鼻の長さが約13cmと長く、目や口の位置からも細長い印象をうける。頬から顎にかけては入れ墨を表現したと思われる線刻がみられる。また、右耳の背後にも線刻と思われる縦線がみられる。頭部の形態については不明とせざるをえないが、円錐形や飾りなどの形態をしたと思われる破片などが全く認められないことから、復元に際しては円筒状を呈していたと考えた。図のように前面をＶ字に刳込んでいたかどうかの根拠は特にない。盾は粘土板を鰭状に体部に張り付けている。線刻などの表現は認められない。長さは約40cm、幅８cmで、厚さ1.5～1.7cmである。

基部である円筒部については体部と直接接合を確認できる破片がなかった。ただ、盾持人物埴輪の体部片の色調が他の円筒埴輪と大きく異なることから、出土位置も考慮して破片を推定した。それらの破片から、円筒部は直径21.5～20cmに復元した。先述したように、埴輪列の中に円筒埴輪とともに配列された可能性を考えると、隣接する円筒埴輪との間が狭く、盾部がこれらに接触しないと仮定すると、円筒埴輪の口縁部よりも高い位置に盾部があることになり、高さ55cmの基部を復元することになった。また、透孔や突帯を確認できる破片があったが、どの位置にあったか、いくつあったかは不明である。

以上の各部分を推定すると全長130cm以上の高さをもつ盾持人物埴輪を復元することとなった。これらは推定に推定を重ねた結果であり、本来あるべき姿と大きく異なる可能性もあることを付しておく。

【註記】

1）伊達宗泰ほか　1993『国史跡珠城山古墳範囲確認調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター第11集
桜井市教育委員会　花園大学考古学研究室

第９章　総　括

第１節　珠城山古墳群の調査成果

（１）珠城山古墳群の墳丘

今回の発掘調査は、墳丘範囲確認が目的であったが、予想以上に後世の改変がおこなわれていたことがわかった。また、ここ数十年の削平により、古墳群の東西両端がすでに存在しておらず、南斜面についても調査区を設定できなかったことから、墳丘全体を復元するには材料が乏しいが古墳ごとに過去の調査成果も合わせてみていきたい。

１号墳　後円部の直径についてはすでに第６章で述べているとおり、第８～10トレンチで確認したそれぞれの墳丘端から直径25m前後の規模を推定できる。後円部における横穴式石室の位置と墳丘の規格は全く無関係だと考えられないため、その位置から奥壁を中心として後円部を設定したものと推測した。全長は１号墳の前方部前面がすでに消滅しているが、昭和30年代の測量図（図５）から50～55m前後を考えるのが妥当であろう。前方部幅を復元するのはさらに困難しいが、現況から墳丘主軸を想定し、第11トレンチの成果を考慮すると、27m前後になると思われる。次に調査で確認された基底部の標高あげると、後円部（西102.4m・北101.4m）、くびれ部（101.5m）、前方部（101.3m）になる。現況では後円部頂は標高107.1m、前方部頂は104.7mであるので、後円部の比高差は5.7m、前方部は3.4mとなる。それぞれの頂部は大きく削平を受けているため本来はそれ以上の高さがあったもの思われる。また、１号墳に設定した各調査区からは一定量の円筒埴輪片が出土しているため、円筒埴輪列が墳丘をめぐっていた可能性は高いと思われる。

２号墳　２号墳北側は中世に改変を受けた箇所が特に多かった。その中でも、第６トレンチのSD1602は埋土上面から平安時代の木棺墓が検出されたため、他の中世時の遺構とは時期が異なる。墳丘築造時に近く、掘割りの可能性がある。この溝の上場は標高98.5m付近で、第２トレンチの基底部の標高98.6mと一致する。また、第５トレンチでは、標高98.6m付近でかろうじて傾斜変換点が認められるので、これらを結ぶ線を墳丘基底部の第１の候補として考えたい（図54）。また、後円部では第５トレンチＳＤ1501（標高99.3m）と第６トレンチのＳＤ1601（標高99.1m）のそれぞれの溝状遺構の底面の標高がほぼそろっており、古墳に関連する遺構になる可能性がある。墳丘テラス面もしくは墳丘裾の第２候補としてあげられる。南側の調査をおこなっていないため後円部の中心の位置がどこになるのかは難しいが、各トレンチの調査結果を考慮すると、現状の中心部よりやや西側にあると想定し、直径42～45mの後円部を復元した。

また前方部前面は現況の測量図では墳丘主軸に対してやや斜行した形にみえる。第12トレンチおよび第３次調査の成果をみると、現況の測量図に沿うように墳丘基底部が検出され、現在の地形が墳丘据を反映していることがわかった。よって復元図は後円部に対してややななめにつく前方部を復元している。全長は前方部端と後円部東端から、削平された部分を考慮すると85m前後の範囲になると思われる。また、２号墳に設定された調査区からはほとんど埴輪片が出土しなかったため、円筒埴輪が

図54　珠城山古墳群墳丘復原図（S=1/1000）

墳丘をめぐっていなかった可能性が考えられる。主体部に関しては第２次調査時に調査区が数本設定されているが、検出には至っていない[1)]。

３号墳　今回は３号墳の墳丘範囲確認調査は行っていないため、昭和30年次の墳丘測量図や第３次調査の成果[2)]を参考にして、従来どおり、全長50m前後、後円部径26m前後、前方部幅27m前後になると考えている。埴輪に関しては第３次調査で確認された前方部前面に埴輪列があるほか、その他でも円筒埴輪の底部が多く出土しているので、上段のテラス面や南北辺には埴輪列がめぐらされていた可能性がある。

（２）珠城山古墳群の築造順序

珠城山古墳群のひとつの特色として、前方後円墳が３基連なっていることが上げられる。墳丘規模を見ると２号墳が全長約85mと突出しており、１・３号墳はほぼ同じ規模である。築造順をみると、珠城山古墳群は従来から、１号墳は６世紀中頃、３号墳は６世紀後半の築造時期が考えられてきた。第１・２次調査の成果から、１号墳はTK10型式期新段階～TK43型式期の土器が、３号墳はTK43型式期～TK209型式期の土器が出土していることが根拠になっている。

横穴式石室の形態から３号墳の横穴式石室の石材は大型化しており、小石材で構築された１号墳と比べると新しい様相を示しており、出土土器からもこの順序は裏付けられる。

一方、古墳群中最大規模をもつ２号墳に関しては、過去に前方部西側に小竪穴式石室が確認されている[3)]だけで、中心の内部主体も不明である。ただ、第３次調査の成果より、３号墳前方前面の埴輪列が、２号墳の掘割りを埋めて据えられているので３号墳より先に築造されたと考えられる。今回の調査を含め、２号墳の築造時期を決定できる土器は出土していないが、強いてあげるとすれば、第３次調査で出土した須恵器坏身（図47－６）は、１・３号墳築造時期よりも古相を示しており、２号墳に関わる土器の可能性がある。この仮定が正しければ、６世紀前半頃に築造されたことになり、２号墳が最初に築造され、１号墳、３号墳の順になり、累代的に築かれたことになる。

前方後円墳のみで同一墓域に築造し続けるのは非常に珍しく、古墳群構成の点からも興味深い。特に３号墳の築造時期は畿内における前方後円墳の終焉の時期で、古墳時代の終末を考える上で欠かすことのできないものである。また、珠城山古墳群の被葬者は、墳丘や石室規模などはさほど大きいものではないが、１・３号墳より出土した金銅製品を中心とした豪華な副葬品は特筆するべきものである。いずれの点も古墳時代後期社会を考える上で重要であり、今後これらを含めて当古墳群の歴史的な意義付けをすることが課題として残る。

第２節　古墳時代後期以外の珠城山丘陵の利用について

今回の調査では古墳群に関係する古墳時代後期以外のことについても多くの資料を得た。

第６トレンチで検出した木棺墓は上半部の大半が削平を受けていたが、棺内の東西両側に黒色土器埦の口を合わせるように２つずつ副葬された状態で出土するなど、棺内底の遺物がほぼ原位置で出土している。当時の葬送習俗を考える上で貴重な資料になる。第１次調査でも１号墳の後円部横穴

式石室内の組合式石棺内でも黒色土器が出土しており[4)]、石室内においても平安時代に埋葬が行われた可能性がある。古墳時代以降も断続的にこの地が墓地として利用されていたと思われる。

また、柱穴などの中世期の遺構が散見できる。古墳群のある丘陵は盆地平野部に突き出た形になっており、平野部全体を見渡せる眺望になっている。丘陵状の建物の性格は不明だが、このような環境は軍事的にも非常に好条件で、砦状のものが築かれたことも考えられる。おそらくこの時期に古墳群は大きく改変を受けているのだろう。

このような立地の良さは、古墳時代前期にもいえ、南には箸墓古墳、北には行燈山古墳が見下ろすことができ、布留１式の土器が多量に出土している纒向遺跡巻野内地区を見下ろせる。巻野内地区では導水施設、韓式系土器が出土しているなど布留式期の遺構が多いところである。第４次調査で検出したSX1605は布留式期のものと思われ、いわゆる纒向の時代にもこの丘陵上が利用されていたことを確認できた意味は大きい。

以上のように珠城山古墳群の第４・５次調査成果をふりかえった。珠城山古墳群は昭和30年代に破壊を受け、紆余曲折を経ながら、ようやく墳丘範囲確認調査、史跡整備がおこなわれ、調査、保存活用という意味で、一区切りがついたといえよう。様々な制約な中で十分なものとはいえないが、今後、整備された珠城山古墳群が地域の中で根付き、訪れる人々の知的欲求を満たすことを願って、報告を終えたい。なお、本報告は第４・５次調査成果とともに、過去の調査の出土遺物についても一部報告をおこなっている。これらの報告にあたって、多くの方の手を煩わせながら十分に活かしきれなかったことをお詫びするとともに、過去の調査における錯誤や不備の責は担当者にあることを記しておく。

【註記】

１）伊達宗泰　1960「大三輪町穴師珠城山２号･３号墳」『奈良県文化財調査報告』第３集　奈良県教育委員会

２）伊達宗泰ほか　1993『国史跡珠城山古墳群範囲確認調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター第11集　桜井市教育委員会
花園大学考古学研究室

３）伊達宗泰1981「珠城山２号墳」『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊
奈良県立橿原考古学研究所編

４）小島俊次　伊達宗泰　1956『珠城山古墳』奈良県教育委員会

出土遺物一覧表

表２　第４次調査出土遺物一覧

図面番号	種別	器種	口径	器高	色調	残存状態	出土Tr	出土位置	備考
図17-1	須恵質	円筒埴輪	7.3	(11.0)	にぶい黄橙(10YR6/3)～褐灰(10YR4/1)	破片	2	表土	
図17-2	土師質	円筒埴輪	[25]	(9.0)	橙(5YR6/8)	底部の1/9	6	流土	
図18-3	須恵器	壷	[19.9]	(13.4)	灰(10Y6/1)	体部のの一部	6	流土	
図18-4	須恵質	平瓶	4.5	(3.6)	灰(N4/),にぶい黄(2.5Y6/3)～黄灰より薄い(2.5Y5/1),にぶい黄(2.5Y6/3)	頸部のみ	6	流土	
図18-5	須恵質	器台	34	(7.3)	灰(N5/)～灰(N4/)	坏部の1/10以下	6	流土	
図19-6	土師器	皿	11	(1.4)	橙(5YR6/8)	口縁部1/5	6	木棺墓	
図19-7	土師器	坏	15	(2.6)	橙(5YR6/6)	口縁部分	6	木棺墓	
図19-8	灰釉陶器	壷	9	(9.1)	浅黄(2.5Y7/4)	頸部から上が欠損	6	木棺墓	
図19-9	黒色土器	壷	8.2	(6.6)	褐灰(10YR4/1)～灰黄褐(10YR5/2)	体部のみ	6	木棺墓	
図19-10	黒色土器	埦	14.5	5.5	黒褐(2.5Y3/1)～黒褐(2.0Y3/1)～にぶい黄橙(10YR6/4)	ほぼ完形	6	木棺墓	
図19-11	黒色土器	埦	14.6	5.65	黒褐(2.5Y3/1),橙(7.5YR6/6～6/8)～黒褐(2.5Y3/1)	ほぼ完形	6	木棺墓	
図19-12	黒色土器	埦	14.5	5.5	にぶい橙(7.5YR6/4),橙の中間(7.5YR6/6)～黒(2.5Y2/1)	ほぼ完形	6	木棺墓	
図19-13	黒色土器	埦	17.3	8.0	黒褐(2.5Y3/1)～黒褐(10YR3/1)	ほぼ完形	6	木棺墓	
図23-14	瓦質	鉢	29	(7.9)	明黄褐(2.5Y7/6)～灰オリーブ(5Y5/2)	口縁の1/10以下	4	流土	
図23-15	青磁	埦	[5.6]	(3.1)	灰オリーブ(7.5Y4/2)	底部のみ	8	流土	
図23-16	土師器	皿	7.6	1.8	にぶい赤褐(5YR5/4)	4/5弱	5	東壁11層	
図23-17	土師器	皿	7.4	1.9	橙(5YR6/6)	4/5	5	東壁11層	
図23-18	土師器	皿	7.8	1.7	明赤褐(5YR5/6)～にぶい橙(7.5YR6/4)	4/5	5	東壁11層	
図23-19	土師器	皿	7.8	1.6	明赤褐(5YR5/6)	4/5	5	東壁11層	
図23-20	土師器	皿	8	1.6	明赤褐(5YR5/6)	9/10	5	東壁11層	
図23-21	土師器	皿	8	1.5	明赤褐(5YR5/6)～明赤褐(5YR5/8)	1/2	5	東壁11層	
図23-22	土師器	皿	8	1.7	明赤褐(5YR5/6)	完形	5	東壁11層	
図23-23	土師器	皿	8	1.7	明赤褐(5YR5/6)	4/5	5	東壁11層	
図23-24	土師器	皿	8	1.3	明赤褐(5YR5/6)	1/2	5	東壁11層	
図23-25	土師器	皿	7.8	1.65	明赤褐(5YR5/6)	7/10	5	東壁11層	
図23-26	土師器	皿	8.2	2.0	橙(5YR6/6)	1/2	5	東壁11層	
図23-27	土師器	皿	8.4	(1.7)	にぶい赤褐(5YR5/4)	1/4	5	東壁11層	
図23-28	土師器	皿	9.6	(2.1)	明赤褐(5YR5/8)～黒褐(10YR3/2)	1/2	5	流土	
図23-29	土師器	皿	9.4	(2.5)	橙(7.5YR6/6)	口縁のみ	6	流土	
図23-30	土師器	皿	11	2.0	橙(7.5YR6/6)	ほぼ完形	6	流土	
図23-31	土師器	坏蓋	17	(2.4)	明赤褐(5YR5/6)	1/3	5	地山直上	
図23-32	土師器	甕	[16.8]	(11.8)	橙(5YR6/8)	胴部の3/5	5	地山直上	
図23-33	土師器	皿	7.2	(1.6)	明赤褐(5YR5/6)	口縁の1/4	8	SP1801	
図23-34	土師器	皿	7.9	(1.4)	明赤褐(5YR5/6)	口縁の1/8	8	SP1801	
図23-35	土師器	皿	15.4	(1.4)	橙(5YR6/8)	口縁の1/5	8	SP1802	
図23-36	土師器	皿	11	(1.8)	にぶい橙(7/4)	口縁部片	8	SP1802	
図23-37	土師器	皿	9.4	(2.3)	橙(5YR6/8)	口縁の1/2	8	SP1802	
図23-38	土師器	皿	10	(1.6)	橙(7YR6/6)	口縁部の1/7	8	SP1802	
図23-39	土師器	甕	—	(2.4)	褐灰(7.5YR4/1)～橙(7.5YR7/6)	口縁の1/10以下	6	SX1605	
図23-40	土師器	甕	16	(3.0)	明褐(7.5YR5/6)　褐灰(7.5YR4/1)	口縁の1/10以下	6	SX1605	
図23-41	土師器	脚?	16.3	(4.1)	明赤褐(2.5YR5/8)	脚部の1/8	6	SX1605	
図23-42	土師器	脚	[6.8]	(2.7)	橙(5YR6/8)	脚部の9/10	6	SX1605	
図23-43	サヌカイト	石鏃	2.2	(3.0)	灰(N5/)	一部欠損	5	流土	
図23-44	サヌカイト	石鏃	1.2	(2.5)	灰(N5/)	先端部欠損	5	流土	

表３　第５次調査出土遺物一覧

図面番号	種別	器種	口径	器高	色調	残存状態	出土Tr	出土位置	備考
図32-1	須恵器	坏蓋	8.55	(3.05)	灰(N5/)～灰黄(2.5Y7/2)	口縁の1/6	7	流土	
図32-2	須恵器	坏身	13	(3.1)	灰白(7.5Y7/1)～灰白(10Y7/1)	口縁の1/10	10	流土	
図32-3	須恵器	坏身	[12.5]	(1.65)	灰白(10Y7/1)～灰白(7.5Y7/1)	底部の1/2弱	10	流土	
図32-4	土師器	壷	26	(7.45)	橙(5YR6/6)～やや濃い橙(5YR6/6)	口縁の1/8	10	流土	
図32-5	須恵器	坏蓋	10.2	3.4	青灰(5B5/1)～オリーブ灰(2.5GY6/1)～灰(N5/)	完形	11	土壙墓	
図32-6	須恵器	坏身	9.75	3.55	灰(N6/)～淡黄(2.5Y8/3)～明青灰(5PB7/1)	完形	11	土壙墓	
図32-7	土師質	鉢	12.2	(8)	にぶい黄橙(10YR5/3)～にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁1/6 胴部1/2	11	地山直上	
図32-8	土師質	土馬	(9)	(4.1)	にぶい橙(7.5YR6/4)	胴部のみ	10	墳丘直上	
図33-9	土師質	円筒埴輪	[40]	(14.5)	橙(5YR7/8)～橙(5YR6/6)	破片	10	流土	
図33-10	土師質	円筒埴輪	[28]	(4.4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	破片	10	表土	硬質
図33-11	土師質	円筒埴輪	[30]	(10.6)	橙(5YR6/6)	破片	10	流土	
図33-12	土師質	円筒埴輪	[24.2]	(10.2)	明赤褐(5YR5/6)～にぶい赤褐(5YR5/4)	底部の1/6	10	流土	
図33-13	土師質	円筒埴輪	[31]	(15.8)	にぶい黄橙(10YR6/4)	破片	10	流土	
図33-14	土師質	円筒埴輪	[27]	(5.1)	にぶい橙(7.5YR6/4)	底部1/6	10	流土	
図33-15	土師質	円筒埴輪	[30.6]	(8.3)	にぶい橙(7.5YR6/4)～灰褐(7.5YR6/2)	破片	10	流土	
図33-16	土師質	円筒埴輪	27	(5.5)	灰白(2.5Y8/2)～にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁の1/8周	12	流土	
図33-17	須恵質	円筒埴輪	[19.8]	(7.6)	褐灰(10YR5/1)～灰黄褐(10YR5/2)	底部の1/4周	12	中世溝	
図33-18	須恵質	円筒埴輪	29	(9.6)	灰褐(7.5YR5/2),灰黄褐(10YR5/2)	破片	12	流土	
図34-19	須恵質	円筒埴輪	(8.7)	(6.4)	にぶい黄橙(10YR6/3)～灰(7.5Y5/1)	口縁1/10以下	10	表土	
図34-20	須恵質	円筒埴輪	(8.3)	(10.7)	にぶい橙(7.5YR6/4)～にぶい黄橙(10YR6/3)	破片	10	表土	
図34-21	土師質	円筒埴輪	(9.4)	(11.4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	破片	10	表土	
図34-22	土師質	円筒埴輪	(8.7)	(10.7)	にぶい橙(7.5YR6/4)	破片	10	掘削	
図34-23	土師質	円筒埴輪	(11.6)	(8.6)	褐灰(10YR5/1)～にぶい橙(5YR6/4)	破片	10	流土	硬質
図34-24	土師質	円筒埴輪	(9.1)	(7.2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	破片	10	流土	硬質
図34-25	土師質	円筒埴輪	(9.3)	(9.1)	橙(5YR6/6)	破片	10	流土	硬質
図34-26	土師質	円筒埴輪	(14.5)	(14.4)	橙(5YR7/8)～橙(5YR7/6)	破片	10	流土	
図34-27	土師質	円筒埴輪	(10)	(9)	にぶい黄橙(10YR6/4)～にぶい橙(7.5YR6/4)	破片	9	流土	硬質
図34-28	土師質	円筒埴輪	(8.2)	(6.3)	にぶい橙(5YR6/4)～橙(5YR6/6)	底部1/10以下	9	流土	
図35-29	土師質	円筒埴輪	(7.45)	(5.65)	にぶい黄橙(10YR6/4)～にぶい橙(7.5YR6/4)	破片	12	表土	硬質
図35-30	土師質	円筒埴輪	(6.8)	(5.2)	にぶい黄橙(10YR6/4)～にぶい橙(7.5YR6/5)	破片	12	攪乱	

表４　第3次調査出土遺物一覧

図面番号	種別	器種	口径	器高	色調	残存状態	出土Tr	出土位置	備考
図47-1	須恵質	坏蓋	12.2	(3.95)	灰(N7/～N4/)～明紫灰(5P7/1)	1/3	1～3	攪乱	
図47-2	須恵質	坏蓋	11.6	(1.7)	灰(N6/)	口縁の1/12	1～3	攪乱	
図47-3	須恵質	坏蓋	10.2	3	青灰(5B5/1)	1/3	1～3	攪乱	
図47-4	須恵質	坏身	11.4	2.95	赤灰(7.5R5/1)～灰(N6/)	1/3	3	攪乱	
図47-5	須恵質	坏	―	(2)	灰(6/・5/)～灰(6/)	底部の1/2	1～3	表土層	ヘラ記号
図47-6	須恵質	坏身	11	(2.9)	灰(N5//N4/)にぶい黄(2.5Y6/3)～灰(N5/)	口縁の1/12	1	表土層	
図47-7	須恵質	坏身	13.6	(3.7)	青灰(5B5/1)～青灰(5B6/1)	1/4	1～3	攪乱土層	
図47-8	須恵質	坏身?	9.5	3.4	青灰色(10BG6/1)	9/10	1	埴輪列東側	
図47-9	土師質	皿	11.4	3.1	橙(5YR7/6)	ほぼ完形	1	2号墳墳推積土層	暗文あり
図47-10	須恵質	平瓶	6.8	(2.6)	灰(N4/)～灰(6/)	口縁の1/5	1～3	攪乱	
図47-11	須恵質	平瓶	9.9	(5.65)	灰(7.5Y6/1)～灰(N6/)	口縁1/10以下	1～3	攪乱	
図47-12	須恵質	瓶?	[7]	(3.5)	灰(N6/)・灰(N4/)～青灰(5PB6/1)・暗オリーブ灰(5GY3/1)	底部の1/4	1～3	攪乱	
図47-13	須恵質	短頸壷	5.1	11.2	暗オリーブ灰(5GY3/)・灰(N6/)～青灰(5B6/1)	1/3	7	攪乱	
図48-14	土師質	円筒埴輪	25.4	50.9	明褐(7.5YR5/8)～明褐(7.5YR5/6)	ほぼ完形		埴輪列No.8	
図48-15	土師質	円筒埴輪	23.5	53.3	橙(7.5YR6/6)～橙(5YR6/6)	ほぼ完形		埴輪列No.4	
図48-16	土師質	円筒埴輪	28	(28.8)	橙5YR6/6)～にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁～突帯2段目下		埴輪列西側	
図48-17	須恵質	円筒埴輪	23	(8.2)	褐灰(7.5YR5/1)・灰褐(7.5YR5/2)・にぶい褐(7.5YR5/3)	口縁1/10	1～3	埴輪列の上層	
図48-18	須恵質	円筒埴輪	[23]	(9.7)	灰褐(5YR4/2)～灰褐(7.5YR5/2)	破片	1～3	埴輪列の上層	
図49-19	土師質	円筒埴輪	24	(29.2)	にぶい黄橙(10YR6/4)～橙(7.5YR7/6)	1/6		埴輪列西側	
図49-20	須恵質	円筒埴輪	[19.8]	(11.4)	暗褐色(7.5R3/2)・にぶい赤褐(5YR4/3)～赤灰(2.5YR4/1)・明赤褐(5YR5/6)	破片	1～3	埴輪列の上層	
図49-21	須恵質	円筒埴輪	[24]	(11.1)	灰黄褐(10YR5/2)～にぶい黄橙(10YR6/3)	破片	1～3	埴輪列の上層	
図49-22	土師質	円筒埴輪	[17.7]	(26)	橙(5YR7/6・6/6)	底部～第2段突帯上	1	埴輪列東側	
図49-23	須恵質	円筒埴輪	[24.8]	(15.8)	橙(5YR6/8)	円周の1/3		埴輪列12	
図49-24	土師質	円筒埴輪	[17.6]	(24)	にぶい橙(7.5YR7/4)・にぶい黄橙(10YR7/4)	底部～第2段突帯上	3	攪乱	
図49-25	土師質	円筒埴輪	[21.2]	(28.2)	橙(5YR7/6)～橙(5YR7/6)・にぶい橙(7.5YR6/4)	底部～第2段突帯上	1	埴輪列東側	
図50-26	須恵質	円筒埴輪	[20.6]	(15.2)	にぶい褐(7.5YR6/3)・にぶい黄橙(10YR7/4)～にぶい褐(7.5YR6/3)	底部～第1段突帯上1/4	1	埴輪列東側	
図50-27	土師質	円筒埴輪	[18.9]	(18.5)	橙(5YR7/6)～橙(5YR6/6)	底部～第1段突帯上5/8		埴輪列西側	
図50-28	土師質	円筒埴輪	[17.1]	(25.5)	にぶい橙(7.5YR7/4)～にぶい褐(7.5YR6/3)	底部～第2段突帯上		不明	
図50-29	土師質	円筒埴輪	[18.4]	(22.6)	橙(7.5YR9/6)～橙(7.5YR7/6)	底部～第2段突帯上	1	埴輪列東側	
図50-30	土師質	円筒埴輪	[18]	(27.5)	橙(5YR6/6)	底部～第1段突帯上1/6	1	埴輪列東側	
図50-31	土師質	円筒埴輪	[18]	(21)	明赤褐(2.5YR5/6)	底部～第1段突帯	1	2号墳墳推積土層	
図51-32	須恵質	円筒埴輪	[18]	(13.5)	灰黄褐(10YR6/2)・褐灰(10YR5/1)～灰(5Y5/1)	破片	1～3	埴輪列の上層	
図51-33	土師質	円筒埴輪	[13.6]	(17.8)	橙(5YR6/6)～橙(2.5YR6/8)	底部～第1段突帯上		不明	
図51-34	須恵質	円筒埴輪	[16.6]	(6.9)	にぶい橙(7.5YR6/4)・灰褐(7.5YR5/2)～にぶい橙(5YR6/4)	底部1/4弱	1～3	埴輪列の上層	
図51-35	須恵質	円筒埴輪	[19]	(8.4)	暗褐色(7.5YR3/3)～にぶい赤褐(5YR4/4)	底部破片	1～3	埴輪列の上層	
図51-36	土師質	朝顔形埴輪	[28]	(6.3)	にぶい橙(7.5YR7/4)・にぶい黄橙(10YR7/4)	口頸部1/8以下	7	攪乱	
図53-37	土師質	盾持人物埴輪	[25]	130以上	浅黄橙(10YR8/4)	顔面1/4.円筒部1/20以下			

＊単位はcm。()は残存値。[]は底部があれば底部径、なければ残存部の最大径。

編　集　後　記

珠城山古墳群は桜井市北西部の田畑や果樹園が広がるのどかな風景のなかにある。ハイキングコースである山の辺の道のルートの近くであるが、案内板もなく訪れる人は少なかった。桜井市の管理のもと保存されていたが、年月がたつにつれ、墳丘上に雑木が生い茂り立ち枯れなどで墳丘を痛める部分もみられるようになり、周辺にも影響をあたえるようになってきた。用地買収後の珠城山古墳群の保存活用が桜井市における長年の課題であり、今回ようやく保存整備事業が行われた。

桜井市に奉職して間もないころに整備事業を担当し、「遺跡をどのように整備し、活用するべきか」に対しての明確な信念を持たないまま事業に着手したため様々な苦悩を抱えながら取り組んだ。事業を終えた今でも、果たしてこれでよかったのかと思うときがある。ただ、遺跡がより良く保存され活用されるためには、周辺の地域住民の協力が必要で、何よりも、地元の人々に愛されなければならないことを痛感した。今回の事業に関しても、隣接地の地権者の方々や桜井市穴師区の皆様の理解と協力があった。ここに記して感謝したい。

一方、珠城山古墳群は緊急的におこなわれた第１・２次調査で、豪華な副葬品が出土し、古墳時代研究の中で大きな注目を浴びている遺跡である。その中でも１号墳出土の三葉環頭大刀、金銅製馬具類、３号墳出土の金銅製透彫杏葉や鏡板などは代表的なものとしてあげられるであろう。しかしながら、その他の遺物や古墳群本体の歴史的な意義付けはその後の考古学の進展にも関わらず、十分になされたとはいえない。本来ならば、本報告においてそれらをしなければならなかったが、担当者の力不足により反映することができなかった。これらの遺物は、幸いにも奈良国立博物館において所蔵されており、本事業期間中におこなった桜井市立埋蔵文化財センターの平成18年度の春季特別展で展示し、その借用期間中に、一部であるが実測図の作成もおこなっている。この件に関しては奈良国立博物館の吉澤悟氏や岩戸晶子氏に多大な協力を賜った。本報告に活かせなかったことをお詫びするとともに、機会を改めて、珠城山古墳群の歴史的な意義付けを含め報告することでその責を果たしたい。

発掘調査の実施や報告書作成にあたっては、整備検討委員会の皆様をはじめ、多くの関係者の協力を得た。また、文化財課の諸先輩方をはじめとし、作業員、補助員、整理員諸氏には、怠惰でわがままな担当者を辛抱強く支えていただいた。ここに記し、深く感謝したい。多くの協力を得ながら、十分な報告をおこえなかったことは、すべて担当者個人の怠慢と能力によるもので、深く反省をするとともに、今後文化財に対する姿勢や調査技術の向上に努めることによってお許し願いたい。

珠城山古墳群遠景（南より　奥に渋谷向山古墳を望む）

上空からみた珠城山古墳群（上が北）

第1トレンチ南（東より）

第1トレンチ北（西より）

第2トレンチ全景（北より）

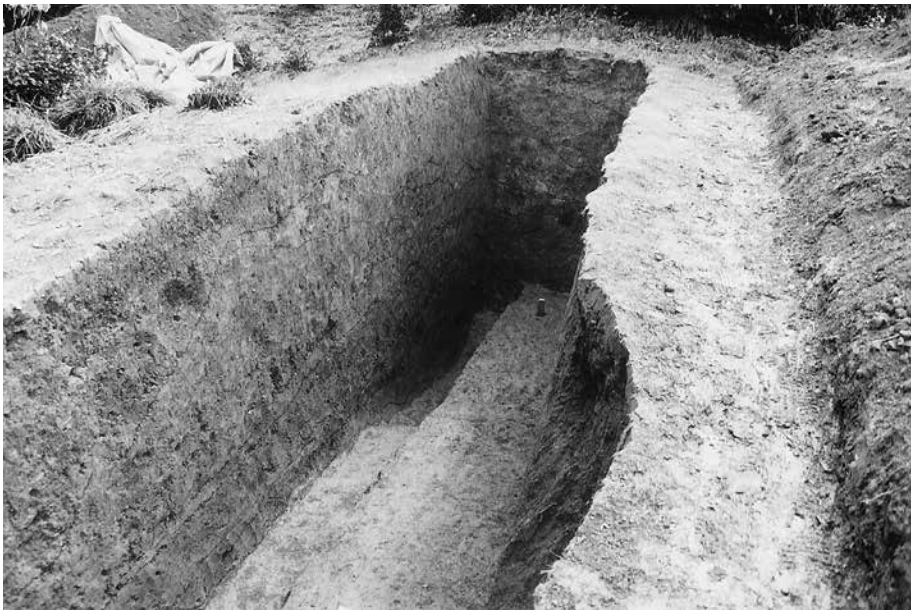
第２トレンチ東壁断面
（北西より）

第４トレンチ全景（北より）

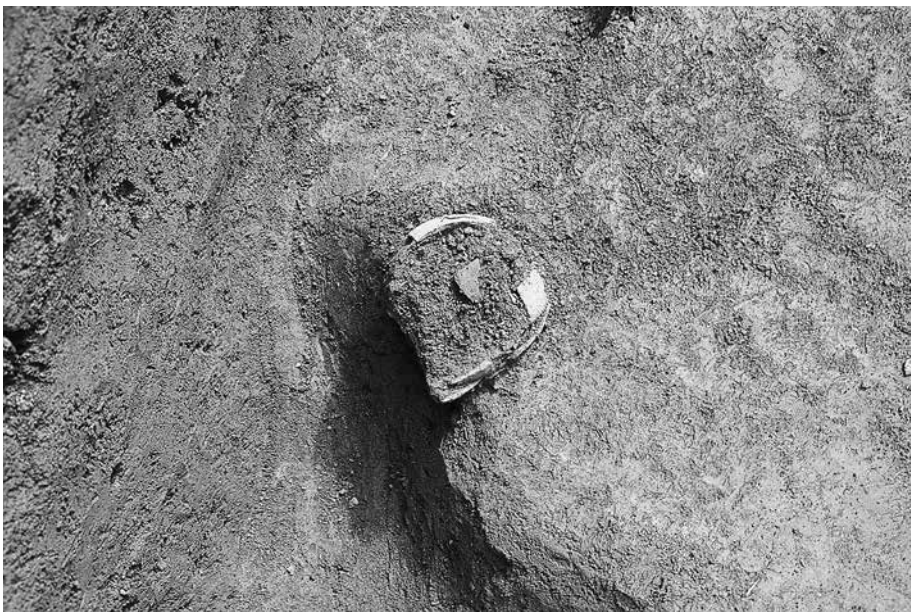
第４トレンチ西壁断面
（北東より）

第５トレンチ全景（北より）

第５トレンチ東壁断面１
（北西より）



第５トレンチ東壁断面２
（北西より）



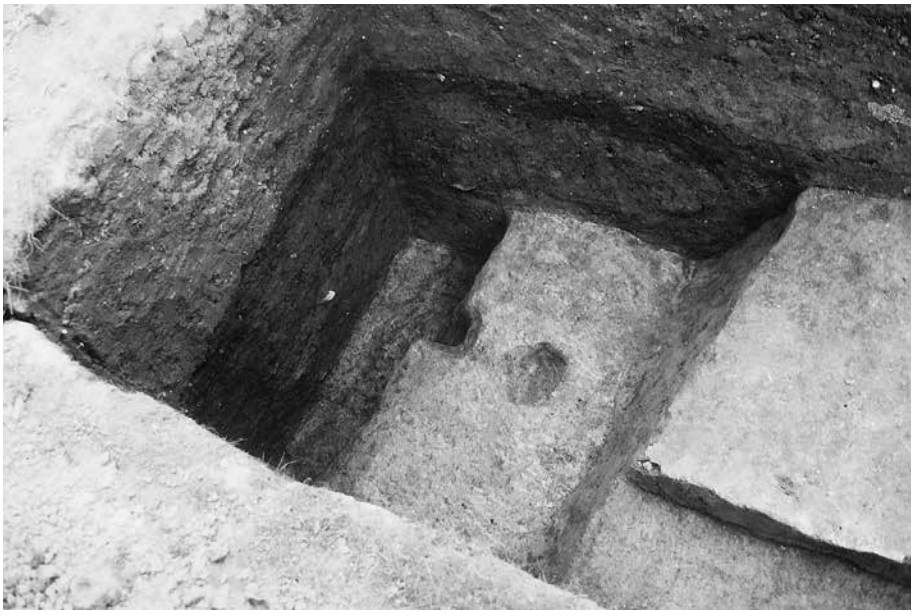
第５トレンチ土器出土状況

第６トレンチ全景（北より）

第６トレンチ西壁断面１
（北西より）

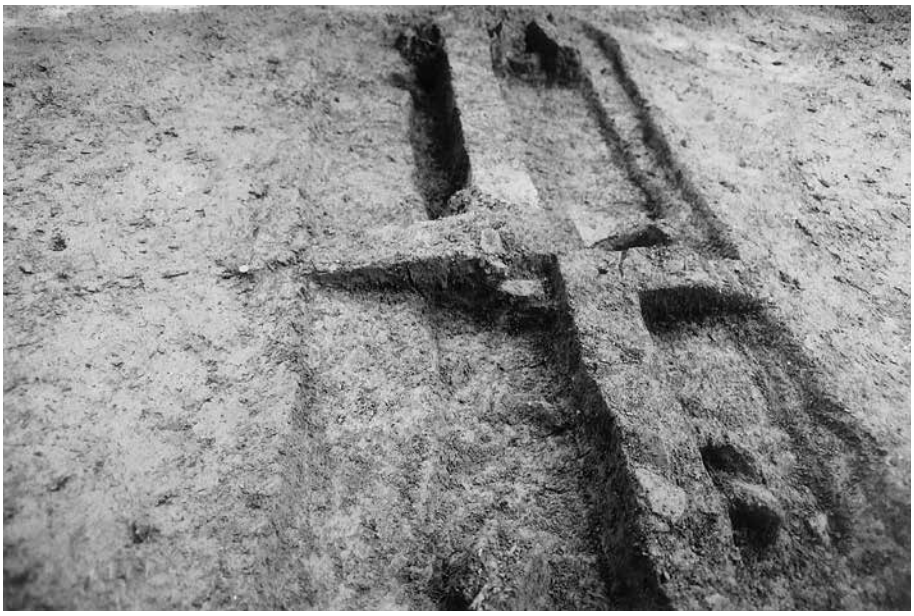
第６トレンチ西壁断面２
（北東より）

第６トレンチ
SX1605上層（南東より）



第６トレンチ
SX1605下層（南西より）

第6トレンチ
木棺墓検出状況（北東より）



第6トレンチ
木棺墓横断面（東より）

第6トレンチ
木棺墓遺物出土状況
（北東より）

第6トレンチ
木棺墓西側遺物出土状況1
（東より）

第6トレンチ
木棺墓西側遺物出土状況2

第6トレンチ
木棺墓西側刀子
出土状況

第６トレンチ
木棺墓東側遺物出土状況１
（西より）

第６トレンチ
木棺墓東側遺物出土状況２
（西より）

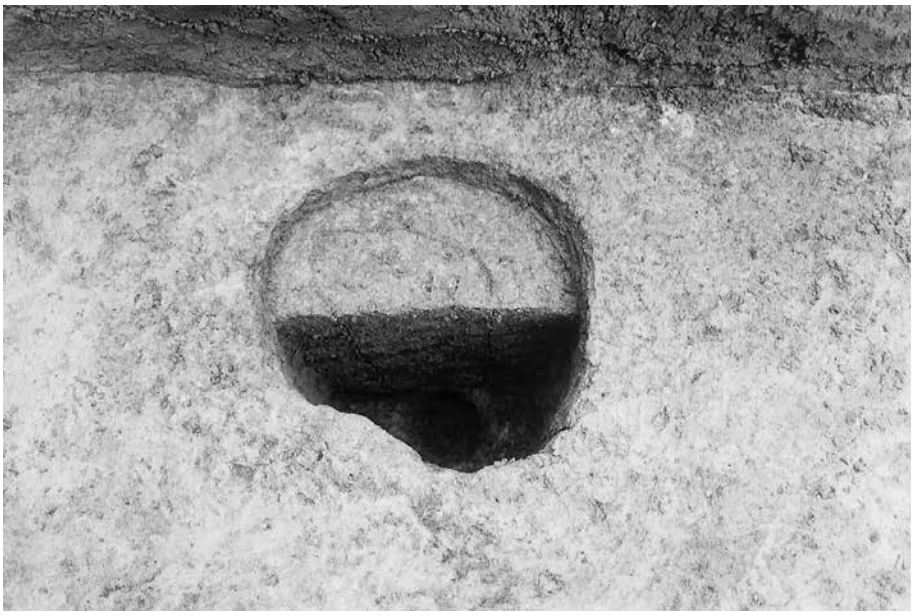
第６トレンチ
木棺墓完掘状況（北より）

第８トレンチ全景（東より）

第８トレンチ
１号墳墳丘断面（西より）

第８トレンチ
２号墳墳丘断面
（北東より）

第８トレンチ
ピット群（北東より）



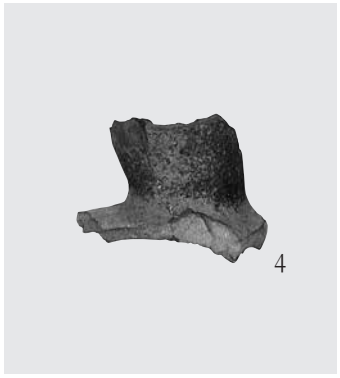
第８トレンチ　SP1801断面
（北より）

第８トレンチ　SP1802断面
（北より）

3

1

2


4

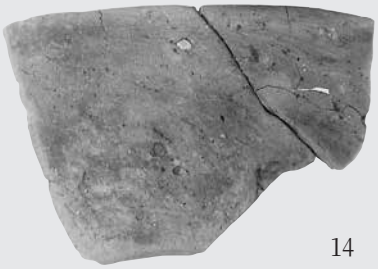
5

6
7

12

11

13



14

10

9

8

15

31

32

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

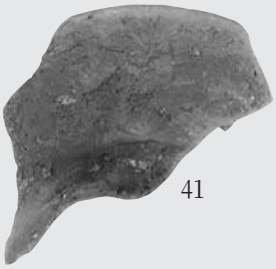
26

27

28

39

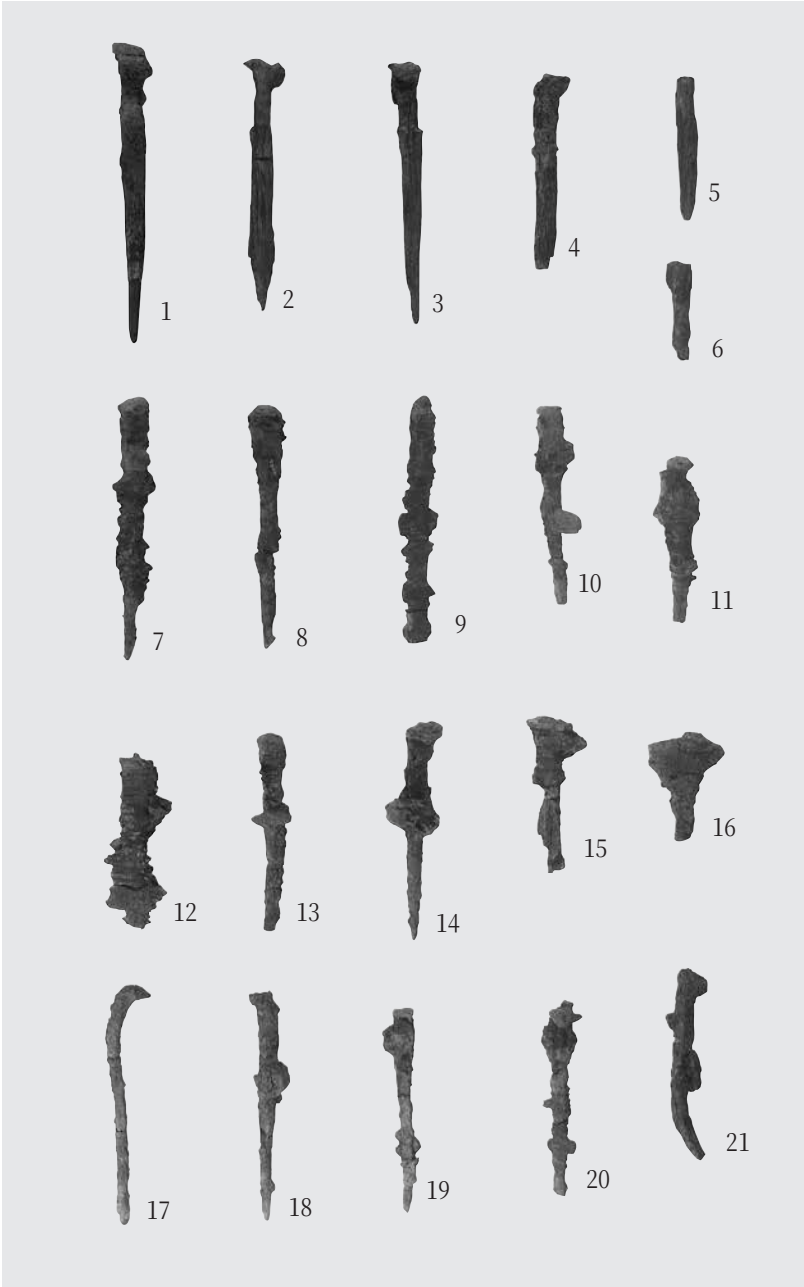
40

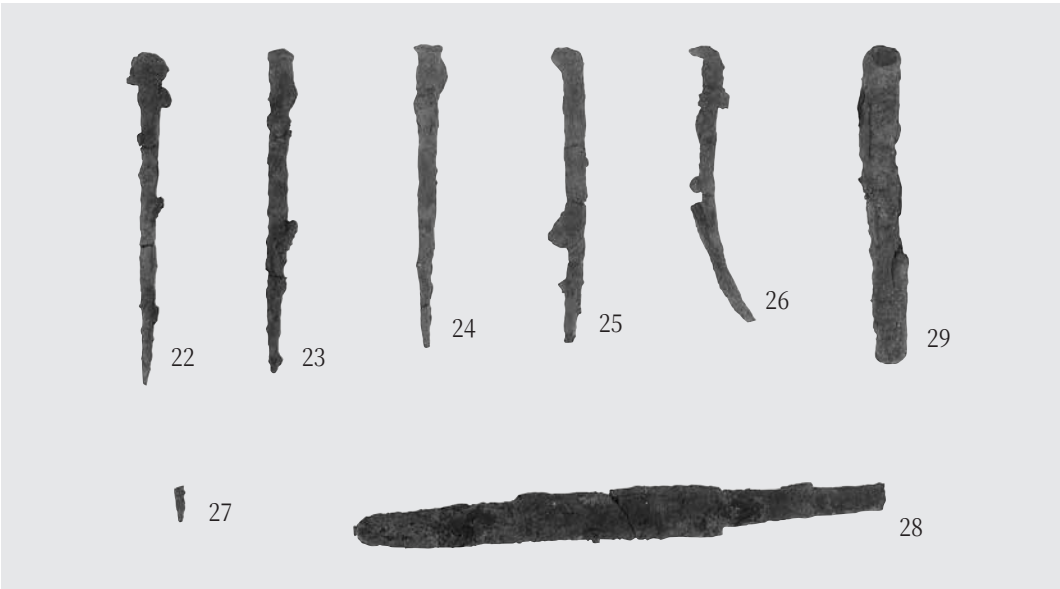

41

42

43

44


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

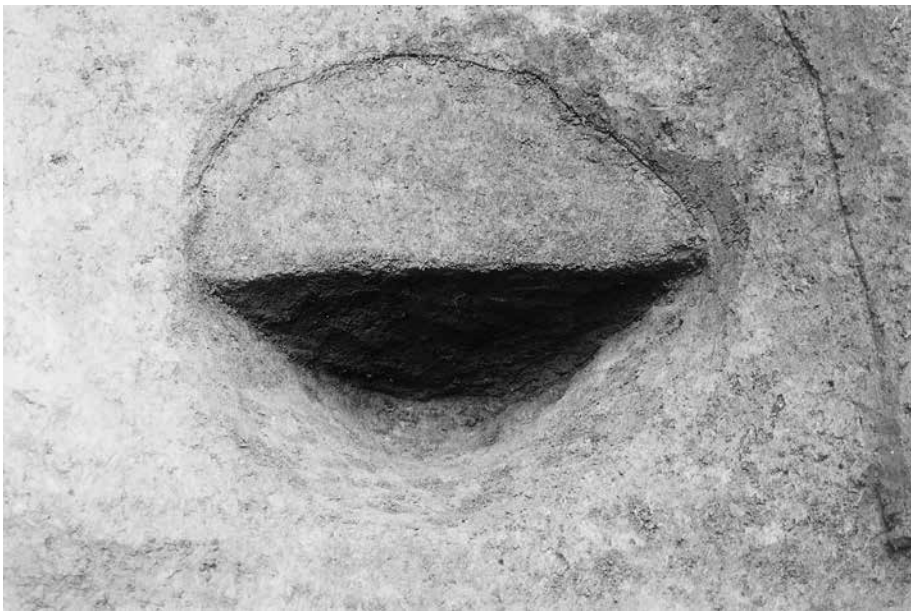

22
23
24
25
26
29
27
28

第３トレンチ全景（東より）

第３トレンチ断面（東より）

第７トレンチ全景（東より）

第７トレンチ北壁断面
（南東より）



第７トレンチSK1701断面
（北より）

第９トレンチ全景（北より）

第９トレンチ
１号墳丘と東壁断面
（北西より）

第10トレンチ全景（北より）

第10トレンチ東壁断面
（北より）

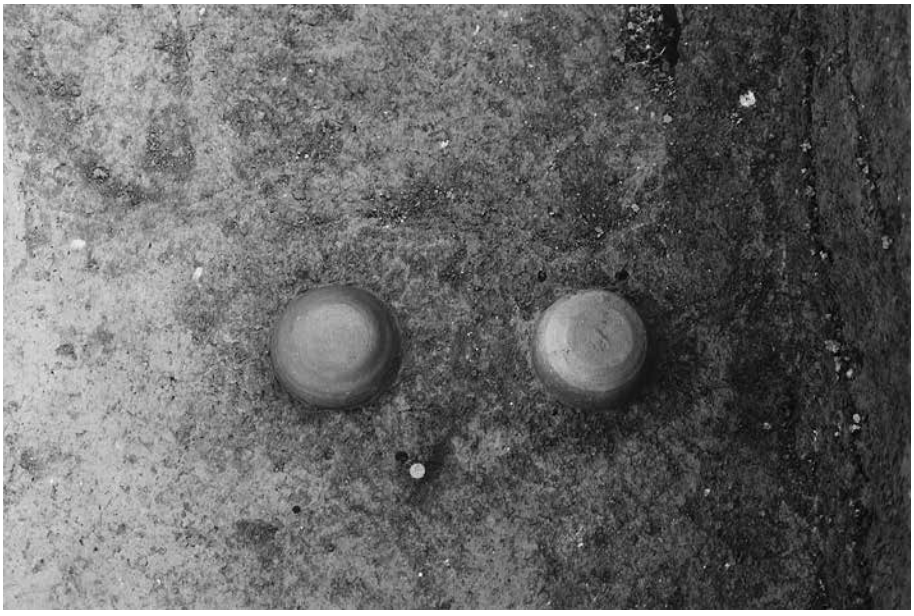
第10トレンチ
1号墳くびれ部（北東より）

第11トレンチ全景（北より）

第11トレンチ　東壁断面
（北西より）

第11トレンチ
土壙墓検出状況（南東より）

第11トレンチ
土壙墓全景（北西より）

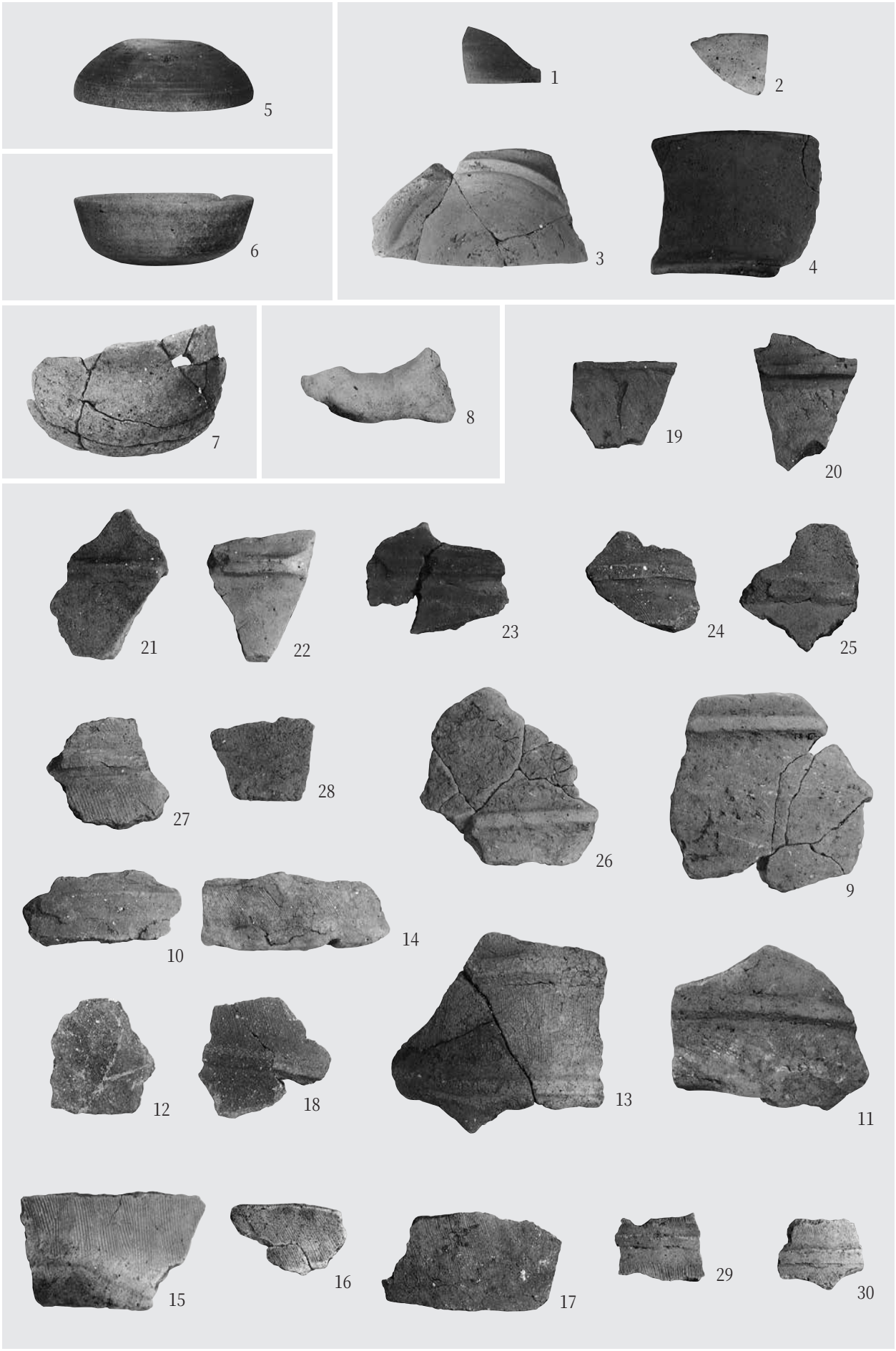


第11トレンチ
土壙墓須恵器出土状況

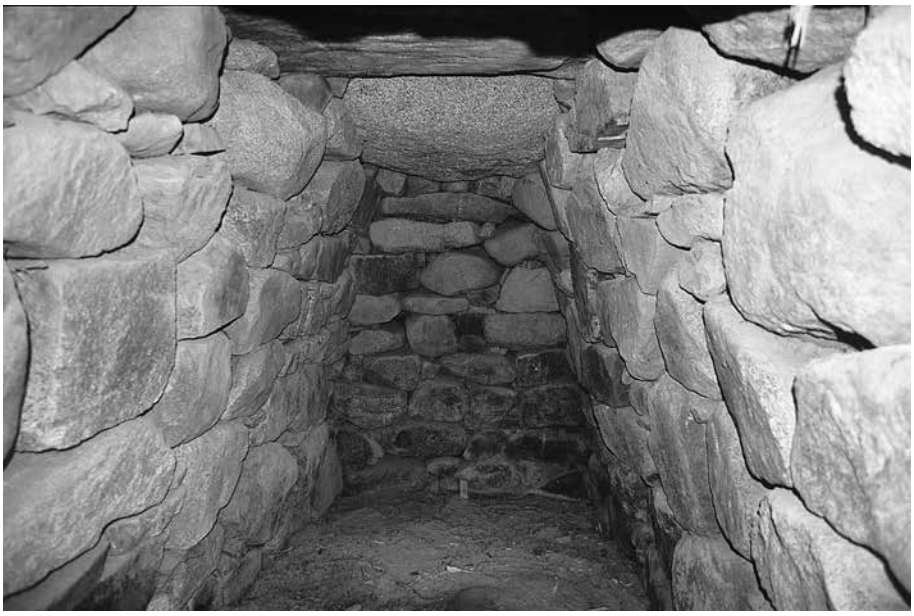
第12トレンチ全景（西より）

第12トレンチ北壁断面１
（西より）

第12トレンチ北壁断面２
（西より）


1
2
3
4
5
6
7
8
19
20
21
22
23
24
25
27
28
26
9
10
14
12
18
13
11
15
16
17
29
30

石室開口部



石室奥壁

石室玄門部

南側階段

南側階段設置状況

南側防護柵

園路設置前

土系舗装施工状況

園路設置完了状況

用水枡取壊し前

用水枡埋戻し状況

用水枡埋戻し完了状況

2号墳くびれ部施工前

2号墳くびれ部
盛土完了状況1

2号墳くびれ部
盛土完了状況2

北側階段設置前

北側階段設置状況

北側階段設置完了状況

北側広場整備前

北側広場整備作業状況

北側広場整備完了後

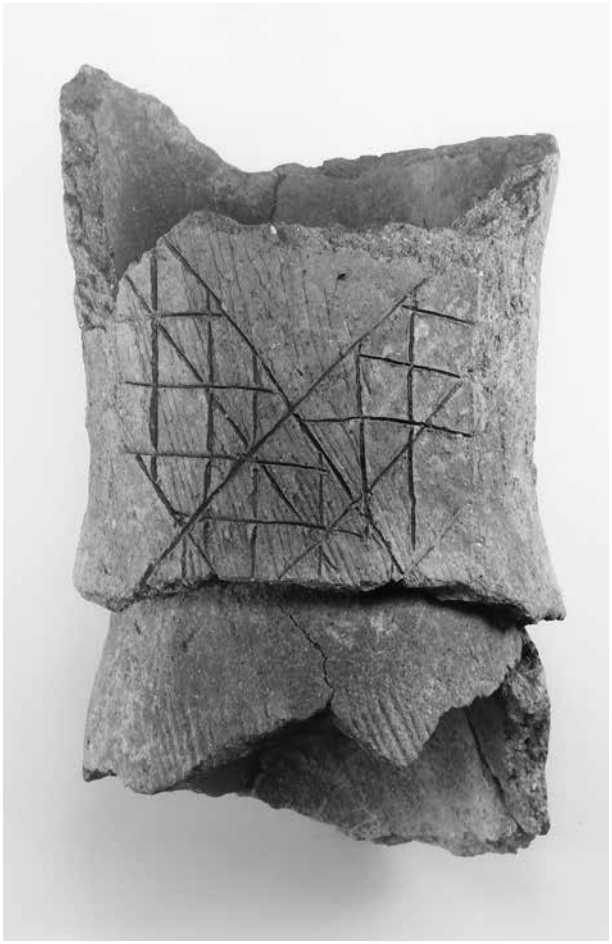
北側広場看板移動後

仮設道路施工前

仮設道路撤去後

案内板１・２設置状況

説明板１・２設置状況



珠城山３号墳巫女形埴輪

15

14

16

19

22

24

25

27

28

29

30

31

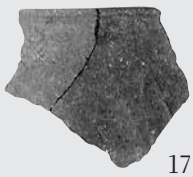
33

32

26

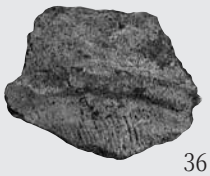
34

35


17

18

21


36

20

23

1

3

4

7

8

9

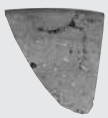
12

13

2

5

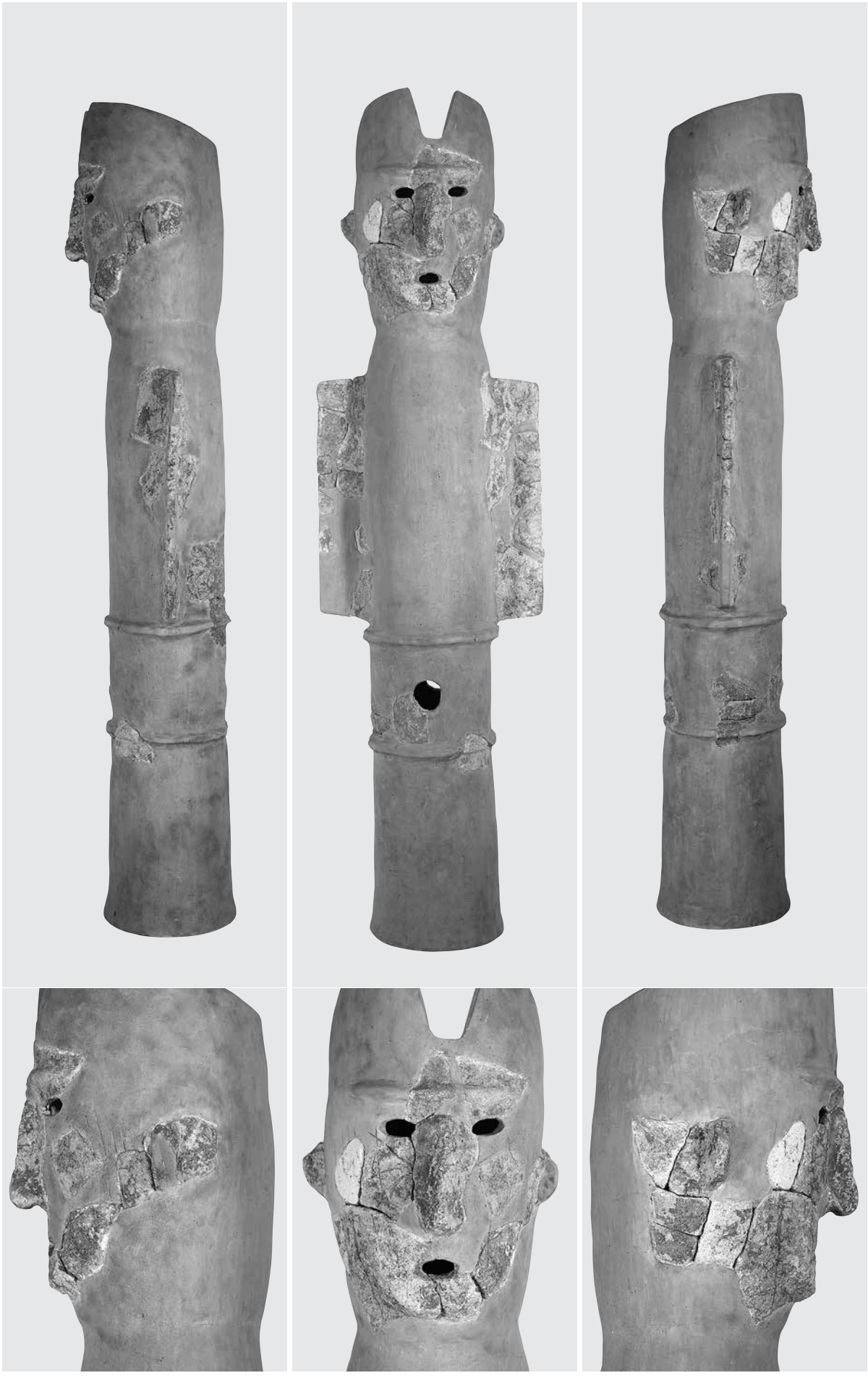
6


10

11

図版36

盾持人物埴輪



報 告 書 抄 録

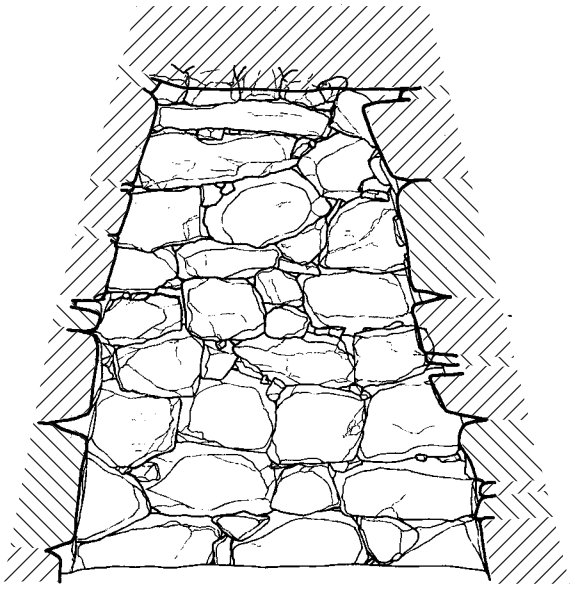
ふ り が な	くにしせき　たまきやまこふんぐん
書　　名	国史跡　珠城山古墳群
副 書 名	第４・５次調査及び史跡整備報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第29集
著 者 名	丹羽恵二・橋爪朝子
編 集 者	丹羽恵二
編 集 機 関	桜井市教育委員会　文化財課
所 在 地	〒633-0074　奈良県桜井市芝58-2　TEL0744-42-6005
発 行 年 月 日	2007年３月30日
所収遺跡名	珠城山古墳群
所 在 地	奈良県桜井市大字穴師
コ ー ド	市町村　292061
遺 跡 番 号	奈良県遺跡地図　11－D－490～492
北　　緯	34°32'47"
東　　経	135°50'54"
調 査 機 関	2005年２月14日～３月31日（第４次調査） 2005年８月３日～10月20日（第５次調査）
調 査 面 積	第４次調査　126.25㎡ 第５次調査　120㎡
調 査 原 因	史跡整備に伴う範囲確認調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
珠城山古墳群	古墳	古墳時代 ～平安時代	古墳墳丘、掘割り 土壙墓、木棺墓	埴輪・須恵器 土師器・鉄釘 黒色土器	

桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書　29集

桜　井　市
国 史 跡　珠 城 山 古 墳
－第4･5次調査及び史跡整備報告書－

発 行 桜 井 市 教 育 委 員 会
文　　化　　財　　課
〒633-0074　奈良県桜井市芝58－２番地
TEL　0744－42－6005
FAX　0744－42－1366

年月日　平成19年３月30日

印 刷 株 式 会 社 明 新 社
〒630-8141　奈良市南京終町３－464